

Li-tweet 四月号

特集 花に嵐のたとえもあるさ

崎本智 (6)	「灰色の陽と冬の紫陽花」	… 7
常磐誠	「僕が憶う人」	… 24
る	「独り言」	… 30
小野寺那仁	「オウンゴール」	… 33

巻頭紀行文	イコ	「ベルガマの犬、エフェスの猫」	… 2
-------	----	-----------------	-----

自由創作	る	「木の翼」	… 53
	Rain 坊	「ヒトリと一人」	… 59
	日居月諸	「風が吹くたび春が来る」	… 67
	とーい	「瑠璃色の記憶」	… 82

連載	常磐誠	「I believe your brave heart」	… 86
----	-----	------------------------------	------

企画

対談	日居×小野寺	「引き裂かれる小説家」	… 94
読書会		「黒田夏子『a b さんご』を読む」	… 98
第2回東京オフレポート		「書を持ち、街で会おう」	… 110

記録	… 115
----	-------

編集後記	… 117
------	-------

ベルガマの犬、 エラエスの猫

イコ

一八九〇年、和歌山県沖で一隻の船が遭難する。日本の台風を軽視したトルコの船だった。岩礁に激突し、船は沈没した。船を逃れた水兵が四〇メートルの絶壁をよじ登り、紀伊半島南端にある檜野崎灯台の灯台守に遭難を告げると、付近の村の人々は総出で救助活動に当たった。村人は生存者を寺や学校に収容し介護した。寒村で食糧に乏しく自分たちの生活に精一杯の村人だったが、非常食としてとっておいた鶏を与えて傷病者に食べさせるなど、献身的だった。結果生き残ったのは、六〇〇人以上もいた乗組員のうち、たった六九名。話を聞いた明治天皇は乗組員を軍艦に乗せ、トルコにおくりとどけた。

エルトゥール号事件はトルコでは有名で、学校の授業でも扱われるそうだが、トルコに親日家の多い原因のひとつとされている。この話、トルコに旅行しようと思ひ、調べるまで知らなかったのだが、みなさんは「存じだっただろうか。現地でもことあるごとにこの事件のことが言われた。

「わたしたちトルコ人はみんなエルトゥール号のことをおぼえています。ですから日本のみなさん大好きです。お安くします」

絨毯屋ではこのように商売にすら利用されており、苦笑してしまう。イスタンブール市民に街頭アンケートを取ったという記事があつて、それを読むとさすがに「みんな」というのはあやしいようだが、多くの人が一〇〇年以上も前の事件を知っているのは事実といつてもよいかもしれない。

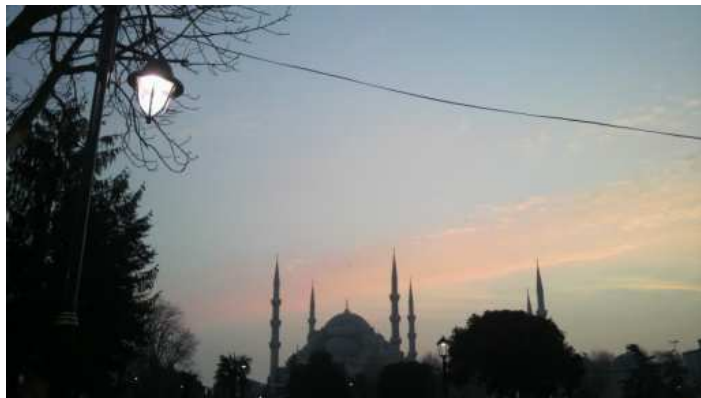
これは親日云々ではなく、日本人の意識の問題だけれど、ツアーで回った場所では多くの人が日本語を知っていて、日本に旅行や留学をしたと言う人もちらほら、民家の扉の向こうからは「コニチハー！」という明るい声、ホテルの土産物売り場には『南国少年パプワくん』を読んでいる女性店員もおり、えっ、こんな速いトルコで？ と、たびたびおどろかされた。トルコ語を知らなくて平気なのか、と不安に思っていた国で日本語が飛び交う。たまに常識程度の英語が使えれば気持ちよく一〇日間を過ごさせてしまう。回ったのが観光地で、日

本人がお得意様だから、日本語を理解するのが向こうにとつても都合がよいからだろうが、海外旅行の素人としては、なんとなく遠近感を狂わされるような気持ちがあったのだ。

繰り返すようだがこれは日本人の意識の問題で、トルコ人はみんな日本が好き、というよりは、日本人がそう考えたがつている、という方が正しいと思う。エルトゥール号事件は、旅人にやさしいトルコ人の、あるいは絨毯を買ってもらいたい商売人の、日本人向けのエピソードである。

池澤夏樹が『イスタンブール歴史散歩』の中で、「現代の日本人の世界観の中でトルコという国はおそらくヨーロッパのずっと先の方に霞んでいる」と述べているが、学生時代に世界史を勉強していたにもかかわらず、トルコアイズとモスクの塔くらいしかぱつと思ひ浮かばなかつた身としては、たしかにトルコはヨーロッパよりずっと遠いな、とうなずいてしまう。

地図上では同じアジアとしてくられることもある国だけれど、その中身は知らず、予想もつかない。旅行する前は、ただ尖塔が夕陽に映える一枚絵のようなイメージの、エキゾチズムを刺激される国だった。旅行の一〇日間を経て少しばかり立体的にはなつたが、異国感はいっそう増している。旅行を終えても、もつと知りたい、という気持ちが動く。東西の文化が交錯する、歴史の重要拠点のひとつでありながら、知らないことが多すぎて、裏にされたトランプを、一枚ずつめくっていくような緊張感とわくわく感がある。ひっそりかえったカードを見て、なおひきつけられてしまうような、魅力のある国である。ここに少しだけのぞくことのできたトルコを、ちらつと紹介しようと思う。



イスタンブールに夜が来る



アスクレピオン (バルガマ)

太陽の角度により、石柱のかけが地面や壁に当たって縞模様をつくる。ひかりとかけの芸術である。

トルコというとイスラム教圏のイメージが強く、ついイスラム教寺院を思うかべてしまうのだが、意外なことに、西部トルコはギリシャと国境を接し、地中海、エーゲ海に面しているのだった。現在のトルコ系の先祖であるムスリム（セルジューク朝、オスマン朝）が中央アジアから入って来るまで、アナトリア半島は、長いあいだキリスト教、ビザンツ（東ローマ）帝国として隆盛をきわめていた。

穏やかなエーゲ海に沿い、なだらかな丘と、背の低い石づくりの家々が続く。ギリシャ・ローマ時代の遺跡があちらこちらに残されているが、歴史的に見て

も、トルコ人よりヨーロッパ人の方が発掘に熱心である。トロイ遺跡を発掘したドイツ人、シュリーマンの逸話は聞いていて飽きない。

「あの人はトロイで念願の財宝を見つけると、雇った人夫に金を握らせ帰らせてしまい、トルコ側との約束を破ってこっそりすべて持ち帰ってしまった。そして自分の奥さんを財宝で着飾らせ、写真を撮って雑誌に発表したのです。バレないとも思っただんどうかね。わたしたちはシュリーマン、嫌いですがでもシュリーマンの後で発掘に来た人は荒らさなかつたのでわりと好きです」

現地ガイドがおもしろおかしく話してくれる。

各地の遺跡で多く見られたのはトルコ人よりも東洋人のすがただった。韓国人、中国人、日本人がそれぞれ一団となり写真を撮って回っていた。遺跡にはそもそも人は少なく、石ばかり冬の風に吹かれていた。

バルガマではアスクレピオンという医療施設に立ち寄った。入口にあるトンネルは長く暗く、病人の足音も聞こえてきそうだった。

建物の破風には「死が立ち寄るべからず」と書かれていたそうなのだが、実際にアスクレピオンでは死者がめつたに出なかつたらしい。それだけ聞くと当時の医療技術が奇術めいたものに見えるのだが、種明かしをすれば何のことはない。死にそうな病人をアスクレピオンに収容しなかつたのだそうである。エフェスは街ごと復元されている。

住宅、神殿、公会堂などが、石畳の街路に沿ってならぶ。

かつて一二〇〇〇巻の書物があつたという大図書館も復元されていた。図書館と売春宿がトンネルでつながっており、「ちよつと図書館に行つて来るよ」などと言つて出かけた男が、実は売春宿にふけこんでいた、というのおもしろい話だった。

遺跡にはどこにも劇場がある。

半円形、階段状に座席の並べられた施設で、「劇場」というが、ローマ時代にはただ観劇して楽しむだけではなかつた。映画などにも表現されているが、アフリカから連れて来られた奴隷を野生動物と戦わせ、それを見て楽しんだという話だ。奴隷が死ぬまで戦いは続けられたらしい。



犬が観光客についてくる



動物に立入り禁止の場所はない

風の吹きしき中、人のいない冬の遺跡を歩いていると、かつてここに人々が暮らし、賑やかな街路を歩いていたんだ、という思いがつよくなる。一〇〇〇年以上も前のひとりひとりとすれ違っているような気になるのである。にぎやかな街のすがたが、さびしさのなかに浮き上がって来る。

ベルガマには犬がいた。

エフェスには猫。

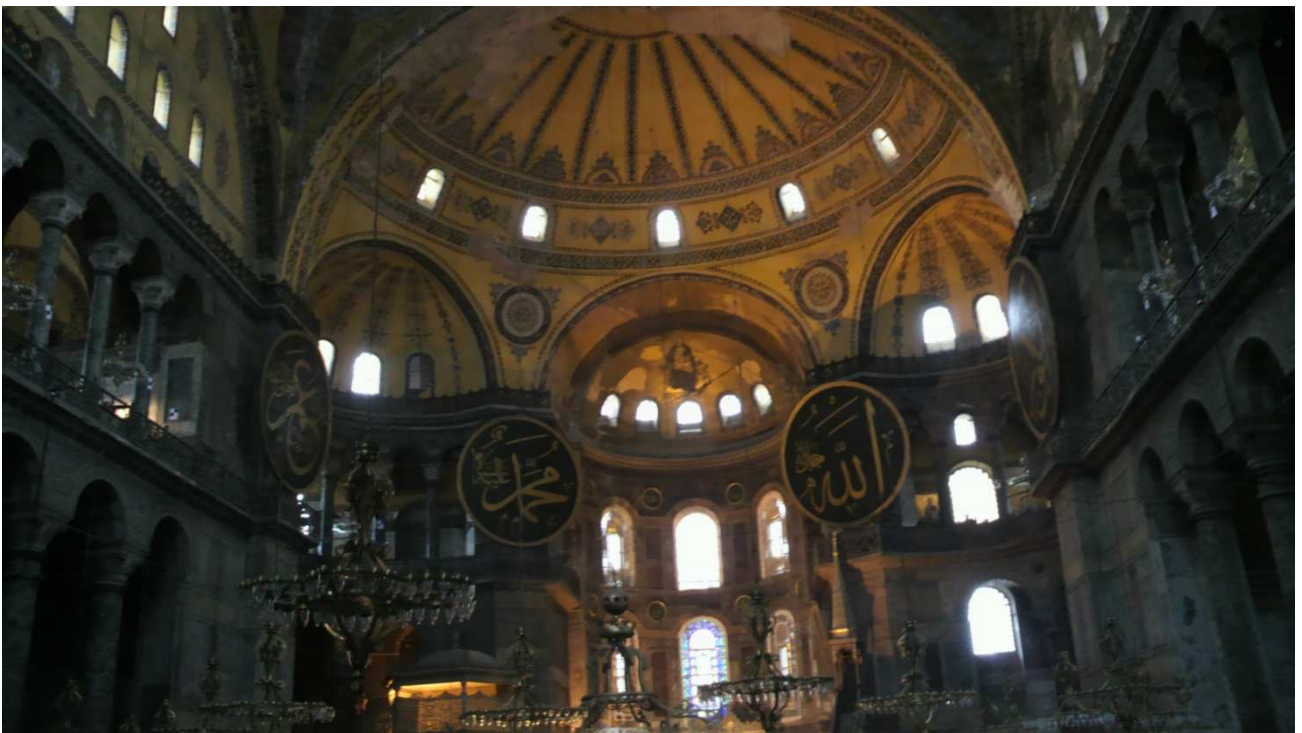
動物が遺跡の上を走ったり、寝転んだりしている。人の入ることのできない場所にも自由に入れる。今、遺跡を寝床や遊び場にするのできるのは、かれらだけだ。

遺跡をフィールドにして全力で鬼ごっこをしたら、とても楽しいだろう。

モスクは写真におさまりきらない。ギリシャ語でハギア・ソフィア大聖堂、トルコ語でアヤソフィアジャーミイ、現在は博物館となった大モスクは、規格外の建物だった。高い天井にも装飾がほどこされており、見上げていると首がいたくなってしまふのだが、それでも目をすいつけられてしまふ。

ローマ帝国時代、コンスタンティヌス帝の命令により建築が始められ、三六〇年に完成した教会は、何度も焼けながらも、ギリシャ正教の大本山としてあがめられ続けた。現存する円屋根の大ドームは直径三一メートル、建物の高さは五五メートル。一〇〇〇年間以上も世界一の規模の教会だった。後世の建築家が何度挑んでも、アヤソフィア以上の建物を作ることができなかったという。

話を聞いていておもしろいと思ったのは、帝国がオスマン・トルコの征服を受けた際、この教会が取り壊されず、そのままイスラム教寺院として生まれ変わったところだ。宗教が変わる以上、壁面に描かれたキリストの絵は消されても仕方がないのだが、メフメット二世は絵に石灰を塗りつけ見えなくし、保存したのである。現在は石灰が取り払われて、モスクはイスラム教とキリス



アヤソフィアジャーミイ内部

ト教が混在した、稀有な建物として残っている。なにしろ巨大だから、打ち壊して新たに作るよりもそのまま利用した方がいだろうというような、政治的な思惑もあっただろうが、キリストが後世に残されたところを考えると、現地ガイドの「メフメット二世は理解がある人物で」という言葉を信じたくなる。「征服王」の名を冠される人物だが、宗教や芸術に対しては敬意をもっていたように見えてくるのだ。

写真中央に描かれているのがキリスト、左右につけられた円盤のようなものには、それぞれイスラムの聖人をあらわす文字が刻まれている。向かって見ると、キリストの左隣がムハンマド、右隣がアッラーである。

さすがはイスタンブール。アヤソフィア、ブルーモスク、トプカプ宮殿などの大きな建物には、東洋人だけではなく、世界中からたくさんの観光客が来ていた。髪の色も目の色も服装も多種多様、建物を見上げるのも楽しいが、あたりを見回してどの国の人だろうと想像するのも楽しい。東洋人はすぐに分かる。建物までの道には、さまざまな物売りがいる。大道芸人のように紐のついたコマを回して手に載せ、はにかみながら見せてくる少年がいる。コマを買ってくれということだ。また写真のように、金色のポットをベビーカーのような車に積んで移動するのはチャイ売りである。トルコチャイは特別な作り方をするので、日本では同じものをなかなか飲めない。



イスタンブールの街路に立つチャイ売り

世界三大料理のひとつとして数えられるトルコ料理はその種類の豊富さにおどろいたが、ガイドによるとオスマン朝時代、宮廷に捧げる料理として発展したという話で、現在では誰も調理しないために忘れられてしまったものもたくさんあるらしい。

チョルバ（スープ）は種類が多い。ハウレンソウやレンズ豆、臓物など、あっさりしたものからどろどろした濃いものまで何でもあつて、レストランに行くとかならず出される。店に行くたび、次はどのスープだろうと心がおどる。米が入っていることもあつた。

スーパーマーケットには、棚いっぱいクロール社のチョルバの素が置かれていて、たくさん日本に持ち帰った。イシユケンベ・チョルバという羊の胃袋のスープは、現地では飲めなかったのだが、とくにクセが強いらしく、高橋由佳利の『トルコでも私も考えた』によると、「ニンニクと油でギトギトしている」スープであり、高橋自身は飲めないと断った上で、男性が「夜遅くお酒を飲んだあと」にするのはこれに限るらしいのだと言っている。羊の胃袋とは、いったいどんな味なのだろう？

宗教上の理由で豚肉は食べない。牛肉も、気候が飼育に適さないらしく、あまり見かけない。鶏肉や羊肉が多く、とくに鶏肉はよく出た。羊はバス移動の際によく見かけた。道路を群れが横断するために、バスを一時停止させられたこともあつた。

ケバブは塩が抜群にきいていて、刺激的な味。下の写真のなかでとくに美味しかったのは、奥に見える、おわん形に整えられたピラウという米だ。細長く鍍のような形のインディカ米に、バターやサフランなどをまぜる。口の中で香りがむっと立ち、米がほぐれていく。



メインはケバブ（肉）で、ピラウはあくまで添えもの



スポンジケーキ（左）、カダイフ（右）



野菜入りのクリームチョルバ



ラク酒



アイラン

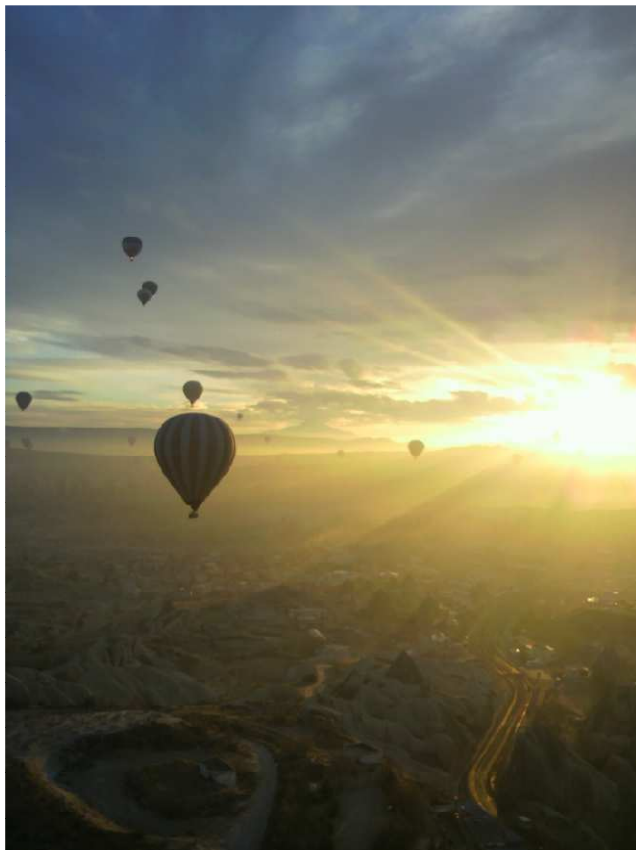
基本的にはどの料理にも味がしつかりついている。デザートにも砂糖をたっぷりまぜているので、ものすごく甘いのだが、疲れたからだにはじわっとしみこんでくる。緑色をしたものにはピスタチオがまぜてある。地中海やエーゲ海沿岸はピスタチオの名産地だ。なめらかで風味豊かである。

ラク酒はそのままだと無色透明だが、水を注ぐと白く発色する。むかし理科の実験で扱った石灰水を思い出して笑った。アルコール度数がものすごく高いため、飲むのは注意が必要だが、飲んでみると料理によく合う。トルコにはビールも置いてあり、イスラム教国にしては飲酒に寛容であることが分かった。

どこのレストランにも、アイランというヨーグルト飲料が置いてある。現地人は食事中、水を飲むよりもアイランを飲むことが多いらしい。塩入りの「飲むヨーグルト」のようなもので、ケバブのような肉といっしょに食べると、肉をとかすような感じで、とても美味しい。ツーリストのなかでひとり何度も頼んでしまうほど舌になじんだ。帰国後もついヨーグルトに塩を入れたくなる。

ペルシャ語で「美しい馬の地」を意味するカッパドキアには、気球が飛んでいる。申しこむと、奇岩や日の出といった景色を高度一〇〇〇メートルからおむむことができる。

キノコのような形をした岩は火山灰が降り積もってきたもので、やわらかく掘り進むことが容易なため、迫害されてきたキリスト教徒の隠れ家となった。地下何層にもなるトンネル都市カイマクルは、敵の来襲時、見つからないようにするための非常用住居だったらしい。通路は、頭をかがめなければ歩くのもままならない。穿たれた空気孔の奥から風の音がさびしげに鳴る。都市のイメージとはかけ離れているように思う。ここに逃げこまなければならなかった



気球に乗って見た初日の出

キリスト教徒の苦勞がしのばれる。

まだ暗いうちにホテルを出て、気球が上がるのを待つ。

さいわいにも一月一日の空は晴れていた。気球に乗るとあつという間に上昇していき、溪谷や、まばらな人家、遠くの街が、見晴らせるようになる。

アナトリアの山からあたらしい年の太陽がのぼってくる。まぶしいひかりが溪谷を橙色にかがやかせ、人間の乗った小さな気球を黒く染めていく。何か言おうとして待ちかまえていたのに、頭の中から言葉が消えていく。

運転手は一度谷底すれすれまで気球を下げ、それから一〇〇〇メートルまでぐんぐん上げた。降りた後には共にジュースを一杯やり、笑いながら写真を撮った。運転手も気持ち良かったのだろう。

思えばたくさんの人懐っこい笑顔に出会える旅だった。トルコの人の笑顔には、たしかに仕事以上のものがあつた。(了)

特集

花に嵐のたとえもあるさ

灰色の陽と冬の紫陽花

崎本智 (6)

*

曇り空が由比ヶ浜沿岸の街を蔽っていた。風をつよい午後で波風が水平線の向こうから吹き、防波堤に白い波がぶつかり砕け散っている。僕は教室からうごめいている灰色の海をみつめている。窓から見ている分には無音の世界だった。年久しく海など見ることはなかった。波は荒れ水嵩は増えていく。秒針の音だけが耳に入ってきて視界がぼやけ眩んだ。さつき見ていた夢が何だったのか思いだす

ことができない。呼吸を気付かれないように整える。周りの生徒たちは大人しく教員の声に耳を傾けている。僕はいつもおきざりにされていた。意識はまだ泥のなかにあっただ。やっと戻ってきたらこうして灰色の海を眺めていたのか。大型船が海上にいる。ここからだと玩具の舟のようにちいさい。教員に肩をたたかれるまでぐっすりと空調の効いたあたたかな教室で眠っていた。授業は終盤だった。教員の声は僕には届かない。遙か向こうに見える無音の海だけが現実であるような予感。嵐のような波の高さが僕にはとてもなつかしいものに感じられていた。聴こえてくる、ほんとうは聴こえない想像上の波の音。波の音は僕の脳内に浸透して繰り返されていく。灰色の海が僕の意識の深い部分に共鳴していたのかもしれない。こんなことをいうと周りの友人たちにはかきさされるけど。終礼の合図と同時に僕の意識は水面近くまで上がってくる。

倫理の授業が終わり、古村が鞆を抱えて教室をでていくのを目の

端でとらえた。おとなしい女の子で僕は彼女のことをよく知っていた。古村はクラスのだれとも話をせず冬枯れ木立がならぶ校庭を歩いていた。陽は雲間から光を校庭の土に落としていたがわずかな量でしかなかった。僕も友人から小説を借り適当な話を済ませて下校する。下足室に降りたときつめたい風が校舎に入ってきた。詰襟は寒くはなかったけどマフラーを巻いてくれば良かったと思った。寒気がおとずれて太平洋側も本格的な冬をむかえる。陽はまた雲のなかに隠れてしまった。校門までつづく桜の木は幾条もの枝を天にのびしながら聳えている。蕾は枝枝にみつけることができた。並木道の小枝の下を幾人もの学生服を着た集団が通り去っていく。おおきな高校だったから別棟からも集団が吐きだされている。

僕は憂鬱そうな顔をしてひとり歩いていった。天気が悪くて気持ちものらない午後何を考えていいのか見当もつかなかった。バス停に着くまでの途中で雹がふりはじめた。鎌倉で生まれて十七年、初めて雹をみた。雹は薄い雲から生まれて地面にたたき落とされていった。だれも傘をもっていなかったから、生徒たちは一様に雹の犠牲になっていた。停車場に同じ学校の生徒がいて古村もいた。皆も僕と同じように憂鬱そうな表情をしてバスを待っていた。鞆から参考書を取りだして眺めている子ばかりだった。僕は長椅子に座らず古村の後ろで立って待つことにした。厚くなった雲は静かに上空で浮かんでいる。野球部のバットの金属音が校舎からひびいてくる。雹のなか練習をしているのだろうか。

ふいに古村の髪に氷の粒がついていることに気がついた。氷は溶

けるようすもなく髪についたままだ。気がついていないのだろうか。僕は古村に気やすく髪の毛についた雹を指摘することもできなかったから本を出して読んでいた。古村とはじつはもう何年も話していない。バスのなかは混みあっていた。古村は偶然あいた席に座り英単語帳を眺めていた。僕はすぐ傍に立ち、吊革をにぎりながら詩集を読む。古村は僕に一瞥もせずに英単語を声にださず暗唱していた。唇のうごきで分かる。雹のふる街には人気はなく幽霊のような街を車の行き来だけが盛んになっていった。〈市役所前〉で古村の隣の席の客が降り、入口からどこから現れたのか、大勢のひとが乗ってきた。

「中におつめください」という整った声が聴こえ、ふいに僕は古村の横の席に腰を下してしまった。古村は水色のイヤホンを耳につけて英語を聴いていた。イヤホンから明朗な発音がもれ聴こえてくる。髪についた雹はもう溶けてしまったようだ。昔はよく遊んだのに中学で離れてから偶然高校で再会しても、向こうはだれとも話をしなかったから僕も話しかけることができなかった。気まずさを感じていたが古村はもしかしたら知らんぷりをしているのではなくほんとうに気がついていないのかもしれない。昔のことなど忘れて僕のことも記憶していないのかもしれない。あの頃の古村はもういないのかもしれない。僕の隣で座っているのはほんとうに別人なのかもしれない。彼女は顔色一つ変えずに英単語を覚えつづけている。曇り空の街を走りながら車内は暗澹とした雰囲気で乗客は決まりごとのように口を閉ざしていた。靴についた雹や雪が車内の床を黒

く染めて陰気な印象をよりつよめていた。僕はだんだん気まずさになれていったのかもしれない。この記憶喪失の古村とこれからどこかへ旅行にでもかけるような気持ちで愉快になっていた。

バスが海から離れて緩やかな傾斜地となっている住宅地の方を走りはじめる頃には乗客の人数はだいぶ減っていた。丘の上に僕の家があつて古村の家もある。もう高三になるのにそんなことをいまさら思いだしていた。中学を過ぎた頃から僕たちの交流はとだえた。最後に遊んだのは小学校最後の夏休みでとびきり暑い日だった。数人でかくれんぼをしていたがだれとしていたのか覚えていない。あの日のことを思いだすと僕と古村以外の友人の顔はのっぺら坊で登場することになる。僕が古村を竹藪近くのごく細い路地でみつけたとき、古村は泣いてしまう。ちいさな排水溝に黒い水がながれていて、路地の角にはお地藏様が立っていた。湿気の多い場所で草いきれや苔むした匂いが辺りにたちこめていた。どうして泣いているのか分からず僕はおろおろした。なぜ泣いたのかいまになつても分からない。僕はかくれんぼを中断して古村にひたすら詫びた。古村は両手を目にあててしばらくしてから泣きやんだ。茅蝸ひぐらしの鳴き声に交じって笹の葉がすれる風の音が聴こえた。細い路地は夜のように暗い場処だった。結局僕たちはそこで何を話したのかすら覚えていない。

車内の振動が睡魔をよび、僕はうとうとしはじめた。僕は古村の

ことを考えながら夢のなかに落ちていくようだった。あの夏、路地で過ひとときごした一時から僕たちの時間は止まったままだ。そのときれぐらいぶりだろう古村が僕に話しかけてきた。

「塩田くん、何を読んでいるの」

僕のことを覚えていた。

『長い川のある國』……』

心臓がおおきな音で鳴っている。

「多田智満子さん。初めて見る名前だ。おもしろいの？」

古村はさいごに話したときと全然変わっていないように見えた。

「言葉がすごく丹念に選ばれている気がする」

「塩田くんは昔から難しいこと考えているから詩なんて読めるのね」

「ぎやくだとおもうよ。何も考えていないから読める」

「芸術ってわたしには分からない。詩を読むなんてえらいよ。あんたはえらい」

古村は笑ってこちらを見る。冗談に決まっているのに僕は不器用に受けとめる。

「そうかな……。古村こそ、たくましく生きているじゃないか」

古村は面喰ったような顔をしてまた僕をみつめる。

「たくましく生きているか。それってわたしが物凄い悲劇を背負っているみたい」

古村はふつとちいさな息をつくように笑いだす。僕は冷静になり、言葉を引つ込めるように言う。「日常で〈生きる〉なんて言葉そう

使わないか」一瞬後、古村は次のように言う。

「生きているということは一つの病気である。誰もがその病気によって死ぬ。……ポール・モーラン。わたし、桜の枝を見ながらずっとその言葉について考えていた」

「え」

「倫理の時間に新藤が言ったの」

「あいつの授業眠いから殆ど何も聞いていないわ」

「そうかな。新藤ときどき面白いこと言うよ。わたしさっきの言葉がずっと気になっているの。塩田くんもそういうこと考えるの好きでしょ」

「ビョーキってところの病のこと？　いま流行っているね。そういうの」

僕の応答が気に入らなかったのか古村は口を閉ざしてしまった。丘の上にわずかに切り開けた場処があり、そこでバスはUターンをしながら停車する。駄菓子屋やパン屋などがありちいさいけど、スーパーもある。主婦らしき女性が数名立ち話をしている。街路樹として植えられたトネリコの傍でなわとびをしている子供たちもいる。バスを降り、古村は自分の家の方角をみつめる。何年ぶりに会話をしたのだろう。僕は不思議な感慨に耽っていたのかもしれない。でももう少し話したい、ってことを素直に伝えられなかった。

「じゃあ、古村、バイバイ」

古村は両手で鞆を持ち振り返りながら「さよなら」と言った。

母はでかけているようだった。恐らく松下の家の娘さんに着着け

を教えているのだろう。嫁入り修行にお茶を習いにいくなんで時代錯誤だと僕は松下の娘さんをばかにしていた。娘さんといっても僕よりも八つ年上なのに。食卓には林檎が切られておいてあった。熱いお茶を飲み、林檎を食べながら暖房が稼働している音を聴いて呆然としていた。古村との会話を思いおこしていた。彼女とのやりとりを頭のなかでリピートする。曇天の日には夕焼けさえ見ることができず、辺りはすぐに夜になっていった。

父の書斎に入った。父がよく吸っていた煙草の匂いがまだ部屋に残っている。本棚には松本清張や西村京太郎の文庫本などが沢山並べられていた。子供の頃は本を沢山読んでいた父に密かな憧れを持っていたものだがいまはそういう感慨もない。火の気のない部屋は一段と寒く僕は身を屈めてその部屋の古い匂いのなかにいた。白い毛並みに黒の斑模様が入った我が家の猫が現れた。サロマトという名前が父がアイヌ語からとった。父が亡くなってから聞く宛てもなく意味はずっと分からないままだ。サロマトは黒い斑が右目の周辺にも入っており父はそれを見て「パンダ猫だ」と言ったものだった。サロマトもそう毎日言われると僕が小学生の頃拾ってきた当初ガリガリだったのにパンダのようにふっくらとしてきた。運動もせず家で炬燵の番ばかりしている。サロマトを半目でみつめながら僕は無気力になっていき身体をずるずると床にあずけていった。床のつめたさに身体を強張らせながら芋虫のようにちぢんでいく。サロマトは尾をつつと立て僕の顔をゆっくりと観察している。サロマトを撫でてやりながら僕は自分を忘れそうになる。そうして僕はまた鞆

から詩集を取り出して暗い部屋で読みはじめた。最早、何が書かれてあるのか意味を読みとることもできずただ目をうごかしていた。そのうちに意識が失われていく。午後六時になったとき大正からあるという我が家の柱時計が鳴りひびく。僕は身体を震わせて辺りを見回すと毛布がかけられてあった。

「禎夫。父さんの部屋に行くのは構わないけど床で寝ないですよ」

階下からおおきな声で言われる。なぜ僕が起きたのに気がついたのか分からない。姉が夕食を作っているようだった。包丁で野菜を切る音がして味噌汁の香りが漂ってくる。

「夕飯、何？」

「ぶり大根と角煮。ねえちゃんの得意料理よ」

「……」

姉、瑠璃はいつも明るい。僕は根暗で姉から注意を受けてばかりいる。対照的なきょうだいで周りの大人たちにはいつも比較された。姉は都内の大学の薬学部に在籍していた。なぜ薬学部なのか、薬剤師になりたいのか僕は訊いたことがなかった。けど姉がはつきりとした理由を持っていることは分かった。姉は薬品の研究に没頭していた。家に帰ればいつも勉強をしている。他にやりたいことがないのだろう、僕はそう思っていた。姉の化学の知識は異常なぐらいだった。明るい姉がなぜそこまで勉強に没頭できるのか、いつも不思議に思う。姉の明朗さについていけない僕は自室に戻り、数学の予習をする。「導関数」を習ったばかりで僕は苦勞して問題を解いていた。数学はいつもすぐ集中できるのに、久しぶりに古村のことを

意識したせいか妙に落ち着かない。立ち歩きながら教科書を読んでも全然頭に入って来なかった。朔太郎の詩も吉本隆明の詩を読んでも集中することができない。部屋の隅に隠してある卑猥な本を眺めて見てもその気持ちを抑えることはできなかった。古村の肌に触れたい、匂いを嗅ぎたい、明確にそう思ったのはそのときが初めてだった。

小六で古村と同じクラスになった。それまでの五年間はずっと違うクラスだった。小学校には入るまえから古村のことは知っていた。家族間で付き合いがあった。けど五年間同じクラスにならなかったからあまり遊ぶこともなかった。古村は生き物や動物が好きで飼育委員になっていた。いまみたいになれとも話をしないこともなく明るく元気な女の子だった。髪を肩まで伸ばして赤色のリボンをつけていた。白いシャツにサスペンダーでとめた紺のスカートを穿いてきていた。水泳が得意で勉強がよく出来た。クラスでも一目置かれる子供だった。僕はその頃、絵画教室に通っていて絵を描くことに夢中だった。古村は「塩田くんはとても絵が上手」とよく僕のことを褒めてくれた。僕は古村の良いところを褒めることができずにもじもじしていた。古村は僕のスケッチブックをときどき勝手に見ていた。「これは何」と僕が素描していた海の世界を描いた絵に興味をしめした。「イルカとペンギンの楽園」僕はそうつぶやいた。「可愛い」古村はその頃から僕のなかで特別な女の子だったのかもしれない。僕の絵は学年でも評判になり県のコンクールで入賞したこともあった。僕は得意げになり休み時間は友達と校庭に見える木々た

ちをデッサンすることにはまっていた。中学になり、そういう行動が「調子にのっている」と言われるようになり、僕は一時期不登校になる。中学は古村と違う学校だったため彼女の中学時代について僕は全然知らない。病気でもないのに布団のなかに入り半年ほど過ごしていた。何がきっかけだったのか分からないがいつしか保健室に通うようになり友人たちの助けもあり学校にまた通うようになった。

僕は日曜日のある朝、海岸にでかけた。季節は梅雨まえだったと思う。画材道具一式を抱えて海を見にいった。砂浜には殆どひとりもいずサーフィンをしている青年が数名いるばかりだった。沖には一艇のヨットが浮かんでいた。僕は砂浜に体育座りをして画板を膝にあずけて灰色の海を描いた。生あたたかい風がおだやかにふいていた。お尻の下は砂はすこしだけ湿っている。いまにも雨がふりそうだったけど、今日みたいに海は荒れておらず波はゆったりとたゆたっていた。海という容器はあまりある水をもてあましているようにも見えた。僕は二時間ほどで絵を描き上げた。灰色の空、灰色の海で少年がちいさな背中を向けて素描をしている絵。その絵を最初で最後の自画像と決めた。僕はもう絵画世界のような深海にはもぐらずに友人たちと浅瀬であそぶことにする。言葉にできないような決意をかためたと、画板を海へ放り投げた。画板は船のように沖へ旅立っていった。絵具チューブの黄色や橙色や赤色を取りだして海へ向けてしぼりだす。明るい色たちは真下の蒼にのみこまれていった。僕の二十四色の絵の具はそうして海のなかで交ざりあっていた。

た。三年分のお年玉で買ったホルベイン社製の三本の絵筆も順番に折った。もう二度と描かないための決意として。僕は浜辺近くの高い丘の上に生えてある椰子の木の根元に三本の絵筆をお菓子の缶に入れて埋めた。ふと水平線を見たとき雲がさきほどより晴れていて夕陽が淡い桃色を空に映していた。薄い雲で霞んだ夕陽は膜のなかに包まれているように滲んでいた。僕は葬式に参列した気分であつた。不思議と気持ちは晴れやかだった。

それ以後、美術の時間も皆と同じような凡庸な絵を描くように努めた。なるべく「普通に」描けるように僕は努力していつの間にか本当に絵が下手くそになってしまった。わずかな時間がひとをあつという間に変えた。僕は流行りの言葉づかいを友達と同じようにして携帯ゲームに熱中した。両親はそんな僕を一步下がって見ていて介入してくるようなことはなかった。

*

十二月に入ったばかりの日、僕は放課後のＯＣルームにいた。アメリカやオーストラリアの様々な風景や動物の写真が壁面に貼ってある。吹奏楽部の楽器の音合わせが校舎のどこからか聴こえてくる。生徒たちは下校しているか部活に行っているかで殆ど校舎にはいない。静けさに満ちた部屋で僕は下柳が来るまで詩集でも読もうかと思ったら、先にだれかが入っているようだった。一人の女子がソファに座っている。前のめりで物を書いている。いや問題を解

いているのだ。古村だ。

「何か用？」夕陽が窓からさしこんできて古村の顔に影を投げる。前に一緒に帰ったときよりもずっと機嫌が悪そうだ。泣いていたのだろうか。古村はちらりとこちらを見ただけでまた問題集に向かって鉛筆をうごかしていた。この女はいつも勉強ばかりしている、と少し軽蔑するような気持ちで後ろから見ていた。僕が反応しないからもう一度古村は振り向いた。やはりそうだ。古村が苛立っている。けど僕は態度を変えなかった。

「英語の下柳に呼び出されて小テストを受けに来た。ここ英語教員室の目の前にあるから使いやすいんだろう。古村こそ、何でここに」
「お願いをして放課後借りているの。だれもないと集中できるですよ」

「古村。何で君、カラオケとか買い物とか行かずにいつも勉強しているんだ。勉強がそんなに好きなのか」

「自分こそ、カラオケとか買い物なんて行かずに本読んばかりじゃない。塩田くんには関係ない話……」古村は俯いて黙り込んでしまふ。彼女がほんとうに怒っているのが伝わってくる。古村はこちらを見ずにつづける。

「だけど教えてあげようか。わたし、だれとも話したくないの。この学校の先生も友達も親も皆、嫌いだから。話しかけてほしくないから。勉強をしていると誰も話しかけてこないでしょう。親だつても言つてこないからそうしているだけ」

「昔はそんなことなかったじゃないか。明るかったのに」

「いつの話してるの」

「ついほんのちよつとまえだよ。かくれんぼしたの覚えているか」
「ぼかじゃない」古村が英語長文の問題集を机にたたきつけておおきな音がした。

僕は怯まずに言葉をつづけていく。「大学は東京方面をねらうんだろ」

「なんで知ってるの」

「このまえ理科大の赤本、図書館で借りてただろ。図書委員の岩崎から聞いたよ」

「個人情報漏えいじゃない。理科大にするかどうかは分からないけど鎌倉は出るの。実家においても退屈なだけだし、東京なら何かみつきりそうな気がする。ここの学校のひとたちと話しても全然おもしろくないもの」

私立中学に進んだ古村に何があったのか僕は知らない。彼女が考えていることが僕には全然理解できない。自分が小学校まで一緒に遊び、先日バスで一緒に帰った女に他ならないのにどうしてこんなに別人のようなのか分からない。

「都会なんて何もないよ。人間ばかりだよ。『三四郎』という小説で都会では責任が分散されてだれかが路で仆れていてもだれも助けないで書いてあったよ」

「そんな小説知らない。鎌倉にいるよりはいいもの」

「そういうものかな」

「塩田禎夫くんはいまも絵を描いているの」

僕はふっと笑った。姓と名を一緒に古村の口から呼ばれて何だか小学生の頃に戻ったような心地がした。僕はしばらく沈黙を保ちつつ古村の横に腰かけた。古村は動じない。

「描かないよ。絵はもう描きたくないんだ。美術の時間も無理をして描いている」

「どうして」

沈黙が僕にとって不利にはたらくのは目に見えていたのにそうするより仕方なかった。何もほんとうのことを表現する確かな言葉をみつけれなかった。この女に弱いところはできるだけ見せたくない。少なくともいまだけは。僕は諦めたように鞆をもち下柳との約束をやぶり扉の傍で「飽きたから……」と一言つぶやいてOCLームを後にした。

煙幕がはなれたような空だった。

中学の頃よく聴いていたバンドの歌詞が脳内で何度も再生されていく。昔持っていたプレーヤーでよくそれを聴いていた。同じフレーズが連呼される幼稚なものでいまはそんな音楽はださいと思っていた。けれど自分はバスに乗ってもだれも気付けなくらいのちいさな声でそれを歌っていた。唇がその凡庸な言葉をもとめていた。おきまりの愛や恋、永遠についての歌詞に満たされていく。車内は変に埃っぽく僕は口ずさみながら何度も咳をした。車窓にながれていく宵闇の風景が僕をつつむよう僕は薄い殻のなかに閉じこもっていくような心地がした。古村との会話を思いだすたびに頭痛に近いものに支配される。自分の喉を引き裂いてしまいたいよう

な感覚。停車場で降りたときには冬の空に星がでていた。冬の匂いがアスファルトから漂ってくる。しんとした厳粛なつめた空気。坂道を登りながらまたちいさく歌う。坂道のガードレール添いのフェンスを指で触りながら古村のことばかりを考えていた。金属のつめたさがいまの感情にあっている気がした。僕は真冬につめたい感触を期待していた。感情が乱れていたことに自分でも気が付いていない。

静まりかえった家に姉の気配は感じられず、薄暗い部屋で着替えもせず制服のまま床につつぶしてしまふ。憂鬱が僕をとりまいていた。近づくことも離れることもできない距離で憂鬱は僕を見さだめていた。夜がいまにもやってくる気だるい時刻。憂鬱の存在はますます膨らむようだ。僕は古村のことを考えながら目を瞑る。いまにも薄闇にひきずりこまれてしまふような細かい意識の糸をたぐりよせながら両手の指からこぼれていく砂粒。砂粒がさらさらと落ちていく光景。目を閉じた暗闇でそればかりが見えてしまふ。眠りに陥りそうなきは妙なものを見る。眠っても古村のことをまた考えてしまふそうだった。僕は諦めた。だから擦り切れるぐらい視聴した外国映画を見はじめてしまふ。

*

海の生物が壁紙に描かれている。マンタやイソギンチャクやエンゼルフィッシュにハリセンボンにマンボウ。色合いがさまざまな魚

たちの絵は薄闇のなかでは何だか悲しそうな表情に見える。壁紙をゆつくりと映しながら部屋の中央のベッドで寝ている少女に焦点がしぼられていく。少女は十代後半ぐらいだろうか、息もたてず安らぎに満ちた表情で眠っている。ベッドスタンドには貝殻のかたちをした蠟燭がおかれていた。貝殻は半分ぐらい溶けたときに火を消されたのだろう。静謐な朝の空気が部屋のなかに満ちている。そこへ栗色の髪の少年がやってきて戸惑いながらも少女の身体をゆすりながら起こそうとする。スペイン語だろうか。なめらかな言葉で朝の到来を告げる。けれど少女は心地よさそうな表情をくずすことなく巻貝の奥深くに入っていくように眠りから覚めることはない。少年は困った顔をしてその場に立ちつくす。カメラはまた海の生物たちが描かれた壁紙に視点を戻して色彩豊かな魚たちをおいかけていく。次の瞬間、少年の額が少女の額にあわさって肌がふれあうような接写でカメラが二人をとらえる。少年は少女の鼻孔にみずからの顔をすりよせながら匂いを嗅ぐように、隙をつくように唇を少女のそれにかさねあわせていく。唇は唇によってひらかれてそのなかを生き物のように少年の舌が出入りしているのが分かる。カメラは同じ視点からそれを映しつづけていく。少女は苦しそうな表情を浮かべるが決して少年をつきはなすことはなくゆつくりと岩礁のなかにひきいれていく。少年は畏にはまるつもりは毛頭なく少女を深い海の底からひきあげるつもりだった。地上からもってきた酸素を口のなかにためこんで、彼女にそれをわたそうとしていた。ところが鴉たちの鳴き声が遠くから聴こえたとき少年は少女の

すぐ横に身体をくずしていく。意識が消えていくのがカメラを通してみても明らかだった。少年は少女の唇から深海の泥のみこんでしまい眠りに陥っていく。カメラはさいごに二人の手のひらがひとつの貝のようにかさなっていくところを映しておわる。時間にして五分ほどのショートムービーで深夜に放送していたのを録画したものだ。僕はそれを何度も見ている。理由は分からないが自分にもこうした時間がいずれおとされるような気がしてならなかった。

僕は玄関の棚におかれた花瓶から蘭をとって、紙切りはさみで乱雑にその花の茎や花弁を切り分けて部屋のなかに撒き散らした。妖艶な香りが満ちていく。いつか、こんなことをしていた小説の主人公がいた。だけど思いだせない。畳の上には白い花卉がひろがっていて僕はその上に体をあずけて横になった。畳の上には水滴がいくつも落ちていて僕はそれが誰かの涙であるような気がして落ち着かない。この行為が『それから』の代助の真似であることに気がついたとき僕は寢息をたてて眠ってしまった。

*

唐突なことは起こる。でなければ唐突という言葉も生まれなかっただろう。僕は古村の電話番号をクラスに配布された「緊急連絡網」を使い割り出した。なぜそんなことをしたのだろう。自分でも分からない。しかし古村を自分がひとり占めしたい、端的にいうとそう

いう感情が線として走った。僕は公民館近くの電話ボックスに入った。電話ボックスは恐らくここ何年も殆ど利用されることもなく、おきざりにされた廃船のように存在していた。僕はここから時間を巻き戻すような気持ちで電話番号を押した。

「古村郁子さんはいらっしやいますか。古村さんのクラスメイトです」

そう何度も頭のなかで繰り返しながら古村の家族の声を予感していたのに現実には

「はい」という古村本人の声で僕を迎えた。僕はどきまぎしながら、「古村か、おれだ」

と言った。「塩田くん？」おれという使いなれない一人称が出ておどろいたのは僕自身だ。

「突然ごめん、君がいま何をしていたのか分からないが君のことだから時間を無駄に過ごしてはいなかっただろう。それを知りながら言いたいことがある」

「まどろっこしい……」

「ごめん、君の絵を描きたい、ただそれだけなんだ。だけど……察してほしい。どういう意味かを。どうしてこんな気持ちになったのかは説明できない」

「そういう告白のされ方は初めてだけど、どうすればいいの」

「僕の絵のモデルになってほしい。僕の家は知っているだろう。明日はだれも家にいない。来てほしい……。僕はもう一度絵を描きたい」

緑色の公衆電話の上に財布から出した十円玉を重ねていく。ど鳩の長い鳴き声が電話ボックスのなかにまでひびいてくる。長い沈黙の後、古村は「分かった」と言った。

古村は白いシャツに灰色のカーデイガンとデニムと言う服装で僕の家に来た。もちろん化粧もしていない。つめたい空気にひやされて頬がほんのり紅く色づいている。

古村は僕の家にあつた万華鏡を覗いていた。万華鏡は古くから家にあつた。多分、母が子供の頃に買ってもらったものだろう。少女の頃に自分の母が覗いていた鏡を古村も覗いているのだと思うと不思議な心地がした。姉も昔はその鏡を覗いていた。いまでは誰も触らなくなり、和たん笥の上のこけしと一緒に並べられていた。いつか過去に自分もその万華鏡を覗いたのだろうかと思いかえしてみたが一度も覗いた記憶はでてこなかった。女たちが覗いた鏡。何だか怖ろしかった。女は細片が散り散りに散らばり集合していくのを飽きもせず正坐をしていつまでも見つづけていた。

「そんなにおもしろいものか」

「うん、うちの家には万華鏡なかったから」

いつしか万華鏡のしかけに興味をなくした女たちは鏡台のまえの自分の顔を熱心に覗きこむことになるだろう。古村が化粧をしているのを見たことはなかったがこの女もすぐに化粧をするにちがいないと僕は思った。時間のながれかたはひとによってさまざま僕たちは時間のながれを共にすることができるのだろうか。万華鏡を覗きこむ古村の横顔は生彩をはなつていて眩しかった。髪は鬢が

ついていた曇り空の日よりもずっと綺麗に見えた。古村の傍にサロマトが近づいてきて鳴く。古村はサロマトの喉を優しく撫でた。「絵はどこで描くの」古村はこちらを見ずに猫を撫でたまま訊く。「父の書斎で。あそこが一番落ち着くから」

*

古村の肉体はくびれることもなく膨らむこともなく平坦なものだった。果実のように乳があることを期待していた僕はおどろいた。自然光の明るさだけで十分絵を描くことができたから、僕は照明をつけなかった。肉体につきまとう陰影も僕は絵に織り交ぜてみたかった。肌が白く陶器のように艶があった。ただ一点、内股に親指の腹ぐらいのおおきさの紫色の染みがあった。僕はそれが妙に気になりまじまじと見つめてしまった。「変なところをじつと見ないで。火傷の跡だから」暖房がつよすぎるのか古村の体は少しづつ淡赤色に火照っていた。思わず僕は我慢できなくなつて臍のあたりを指の腹でなぞると古村はくすぐつたそんな顔をした。

「早くはじめようよ」

その言葉に僕は一瞬どきまぎしながら、鉛筆をとって紙に輪郭を書きはじめた。

「写真は嫌いな。写真のなかに映る自分が許せないな」

古村はときどき自分に言うように一人言を発した。僕はそれに返すこともなく無言で筆を滑らせていく。はじめは恥ずかしそうにし

ていた古村もやがて慣れ、直立した肉体から羞恥の感情は消え失せていた。本棚の上に登つたサロマトも丸い眼で古村をみつめていた。サロマトの瞳のなかにも裸の古村がいる。玄関の鍵を開ける音がする。

「背景が寂しいな……。あとから君のうしろに蘭の花が活けられた花瓶を置いてもいいかな」古村は両手を前で組み、体を左右にゆらしている。「古村……？」僕は彼女が何を考えているのか読めなかった。そしてつまらなそうな顔をして頷いてから

「ねえ塩田くん、紫陽花を背景にして写真をとったこと覚えてる？」と尋ねられた。

唐突に古村が僕をみつめて言った。僕は「覚えていない」と応えた。何のことか分からない、紫陽花……。古村が裸のまま近づいてきて「思っだして」と駄々をこねるように僕の肩をゆらした。僕の心臓の鼓動は高鳴っていく。この女が何にこだわっているのか一欠片も共感できない。彼女は真剣な表情を崩さなかった。諦めない古村がうるさくて僕は少年のような古村の体を抱きしめて接吻をした。古村は水をかけられたような顔をして唇をあずけたままじつとしていた。陶器のわれるような音が傍でなり、本物の水の音が床にひろがった。サロマトが何かを落としたのかと僕は音の鳴った入口の方を見る。書斎の入口に立っていたのは花瓶を床に落とした姉瑠璃だった。

「あなたたち……何しているの……。あなた郁子ちゃんじゃない」「ねえちゃん、これは僕が古村を呼んでしたことなんだ。お願いし

「て脱いでもらった」

「あんた絵を口実に何をしているの。絵ってそんなもののためにあるの？」

古村は手早く着替えると姉と目をあわせずに「失礼しました」と頭をさげて帰っていった。サロマトも場の空気が変わったことに気がつき、そそくさと退散してしまう。残されたのは瑠璃と僕だけだった。

「いけないこともないけど……あんたら、受験も近いんだから……」

瑠璃は髪に手櫛を入れてばつが悪そうに言った。瑠璃は台所に立つとさつと味噌汁をあたたためて夕べの残りの高野豆腐を食卓の上にだし自室に入ってしまった。姉の泣く声がある。姉にも幼馴染がいて高校生まで二人は付き合っていた。彼はいま外国にいと聞いた。なぜ外国に彼が行ったのか僕は姉に理由を聞いたことがない。ほんとうに外国に行ったのかすら分からない。物音のしない夜更けに僕はだまって夕食を食べていた。

古村と僕の関係が変わったからといって友人や同級生でそれに気が付くものはいなかった。僕たちは学校ではときどき顔を見あわせるものの何を言うでもなく視線をそらしつづけた。それは時間の経過と共に古村との関係をじよじよに蝕んでいき、鎖が錆びていくように僕たちはあつという間に断ち切れてしまいそうなほどの関係になっていった。僕は自分の腑甲斐なさに腹を立てて微熱のなか古村に放課後話しかけてみた。平熱の僕ならそんな大それたことはできなかっただろう。酒をあおろうかと思っていたけれどちようどよかった。それは掃除の時間がはじまったばかりでクラスの皆はあわた

だしくうごきまわっていた。古村はだるそうに日直日誌をまとめている最中で僕に話しかけられておどろくかと思っただら安心したような顔で僕をみつめ返す。

「塩田くん……」

「古村、今日一緒に帰らないか。僕は自転車で来たんだ。送っていい」熱にうかされながら文節の切れ目がどこかおかしくないかと変なことを気にしてしまう。緊張はしていなかった。古村は「いいわ」と了承してくれた。数人がその光景を見てひそひそ話をはじめたけど僕はそれを一向に気にすることもなく、窓を丁寧に拭き掃除を終えて日直日誌を職員室に返しに行く古村に付き合い、駐輪場へ歩いていった。

「どうしたの、突然」古村は嬉しそうに尋ねてくれる。

「どうしても見せたいものがあつたんだ。いまの時期を逃すとしばらく見れないからね」

自転車のステップに足をかけた古村を乗せて発進する。古村は立った姿勢のまま僕の肩に手をかけてくれている。僕は自転車をこいだ。一生懸命。僕は何度か自転車を止めて古村に詫びながら息を整えた。血の味がする。あまりの息切れに古村が僕の体調の変化に気が付き額に手をあてた。太平洋の向こうは白く薄い雲に覆われていて光のなかを走っているような気さえした。太陽は薄い雲から弱い光を由比ヶ浜の街にそそぎ世界はどんどん灰色の世界に移り変わっていくようだ。しばらく額に手をあてられながら古村の手のつめたさに気持ちをよくしていた。「やっぱりひどい熱だわ」古村は急

にステップから自らの足を離して飛び降りた。僕は「え」と戸惑い、五メートルぐらい進んでからやっと停まって振り返った。古村は冬風吹きすさぶ路上に立って決意したような顔をしている。

「わたしがこぐわ」

古村はそう言った。僕は熱に支配されながら黙って従った。情けなかった。立つこともできなくて古村の腰に手をまわして後ろに座った。「振り落とされたら自己都合だからね」

古村はそう言いながら自転車をこいだ。後ろから来た江ノ電が僕たちを追い越して行った。江ノ電には殆ど乗客はおらず伽藍堂だった。江ノ電は海沿いを走りながら線路との摩擦音を鳴らして見えなくなっていく。速度は十分確保されていてとても古村がしんどそうには見えなかった。しかし運転が下手で何度もガードレールにぶつかったりしてやっと僕の行きたかった材木座にある青漣寺という寺院までたどりつくことができた。青漣寺の山門はおおきく本堂は林のなかに建っていた。山門に目の見えない僧侶が立ち「どうしましたか」問うてきた。僕は「お池を見せてください」と言った。僧侶は杖をつきながら「あなたでしたか」と僕に言い、再会を喜んでくれる。山門をくぐりゆっくりとした僧侶の足どりにあわせながら僕たちは本堂の中庭にある蓮池まで通してもらう。「おいくつになられましたか」「十七になります。来年、受験します」「そうでしたか。お連れの方はガールフレンドですか」「はい」僕は照れながら言う。

本堂の廊下は靴下を穿いていても非常につめたく修行をしている

るようだった。僧侶は廊下まで来るとするすると歩き僕たちをおきざりにするぐらい速足になった。古村も足をじたばたさせながらつめたさをまぎらわしていた。時折僕の額に手をあてて体調を心配してくれた。住職や尼僧たちが作業をしている部屋を横切らせていた。僕たちは深奥にある蓮池までやって来た。僧侶は気が付くとき姿を消して僕と古村しかそこにはいない。冬の蓮池は悲惨な風景をつくりだす。蓮たちは枯れ果てて水面を串刺しにしていた。夏の蓮池が見せる神秘的な美しさはない。沈倫ほんりんの日に立ちあうような禍々しさ。うるおいに満ちた、たおやかな葉はもちろん一枚もない。青や白や桃色に染められた上品な花は残らず落ちてしまった。蜂の巣のような花托が斉しく下を向いている。「はちす」と呼ばれる種子で何だか冥府の匂いがしてならなかった。うんと昔にその種子を食べる習慣があると聞いたとき、とてもおどろいた。化石のように硬そうなのにもかかわらずスポンジのように破れるそうだ。枯れ草のようになった茎たちは糸くずのようにからまりながら水のなかにおきざりにされている。水面には処々に氷が張っていて蓮たちを封じ込めているようにも見えた。氷の割れた場処から暗い水が見える。全体が、この世の終わりを見るような景色だ。

「見せたかったものってこれのこと」

「うん、気持ち悪いかな。僕はこういうものを見るとぞわぞわするんだ」

「昔見せてもらった塩田くんの絵のなかの世界でこういうのもあった。グレーが多く使われていて忘れられた場処って言えばいいの

かな。そういうものを多く描いていたよね」

「生きているということは一つの病気である。誰もがその病気によって死ぬ。……あの言葉を聞いてから考えていたんだけど、やはりひとは病気がないと生きていけないんじゃないかな。健康と病気っていう二項対立じゃなくて二つはつねに織り交ざっているんじゃないかな。病気が健康な精神をつくることもあると思う。配分をまぢがえるとだめだけど」

古村は笑い、「塩田くんはいま思いつきり病気だから、早く帰って休んだ方がいいよ」古村はこの冬の蓮池を満足してくれたのだから。訊いてみることは怖くてできなかった。

帰りは古村がまた自転車をこいで僕を家まで届けてくれた。僕の熱は四〇度近くになっていて姉にこっぴどく叱られた。姉は布団をしいて粥をつくってくれた。僕はミネラルウォーターと林檎を布団の傍において三日ほど学校を休んだ。体が休息を求めている。そう思うことにした。寝ている最中も古村を描いた絵のことが気になってしかたがなかった。あの絵のつづきを描いている夢を見ってしまうほど執着は離れることがなかった。

夜、姉が枕元に立って梅酒を手持っていた。サロマトも一緒にやって来て僕の体の上のっかり瞳をこちらに向ける。姉が「郁子ちゃんとはどうなの」と絡んできたから僕は熱が出たふりをして姉を遠ざけた。姉は窓をあけて夜風をひきいれて嫌味を言う。姉はつめたい手を僕の額にあてて「熱なんかないじゃん」と言った。その手の感触から僕はまた古村のことを思いだしてしまった。姉は〇時

には寝るようにといい、自室に帰っていった。

風邪から恢復して学校に復帰した日の午後、僕は一階の購買部で菓子パンを購入し教室に戻る渡り廊下で名前を呼ばれた。「塩田くん！」風に吸い込まれてしまいそうな声だった。右を向くと別棟の三階の渡り廊下に古村が立っていてこちらに向かって紙ひこうきを飛ばしてきた。紙ひこうきには手書きで

「こんどはわたしが見せたいものがある」

と書いてあり広げて見ると、ある駅名が紅い丸で囲まれた路線図だった。古村は微笑して廊下から校舎のなかに入っていく。校舎裏の焼却炉から煙が上がる。火葬場から上がる煙のようだった。

*

モノレールを〈町屋駅前〉で降りた。ダッフルコートを着た古村がケーキ屋のまえで待っていた。古村は何も言わずにさきを歩いていく。鎌倉中央公園の方角へ歩いている。横に並ぶと古村郁子は企むような顔をしていた。「塩田くんに魔法をかけてあげる」「魔法？」目の前に出されたのは「鍵」だった。「何これ？」「行けば分かるよ」

古村は鍵を空高く放りあげて手のひらでつかんだ。鍵がきつかけになったのか雪が一粒落ちてきているのが見えた。肌に触れると溶けて消えてしまいそうな雪だった。ふとまえを見ると西洋建築の立派な建物が建っている。橡の樹が植えられたちいさな庭にブランコが設置されてある。「あれは教会よ」古村は言った。教会は解放さ

れていてなかには大勢のひとがいた。施しを受けに来たのだろうか、つぶらな目をした犬も教会の周りをうろついていた。礼拝に来たひとのなかにひどく太った丸眼鏡の中年男性がいて何かに焦っていた。ブランコで遊んでいた少女たちはその男性の方を見る。おおきな声をだして何かが到着することを恐れているようにも見えた。教会の柵のなかにいるひとたちが影絵のようにしか僕には見えなかった。遠くにあるものを眺めるような心地がした。その光景を背にして僕たちはさらに歩く。中央公園に向かう途中で葉牡丹が咲く花壇が見えてくる。花壇の向こうには天文台のような球形の輪郭の建物がある。葉牡丹のあざやかな色が道行くひとの目にとまり一瞬何かの公共施設かと見まがうけれど「FURUMURA」とローマ字が表札に刻み込まれていた。建物に近づくと、その幾何学的なデザインを活かすために外壁はきわめてシンプルで凹凸が殆どない。建物側面の窓はとももおおきく切り抜かれていて部屋のなかにもしつかりと陽を通しそうだった。また建物上部の球形の壁には円状のちいさな天窗が見えて、いまにも天文学者の老人が顔を出しそうだ。

「old gray house」という建物で裁判官だった祖父のために建造されたの。一九八五年、当時有名だった小牧信吾という建築家に依頼してね」

「小牧信吾、その名前聞いたことがある。確かこのまえ読んだ現代文の問題にポストモダン建築の旗手として紹介されていたな。あるときから急に建築を止めたんだよね」

「そう、芸術がばからしくなってしまう、いまは畑で野菜をつつく

て暮らしているそうよ。わたし幼いころ、小牧さんに会ったこともある」

「君はいま、ここに住んでいるの？」

古村は首を横にふる。ここは現在、古村のお兄さんが所有しているらしいが留学のために留守になっているそうだ。冬の陽が雲を通して、いしたみ 贅の上に落ちていく。僕は古村のお兄さんに会ったことがあるはずなのに顔を思い出すことができない。気が付くと僕を取り残すように古村は先を歩いていった。陽は傾いているのにその光はまだつよいままであった。真鍮の格子をひらく。葉牡丹にみちびかれて僕たちは玄関まで歩いていく。

「old gray house」の内観は均整のとれた灰色の氾濫だった。壁紙やカーテン、ソファやテーブルの灰色は明度の均衡をとることにとても気を配ったのだろう。灰色だけなのに実にさまざまな明るさの灰色が共存していた。家具の形状はふだん見慣れないものばかりで外国製らしい。モノクロの「線路」や「海岸」「空」などのちいさな風景の写真があちこちに架けられていた。一階は生活する空間となっており冷蔵庫やシャワールームなどが取り付けられてある。薄らと廊下に埃がつもっていることから長期間、この建物は使われていないようだった。階段はなく梯子を登って中二階にあがると広い窓から光をとる明るい書斎になっていた。書斎にはおおきめの書き机が据えられてあり、万年筆やインク壺などが見えた。さらに梯子をのぼると球形にひろがった天井が現れた。周囲の壁は円状に本

棚が設置されてある。「ここはリビングで書庫なの」と古村が言う。

部屋の中央には石油ストーブが置かれていて古村がスイッチを入れると音をたてて年代物の機械がうごきだした。「臭くなったら換気扇回すから」古村は弁解するように言う。部屋があたたまるのには時間がかかったが部屋全体が熱を蓄えていくのが肌で分かる。四方を書物に囲まれた空間に僕は言いしれぬ感慨を抱いた。部屋の端には寝袋とストーブがあった。古村のお兄さんは天体観測でもするように本を見上げながらここで寝ていたのだろう。僕はとても羨ましく思った。熟れた柿のような色の靴下を穿いた古村がこちらを見て言う。

「ここなら誰も来ないし、ゆっくり絵が描けると思うよ。わたし、ブランケットとってきて適当に勉強してるから好きに使っていいよ」

古村がブランケットと言ったときそれを毛布と翻訳するまでに時間がかかった。僕は小鹿のようにわなわなと足をふるわせて床へたりこんでしまった。

「どうしたの」

「理想的な空間が広がっていて、自分のなかの何かが……それに適応できていない。簡単な言葉で言うとびっくりしているんだと思う」

「わたしのかけた魔法がとけないうちに絵を描いてしまうことね」古村は毛布を持ってきて自分の足の上にかけた。毛布と一緒にちいさな灰皿を持ってきて煙草を吸いはじめる。煙草吸うのか、僕は声には出さなかったが面喰った。

古村は折り畳み式のテーブルを持ってきて天井から吊りさげられた照明の下で参考書をひらき勉強をはじめた。僕は床に紙を置いて鉛筆で素描のつづきを描きはじめる。肉体はさきに描いてしまったから後は表情をつくっていく工程だ。彫りの浅い顔で表情をみつけるのが難しかった。古村の持つ淡い悲しさのような雰囲気を絵に宿したかった。

ひとしきり絵を描いた後、僕は床によこたわった。古村は気にせず勉強をしている。円状に設置された棚の本は半数以上が洋書だったので僕には無縁のものでしかなかったが法学の書物のなかにほんの少しだけ文学作品もみつけられた。僕はスウィフトの『ガリバー旅行記』をひらき俯いてそれを読みはじめが古村のことが気になって全然文字を追うことができなかった。

辺りを見まわしているうちに僕はみつけてはいけないものを見ってしまった。一葉の写真だ。その写真には紫陽花を背景にしておめかしをした少女が映っている。古村だろう。その隣に映っていたのは僕だった。二人は手をつないでいた。幼稚園ぐらいだろうか。瞬間、写真をとった場処を閃きのように思いだす。まだ市が家の近所に新しい小学校を開設するまえ、畑の沿道に紫陽花がずつとつづく路があった。幼稚園にはその路を通って通園していた。新しい小学校の開設と共にあの路は消えてしまったのだ。雨の匂いと紫陽花の匂いが蘇ってくる。連日曇り空がつづいていて気分が落ち込んだものだ。あの路を通るとぱっと晴れやかな気持ちになったものだ。なつかしさに胸をうたれてしばらくその写真を見ていると僕と古村の傍に

ランドセルを背負ったもうひと組の男女がいた。男の子の方は眼鏡をかけてジャケットを着てとても賢そうに見えた。女の子の顔をじっと見た瞬間、戦慄が走った。そこに映っていたのは他でもない瑠璃だった。

天窓から夕陽がさして眠っている古村の顔にあたっている。薄暗い部屋でそこだけ光が落とされてまるで絵画のようだった。僕のいま描いている絵よりもずっと美しい。古村の顔をじっとみつめて巻貝のような耳に自分の耳をあててみる。何かを聞こうとしたのではなくて試してみたかった。あの映画のように自分も眠りのなかにひきずりこまれるのかを。接吻はできない。まだそんなことを寝ている隙にできるほどの関係ではない。こうして巻貝のなかにながれる古村の時間を自らの耳穴にながしこみたかった。同じ時間を生きる。そういうことが永遠にできれば素晴らしいだろうけれどいつか夜は確実にやってくる。

午後六時。なぜ明確な時間が分かったのかは謎だけど生きているうちにはそういう直感が何度かあたる時がある。長い髪が僕の顔にさらさらと落ちてきて目の前に顔があることに気が付いた。その唇でこう囁かれた。

「魔法には終わりがあるの」

臉をひらいたとき、古村の姿が見えなかった。煙草の匂いも消えて教会から鐘が鈍く鳴っている。辺りには白い破片が散らばっていて花弁かと思いがつたけれどさきほどまで描いた絵が破り捨てられていただけだった。紫陽花の花のなかで眠りたい、塩田禎夫は涙

をぬぐった。

(了)

僕が憶う人

常磐 誠

窓から庭先の花を見て僕は、すぐさま君の写真を膝に置き、ハン
ドリムを動かして庭に繋がるスロープを降りた。今年の梅の花も、
当たり前のようにして咲いていた。その当たり前前を、僕は隣に君が
いないままでもう何年見続けているだろうか？ 子供達は成人式
の日を迎えて、僕は中年に。車椅子に乗らないといけなくなっ
ても久しい。

君と別れたあの日。あの子達が産まれた日。僕の足が動いていた

日。いつだって必死だった。君が逝ってしまったその瞬間も。暴力的に放り出されたあの子達を育む日々も。

魅力的な親父だったとは世辞にも言えまいよ。もし口に出してそんなことを言ったなら、もういない君はきつと笑うだろう。いや、怒るだろうな。

君が愛おしい。女々しいと笑って、怒るかもしれないが、愛おしい。だから捨てられなかった。何もかも。テニスラケット。写真、君が映った動画のデータ各種。その他諸々。それと、

——君が僕に残した肉声の数々。

——君が僕に残してくれた、記憶。

それらを思い出すことがとてつもなく苦しい時もあった、僕は最初の何年間かは何度も嗚咽を堪えきれず、壁を殴り、酒を呑み、暴れては皆を怯えさせた。不安にさせた。赤ん坊だった三人の子供達が、ぎゃんぎゃんと泣き喚く声に合わせて、僕まで泣いていた。

支えてくれる周囲の人がいなければ、きっと僕も、子供達もこうして生きてはいないだろう。そんな人達がいてくれたのは、やっぱり君がいたからなんだよ。

大袈裟だと言わないでくれ。酒の力だ、とからかわないで聞いてほしい。僕が酒に強いのは、君も知っての通りだから。

写真に映る、棕色の長い髪の毛。地毛で、産まれた頃からさういふ淡く黄色い髪の毛がうっすら見えていたから、粹。そんな名前の由来を聞いて。写真を見せてもらってその可愛らしさにもまた、僕は笑っていたんだっけ。

庭の大きな梅の花のそばに、僕はテーブルを一つ置いた。梓は梅の花が好きだった訳じゃない。というより、花はあまり好きじゃなかったなあ。仏壇の花も、甲斐甲斐しく世話してくれてはいたけれど。

テーブルの上に日本酒、という風景に風情があるのかどうか、よくはわからないな。風が吹く。花びらが、舞って。

そして、その花びらが俺の体や親父の体のそばを、かすめる様にして飛んで行く。

「親父。帰ったぞ」

車椅子に乗った親父の赤ら顔がこちらを向いた。見られてはいけないものでも見られたような感じで俺を見ていた。

「何だよその顔」

俺は親父に聞いてみる。聞いたとしても、きっとわかりはしないだろう。俺は親父に似ず、そしてお袋にも似ず、バカだから。

「いやあ。もつと遅くなると思っていたんだ。中学の同級生とは何年も会ってないだろ？これから飲みにも行くのかと踏んでいた」

そんなことか。俺は兄妹の分まで引き取り持って帰って来ていた同窓会の手土産を、テーブルの上に置かれたお袋の写真の横に並べながら、言った。

「バカ言えよ。これから東京にトンボ帰りさ。取組がある」

親父とゆつくりと語らっている暇も、ないんだ。親父はちようど酒を呑んでいる。サシで呑み合う機会もあまりない。親父にはとて

も言えないが、すぐ帰らなきゃならないのが残念で仕方がない。

「二十歳前に横綱昇進決めちまった奴は言うことが違うな。けど、酒呑んで初場所で勝ちを決める！なんてのも粋な伝説なんじゃねえか？」

親父がそういう冗談を言うのが、意外なことに思えた。

大会で俺が優勝したって、

「勝っても笑うな！」

と怒鳴り、そして優勝できず泣いたり落ち込んだりしようものなら、

「負けても下を向くんじゃない！」

そう怒鳴るような、相撲に対しても俺に対しても真面目で、堅物。俺の中の親父は、そういう人間だったのだ。

「悪いけど、俺はそういう伝説には興味ないんだ。俺、横綱会で『おい、ガキ！』って、呼ばれてんだぜ？」

差し出された盃は、そのまま親父の手元に戻して、丁重に断った。気持ちだけありがたく受け取ります。という言葉も添えた。

「その話は聞いたさ。見返してやるんだろ？」

「ああ、当然な」

強く息を吐き出すようにして俺は言う。まだまだ強くなれる。両手に、勝手に力が入る。この悔しさは、絶対に返してやる。

そう思っていると、会話が終わり沈黙が流れてしまった。

そういうえば、今年は親父がスピーチをしなかったことを思い出した。今まで五年連続で成人式は親父がスピーチをしていたのに。そ

のことを尋ねてみた。

「あ？ ああ。もう五年もやってんだからそろそろ解放してくれや
って言ったんだよ。そもそも息子や娘が参加するのに、何故に親父
が出しゃばらんといかんのかと。まあそういうことだ」

親父の答えは簡単だった。ふーん。俺は自分から聞いておいて何
なのだが、それだけの相槌しか打たなかった。

「日向や猛は僕と同様。息子が出る成人式のスピーチはごめんだ、
ってな。悠樹に至っては、『まこっちゃんの後任など、私にはでき
ません』とか抜かしやがった。めんどくさいだけだろ。あいつ」

不満を漏らしながらも、その顔は笑顔で、恨み言にはなっちゃい
なかった。親父の周りは、相も変わらず、ということなんだろう。
俺は、別のことが頭に入ってきてしまっていた。

親父の背中が驚く程小さく感じられるのは、本当のことだっ
たんだなあ。

俺は飛び抜けてバカだったから、口で言われてもわからねえ。そ
んなだから、親父も俺にだけは体で躰けた。

昔から暴れて人を泣かしては、親父にぶん殴られて、ぶっ飛ばさ
れてきた。

あまりに口惜しくて、全力で抵抗して、それでも親父は引き腕で
すらない左腕一本で俺を吊るし上げ、放り投げ、叩き付けてきた。
お前は弱いと、弱いお前がいきがるなと体に教え込むような目。そ
して圧倒的な力。親父だけは恐ろしくてたまらない。昔も、今も。
その背中が、腕が、あまりにも細く感じられちまうのは、俺が横

綱として体が立派になってしまったからなのか。『まだ心が立派じ
やねえよ』と親父、親父、横綱会の尊敬すべき先人達の誰も彼もが
口を揃えて言うのに。寂しいとも違う。悲しくなんかない。この気
持ちは何なのかわからず、黙ってしまう。

「椿達はどうした？」

親父の問いかけにハッと現実引き戻される。

「ご覧の通りさ。椿も案外人気だな」

「望と豪に勝も来れなかったんだっけか」

「ああ。望はまあ言わずもがなだろ。嫌いだろうしな。こういう集
まり。豪は望と一緒に試合を優先させたって形だろ。男子だけ試合
ってのも中々酷な気がしなくもねえけど。拳句勝は大学から帰って
来れねーってメール来てた。可哀想にな。……ま、お陰様で、俺一
人こんなに沢山の土産を抱える格好になっちゃったよ」

そうか。という親父の吐きが聞こえた。またコップが傾き、親父
の口の中に酒が入っていく。

親父。そう呼びかけてみる。

ん？ と言って親父は車椅子を巧みに操り体ごと俺を見た。梅の
花びらがテーブルにも、コップの中にも落ちて来ている。なのに不
思議と自分の体にも、親父の体にもそれがくつついていないのが本
当に不思議だった。

「俺、まだ親父を超えたとは思ってねえから」

一言、言ってみた。俺の本心はこうだと、言ってからまた自分の
中で納得するような気持ちになった。親父は、どういう姿でも怖く

て、凄くて、とんでもない存在で。

「嘘だろー」

くつく、と親父は笑う。

「俺は本気で言ってるんだよ」

俺の上手に伝わるはずのない本心を聞いた親父は、

「こんなジジイが天下の横綱に敵う？ バカいえ。バカを」

コップを置いて、少しだけ寂しそうに言った。

お前は、もう超えたさ。

実際、二十歳どころか十八の時、椿や勝が高校を卒業するタイミングで一遍勝負して僕は負けている訳だ。大関の息子との腕相撲。勿論素面のガチンコで、だ。

二十歳前のガキには負けんぞ、と気合い入れて臨んだつてのに右も左も関係なしに完敗させられ僕は凹み、勇邁は驚いていた。

「ぜってー親父泣かす！」

と泣き叫んでばかりいたガキだったのに、こんなに強くなるなんてなあ。その光景を少しでも予想できたかい。梓。

三つ子を産んで、抱いて、笑って……それからすぐにお別れだなんて、酷すぎるよな。君は、子供達の声も聞いた事が無いし、立って歩く姿だって見た事が無い。

幸せ、だっただろうか。子供達が成人して、それでも、思い続ける。

勝は大学で心理学を専攻する事に決めた。人に優しくできるかも

わからない。それでも臨床心理士を目指そうと思う、と言っていた。君に似て優しい子だから、本人がどれだけ悩んでいようと僕は悩まないさ。

椿はまた卓球選手権日本一を取った。オリンピックでも次は金と周囲からのプレッシャーも凄い事だろう。よく頑張っている。君に似て厳しい子だから、ちゃんと見守ってあげたい。唯一の娘だから、かな。余計にそう思う。きっと言ったら煙たがられることだろうけどな。

勇邁は見ての通り。これからも頑張り続けるさ。君に似て強い子だから、何が起こっても大丈夫。立派に綱を守り続ける。

三人とも、もう僕が必要かどうかわからない。

そっちに行きたいという訳じゃないんだ。

花びらが舞う。いつだって僕はこの花びらを掴むのが下手で、それでいつも力任せに腕をぶんぶん振り回しては君が呆れるのを待っていた。君が何か喋ってくれるのを待っていた。君の声が聞きたかった。

「お前はしょうがない奴だ」

と言って笑う君に、僕は安心していた。

梓の色をした髪の毛に四季とりどりの花びらが乗っかっているのを見ていると、自分でも不思議なんだけれど、僕はいつも笑ってしまっていた。

「梓は、花びらに乗っけるのがうまかったんだ」

親父がお袋の写真を手に取り笑って言った。お袋の写真に、梅の花びらが一枚だけくっ付いていた。

「まあ、乗っけるって言っても、自分から進んで乗っけるんじゃないかって、勝手に花びらの方から乗っかってくるんだだけだな」

写真にくっ付いていた花びらを、親父は太い指でつまみ上げてそのまま自分の頭に乗せる。その瞬間に、

ぴゅう。

と風が吹いて、すぐさま花びらは飛んでいってしまった。

「ところがどっこい、僕はいつもこんなんだ。羨ましいと言われたけどな。梓には」

親父が俺の鬚の辺りを見ている。

「なんだよ」

「お前の鬚に引っかかりたりしないのかなって思ってな。……やっぱり引っかからないもんなんだな。僕に似たんだな」

最後の言葉の時だけ、むやみやたらに笑顔がまばゆ過ぎて少しだけイラっとする。

「どうせ俺はお袋には似てねえよ」

お袋の写真を見られればそのあまりの似ていなさに驚かれ、最悪悲鳴をあげられる。今まで経験してきた周囲の反応が面白いくらいに頭に蘇ってくる。

「冗談。お前は梓にもきちんとして似ているさ」

親父が最後の一口を呷ってしまうのと、

「ただいま。まだいたんだ。勇邁」

という椿の聲がほぼ同時だった。

「思うより早いお帰りで……ぶっ」

椿に視線を向けた親父がいきなり吹き出してしまったものだから、俺は親父がいきなり吐くんじやないかと思ってしまったが、

「外で呑んで話してさぞや楽しかったんだろうな。ねえ。なんで私だけがこうなるのか教えてもらえる？」

というちよつとした怒りを込めた言葉の主を見してみる。するとその答えは簡単なものだったとすぐわかる。

「この花びら、私の頭とか肩とかに降り掛かりまくってウザいんだけど。どうして二人は平気な訳？」

赤みがかった髪とお袋のお古の振り袖の肩にたくさんピンクを乗せて、しかめっ面をした椿は必死に花びらを叩き落としていた。叩き落とせば叩き落とす程、また新たにぴゅうぴゅう吹く風に煽られた花びら達が俺達三人を包んでは、ご丁寧な椿だけに引っ付くのだ。笑いが止まらなかった。

はっはっはっは！ 親父と一緒に笑っていたら蹴りを入れられた。

「答えて言ったら、なあ？」

「そうだよな。親父」

この話は椿にはまだ一度も話していなかっただろうか。それでも良いかもしれない。いつか話してやろうと思う。でも、それは今じゃないなあ。遺伝する訳ないだろバカ、とけなされるような話でも、

君以上にずっと強烈じゃないか、椿は。

君に、伝えたい事がある。

母親って言うのは、本当に強くて大きな存在だと思う。だってそうだろう。君を失う事だけを恐れ続けた僕と違って、君は君自身をも失った後に残り続ける命の輝きを知っていた。

君を失ってからの僕に、こんなに素敵な世界をくれた。

君が僕にくれたもの。くれた心。思い。全部が愛おしい。僕は君に会えて、君と別れたこの世界で、今とても幸せだから。

君にとっても、伝えたい。

君に会えて、君と別れてしまったけれど、君達に会えて、本当に、良かった。

ありがとう。

笑い泣き一筋、それを横から拭う様に舞った花びらが僕の肩に乗った様に見えて。その一瞬後に離れていって。

——それで十二分だと、思った。

(了)

独り言

る

俺の親父ってのが酷い奴だよ、酒と女と博打と暴力の全部で確率変動おこしてやがって中学の頃かな、俺の預金通帳勝手に作りやがってそのまま親父の会社の下請けで労働フィーバー、俺が鉄パイプ運んだ数と骨折った数だけ親父がぶんどった通帳に振り込まれてやんの、笑っちゃうよね、おふくろは頭がパーだから、毎日弁当よこしながら笑顔で「がんばって」と毎朝毎朝、すれ違う小学生の頃の同級生だとか、好きだった女の子だとか、俺の作業着見て何を思ったんだろかな、なあ、中学生並みの世界ってあるじゃん？ 多分映画で見たような、まだ自分が世界の中心にいて、笑ったりするところが許される類の、消しゴムのカスをさらっと机の上から払いのける類の、なあ、君がいてくれなかつたら俺は居場所なんて一生無いんだと勘違いしたかもしれない、君は俺に逃げ場をくれた、ギターをくれた、参考書をくれた、あと覚醒剤をケツにくれた、「愛してる」って言葉をくれた、愛してる、多分俺も、確かに今もたまに啜

が光る池のせせらぐそばで君に宛てた言葉を繰り返し繰り返し喚くこともある、「真つ当に生きて私を幸せにして」って言葉は今でも俺を支えながら縛っているんだ、君がその言葉を自分のためにかそれとも俺のためにか、どういう意図で言ったのかはもういまさらどうだっていい、俺は君のおかげか、君の残酷な慈悲のためか、ゆっくりと歩き始めた、いつだか、道路に引かれた白線をたどって海まで行こうって言ったあのとときの笑顔が俺をいつまでもこの白線に戻らせるし、君がいなくなったこの世でも俺はいつでも君の隣を歩いている。

なあそれからだよ、デブのパンティみたいな生活が始まって、廊下を歩けば唾を吐きかけられて、あの人にくれた参考書は校庭の真ん中で燃えていた、あああ、それとは別問題かな、授業中だろうとのべつまくなしに俺を呼ぶんだわ、名前だけ、たまに憎悪の言葉、「ねえねえよしき？ お前の背中に」ああ、わかっているよ、わかっている、何もかもわかっているって気付いたのは、救急車の中？ もうちよつと後だったか、医者がリスパダールって薬を処方した瞬間か、ごめんよ、少しだけ遅れるかもしれない、あの人に伝えて、いつか俺も海まで辿り着くからってそう思ったのは先輩の三十過ぎの彼氏の家の中で二人でギターを弾きながら、歌いながら、スリーピー・ジョン・エステスをき、やっぱ駄目らしいわ、高校とか、セックスのほうは何万倍も気持ちいいから、わるい、少し遅れる、ところで君のえげつないブルースを聞いて俺はどうやら嬉しかったみ

「たいだ、墮胎手術を今まで3回、それも全部自分の父親の種だって、笑える、あ、プラネタリウム行きたいね、そんで星のことなんてどうでもいいから君の身体をずっと触っていたい、夜はいつだって綺麗だ、かなしい言葉が全部とうめいになって消えて行ってくれるから、今度の君はとてつもなく散文的な翼に乗ってロンドンに行ったなあ、知っているかい？ 君が好きだった窒息プレイの最中に俺が何度でもこのままほんとうの翼を手に入れたと思ってしたこと、もつと強く締めてよかったのに、俺はあのあと高校卒業したんだわ、嘘かと思うだろ？ 模試の全国偏差が70越えててさ、単位足りなかったけどうちの高校創立以来初めての旧帝つーことでどーにかなった、あの人がくれた金を軍資金にして、俺はまた白線の上に乗って、どっちの方向にあの人が消えていったのかももう分からなくなってる。」

それで通い始めた大学は予想通り糞で、とりあえず山塚アイに会いたくなって東京行った、わるい、また遠回り、というかもうどうでもいいや、もうずっと前からなんとなく、なんとなくだけど気付いているんだよね、誰も俺のことなんて待ってやしないし、海なんてどこにもない、適当にバンド組んでさ、なんていうの？ ロックでもないしブルースでもないし、ああ、ライブハウス壊す系？ それそれ、かなしかったのはさ、バンドメンバー全員で一緒の部屋に住んでただけ、全員で貯めた家賃と食費と光熱費と雑費、全部、おんまさんに乗せてみたら、あいつ上がり3ハロン普段よりも3秒

も遅く走りやがって、ああああ、そういうことじゃない、俺が誰の子供かっことがさ、そんで追放、馬鹿じゃねえのか、お前らバンドやってんだろ？ だったら許せよ、ジーザスクライストの要領で許せよ、馬鹿じゃねえの俺、そんで全員死にやがれ、って電話したら、横浜のパチンコ屋で住み込みで働いてた彼女は、ありったけの愛情をこめて、電話を切りやがった、笑える、君のこと結構好きだった、バンド辞めてまじめに働くからいつか一緒に暮らそうって言った矢先に飯場の環境に耐え切れなくなって逃げ出した俺みたいな甲斐性なしのクズにはお誂え向きってやつ、煙草ってやつば体力無くなるのな、雲の切れ目、さようなら、さようならとーきよー、ばいばい君たち、俺を指し示してくれた君たち、俺の先を指し示してくださったビッチたち、この糞と汚物のミルフィーユみたいな世界に割り貫いた乳首でできた首飾りをかけてあげよう。」

なあ、あの人の指し示した白線はいつの間にか10tトラックのブレーキ跡で消えちやったみたい、ああ、分かってる、あとはあの人がくれなかった翼を、拵えて、ああ、そのまえに殺しておかないといけない奴がいたな、と思ったらそいつは女と博打のダブルリーチで失踪中、ついてないな、出来れば鈍器がいい、すぐに死ねないから、ああ、俺は楽にいききたいね、親父の話さ、そういえば話すのを忘れてたな、父親が自称画家の先物トレーダーで躁うつ病のクズ、母親は失踪中、高校の頃知り合ったんだ、彼女は一言でいっちゃえばブス、制服の隙間から10日前の体育の授業の汗のにおいを発散さ

せていた、俺が玉砕した。多分金平糖一袋よりも多い女の子のうちの1人なんだけど、君のこと話すのを忘れていたよ、君の実家と俺の実家は近くて、俺がフルメタルジャケットで実家帰りしたのに、ハートマン軍曹がいなくて途方にくれて、とりあえず酒でも飲むわかって向かったスーパーで社員として働いていた、初めて知ったよ、君が考古学なんてやってたとか、シルクロードを何度も歩いたんだってな、砂漠の夜に瞬く星の話をしてくれよ、砂漠の夜も三たび微笑むのかい？ 俺には三たび微笑んだ後、ふぁっく・ゆーっていう星座になってぐるぐる回っていつのまにか馬鹿にするようなスズメの囀りがふけみたいに降り注いでいるよ、それから砂漠の見えない道をふたりで歩く、なんてことはなくて、玉砕、たとえば君はその絹の白い道を歩き続けることはしなかったのかい？ こんなスーパーで白髪ばあをあの道に譬えたりしたのかい？ その白線の先に何を見ていたんだい？ 俺とばっくれる誘いを断ってさ、何も示してくれなかった、シルクロードが夜に輝く乳の川になつてあらゆる星がそこに落ちてきてきらきら光る、君は白線を歩いていた、俺は。きつとどこにもいけない、その絹の道にしたって俺の白線にしたって、どっちみちどこにも辿り着けないように出来ているんだよ、って君に話した時、君が言った「わたしがどこかに行っちゃったら誰がお父さんの面倒を見るの？」

シルクロードって相当やばいらしいね、あ、放射線的な意味で、あの人は甲状腺癌で死んだよ、砂漠の夜は一瞬で、きる・ゆーって

星座になったってこと、あの人があの時言った言葉が何度もわたしに反響する、なあ、かなしみってなんだろう、わたしは幾重にも重なった白い道の上でいつまでも佇んでいたんだね、あの人に一つだけ聞きたい、ダルビッシュは今年何勝するかな？ じゃない、愛を

(了)

オウンゴール

小野寺那仁

休憩時間。騒がしいクラスの雰囲気から私たちは取り残されている。

ねえ、アンディ！

さくらの声が入るが、私は前を向いたまま。呼びかけには応じなかった。さくらとは話さないと心に決めていた。さくらが顔を近づけてくる。互いの前髪が触れ合いそうになり、私はのけぞり身を振ってさくらを避ける。

どうしてさくらは私をアンディと呼ぶのだろう？

聞いているの？

さくらは人間の匂いを欠いている。冷たいセルロイドで円柱や球

体を組み合わせさせて作られているように思えた。彼女に友人はいるのだろうか？ 誰かが彼女と話しているのを見たことがない。休み時間の間中、ひたすら私に話しかけている。新しくできたショッピングモールで見つけた鉛筆削りやサンリオの弁当入れについて話している。そうして、しまいには必ず、今度、あたしの部屋に遊びに来てよと囁く。

新しいマンションだからさ！ 壁いちめん大きな丸いガラス窓が嵌っていて海を眺めることができるの。

彼女の独白は絶え間なく続いて、途中からは聞いていなかった。私は気が付いた。今まで彼女と話したことがなかった。彼女の名前さえも心に刻もうとしなかった。

ぼんやりしていると国語の授業が始まっていた。音読するようになると言われた。朔太郎の性的な喩を声に出す。にやけていると先生は真面目に読めと言う。でも先生も笑っている。今週に入ってから毎日読まされる。安藤先生は学校を出たばかりの若い女性だ。エコ最良がひどいとみんな言っている。授業が終わりかける頃に私はまた当てられた。私は我慢できなくなった。

「どうして僕にばかり当てるのですか？ 読むのは僕だけでしかも二回目じゃないですか。僕はうまくしゃべることができないから朗読するのにふさわしくないし、僕だって他人が読むのをじっくりと聴きたいときもあります！」

「明史は国語で頑張れよ！ 俺はサッカーしか能がないんだから」
英輔がおどけた。

「あら、そうでしたっけ。ごめんなさいね」先生はにっこりと微笑んだが、私は釈然としない。得体の知れない薬物を飲まされたような気分になった。

授業が終わってから先生は化粧の匂いをぶんぶんさせながら私の耳元で囁いた。

「明史くん、四時に職員室に来てくれるかな。担任の先生にも頼まれてることがあって」

私は答えない。安藤先生から呼び出されるのは、これで三度目だ。今までの二回はすっぱかしている。初めに呼び出しを受けた両親は無視していた。本人には話しくいことですから、と担任は電話で告げたらしい。母親は学校で何をしているのか？ と私に問い質した。私は何もしていないと言った。母親は学校よりも私を信用した。一ヶ月も無断で休んだからじゃないかなあ。ああ、そういうことか、忙しいからお前から説明しておきなよ。私は、そのつもりはあったのだが今度は担任がへそを曲げた。直接話すことではないと、どうしても私とは話そうとしない。それで副担任である安藤先生が間に入るようになったのだが私はなんとなく避けていた。先生の赤い口許が猥らに思えて何とも苦手であったからだ。真摯に自分のことを考えているのだろう担任のことを思うと安藤先生はなんとなく安請け合っている感じがした。冗談に紛らせてしまう気もした。担任に比較すると軽い気がしてならなかった。それは私の両親にも言えた。

大人に対して反論したり歯向かったりするの初めてかもしれない。

なかった。それで緊張して昂ぶっていた。ほとんど初めてとも言っていないので落ち着かなかった。それで隣のさくらを一瞥したり、最前列にいる希海の背中を見たりしていた。私は希海を気にしている。一年の時から文系クラスでは首席を争ってきたからだ。同じクラスになっても話すことはなかった。希海は無口であったが男子の間では人気が高かった。表現力とと言うか演技力とと言うか内面の感情の動きが全身に溢れているから話さなくても何を感じているかは誰でも分かる。希海の背中が一定のリズムで揺れていた。おそらくは笑いをこらえているに違いない。私はそれを見逃さなかった。ふと見ると隣のさくらにはボーダーを遥かに割り込んだ十七点の古典の答案を恥かしげもなく机の上に広げていた。

クラスの中には私に反感を抱いている者たちが少なからずいる。理系進学クラスを目差している連中だ。彼らの視線は冷たく、白けていた。

人前で歌わなければならない音楽の授業を泥の中で身を振るよりにやり過ごした。続くサッカーではオウンゴールを二発も決めてしまい、インターハイに出場した英輔に胸倉をつかまれ危うく殴られるところだった。テニスコートでランニング中の希海の脹らんだ体操服に見とれていたためだとは口が裂けても言えず私は平謝りだった。

次の数学は微分方程式の小テストだった。かつて四桁×四桁の暗算に成功したこともあったのだが一か所、6+7の計算を間違えたために藁半紙三枚の計算式は無駄になった。教頭でもある平野先生

は「惜しいなあ」と笑って×を大きくつけた。それだけで数学は零点になってしまつて徒労感が重くのしかかつてきた。希海が私の後ろに立っていた。それでしばらくそこに留まる。先生の顔に輝きが見えた。希海は正解だった！

「来年、君は理系進学クラスに行けるなあ」平野教頭は希海に言った。そして私に向かつてIQテストがいかにかに当てにならないか君は証明し続けているなど冷ややかに言い放った。自分の席に戻つてくるとアンディ！合つてたよね、とさくらが答案を覗きこんできた。私は慌てて答案を隠した。さくらは私に白紙の答案を見せてきた。

「学校、辞めたくなるわ」

午後からの化学の授業中、さくらはずっと机の上に頭を横たえて別の空間を彷徨っていた。おそらく橋詰先生は私と希海だけが目を合わせることでできる生徒だったのだろう。彼は気が小さいのだ。希海が三問答えた。私が当てられて二問答えた。希海は三問とも正解だったが、私は二問とも答えることが出来なかった。私が立ったまま困っていると希海はかなり席が離れているにも関わらず元素記号の名称をあからさまに口走っていた。私に教えようとしているのだろうか。私は不快になつてわざと間違えてやろうかと思つたが結局はわかりませんと答えた。それでも希海から私に僅かな意思を見せたのは初めての事だったので私はドキドキしていた。冷静に考えれば嫌味としか言いようがないが。

授業中にも関わらず、さくらはだしぬけに大声を上げた。

「アンディ、モンタンにモルを教えてあげたんだよね。中学生の時

にさ」

クラスの大半は笑うという欲求に常に飢えているからとりあえずドツと大きく笑つたが、誰も正確に言葉の意味を把握しているわけではないので、次第に教室の空気は濁り淀んでいった。さくらが私の名前である明史をアンディと、希海をモンタンと密かに名づけているのはほとんど知られていなかった。

よりよつてなんとということまでち上げるのか、根も葉もない噂話の典型じゃないか。私の頬は恥ずかしさで赤々と染まっていた。希海の横顔は緊張感に溢れて美しく見えた。ポートレート写真のようだ。陰影が鮮やかだった。希海はさくらを眺めている。やや眼を細めているように思える。反応としては過敏なのではないのだろうか？視線の先には、自由なさくらがいる。

「静かにしろよ、授業中だろ」私はさくらにそう言った。

「やったあ、アンディがついにしやべった！」いつの間にかさくらは立ち上がっていた。

意味不明の言動に今度はクラス全体が苛立ち始めたのか、誰も笑わなかった。そもそも私は無口なわけではない。どちらかと言えば饒舌でありさくらとは話さなかっただけだ。そしてクラスのほとんどはさくらに対して無視を決め込んでいたのである。先生は私たちの席の近くにやつてきてさくらに注意した。

私は関わりたくなくなつて窓の外ばかり眺めていた。

隣のクラスが校庭で器械体操をしているのを見て珍しく思った。

この世界ではサッカー以外のスポーツを禁じられているかのよう
に、いつグラウンドを見てもサッカーの試合が行われているからだ。
クラスの男子のほとんどがサッカー部員で彼らは授業中に疲れて
眠っていても咎められることはない。多くの体育教師はサッカー連
盟に属していた。バスケットもバレーも器械体操も柔道ももう久し
くやっていない。いや特にしたいわけではないが。考えてみればサ
ッカーは慣れてきたせいもあって楽ではあった。たまに行く陸上や
水泳に比較すれば。

授業はさくらに中断されて凍りついたままだった。私の視線の先
には強風にはためいている日章旗と青い梢が輝いていた。希海の背
中越しにあった。希海も頬杖をついて器械体操を眺めていた。

三時半になってもさくらは帰らない。部活にも行かない。そのま
ま席に座っている。理由を問い質してみたが、関心を抱い
ているとは思われない。さくらに関心を抱き始めたなら何もかも
終わるようにさえ思えた。それで希海の方を見てみると長い脚を折
り曲げてソックスを履き替えている。同じような白いソックスなの
だが陸上の練習のためなのだろう。希海を視界に入れておくことは、
ほんの僅かな私と外界との繋がりにも思えた。

数人の生徒がグズグズと教室に居座り続けていた。

やがて平野教頭が現われた。今から赤点の生徒の補習を行うから
該当しない生徒は出ていくようにと告げた。赤点でなくても勉強し
なければ残ってもいい。ほとんどの生徒は立ち上がった。三人だけ

が残っていた。真つ先に希海が教室を出ていく。私も出ていくこと
に決めた。

「先生！ 補習は職員室でするんじゃないんですか？」クラス委員
長の久米が抗議する。

「今まではそうだったんだけどⅡ組で十人も赤点がいだから職員
室が一杯になってしまつてな。このクラスでもひとつ間違えば十人
くらいにはなるよ。ほとんどが五十点以下だからな。確か君も今回
は芳しくなかっただろう」先生は久米に向かって言ったが顔は私の
方を向いていた。久米は鞆を担ぎ上げると逃げるように教室を去つ
た。

自分の属する部活の部室に行くか、安藤先生との約束を守って職
員室に行くかだった。もし茶道部に男子が一人でもいれば私は茶道
部に入部していたかもしれない。女子ばかりだったのでそこに入る
わけにはいかなかった。演劇部や文芸部があればそちらに入つたの
だろうが、私たちの高校にはなかった。新たに部をつくるというの
は、とうてい出来そうにない私は誘われるがまま放送部に入った。
放送部ではトラブル続きで、私と口を利く女子は誰もいなかった。
私が部員の英子に対して煮え切らない態度を取つたのが部内の女
子全体の反感を買つたに違いなかった。それから年度のしよっぱな
から一ヶ月も休んでいたの番組の編成に支障を来して、謝れ、謝
らないの問答になった。折り合わず平行線のままだった。自然に部
に顔を出すことは少なくなった。私が学校を退学してしまうのでは
と思われるようになった。録音担当という明らかな裏方になってし

まい以前のようになり私のシナリオを元にして番組をつくることはなくなっていた。

ためらいながら放送室の前まで来ると録音中で中に入れなかった。網の入ったガラス越しに中を覗くと数人の部員が動いていた。私に気が付いたようだが中に入れとは言わなかった。私は居場所を失った気がした。微かに漏れているのはクラシックの楽曲だった。耳に届く木管楽器の音色は懐かしい感触を私の各器官に呼び覚ましていた。

その気分のままに私は職員室に行くことにした。

得意科目の国語の教師に相談するのは屈辱に思えてならない。それは似通った回路の閉じられた世界で堂々巡りの話をするだけにならないだろうか。

例えば担任の川岸先生は年配の英語の先生だ。常々、これからは国際舞台で活躍しなければいけないと口にはしているものの発音は明らかにジャパニーズイングリッシュで少し訛りも入っていても真似できたものではない。中学生の時も英語の先生は祖母と同じくらいの年配の先生で、昔は英語を勉強していたのはバンバンくらいで戦後だいたいぶたっても私は非国民となじられたものさと私たちには理解できない話をしていた。けれども英語の先生たちが言われることには夢はあった。確かに多国語を自由に操れば私たちの世界は開ける。それは政治・経済や数学や物理・化学にもいえる。未知の世界が開けてくる。けれども国語、ことに古典や漢文や日本史などは学んだところで私たちの何かが変質していくものではない。

い。それらは未来に向かわず過去に目を向けたものだ。今では役に立たなくなった公式や法則を科学がいつまでも保管しているということは絶対にならない。だから安藤先生と話してみてもおそらく私の気持ちは伝わらないだろうと思うのだ。そうはいうものの私の成績は英語をはじめとして軒並み一年の頃に比較すると著しく低下しているのだった。

夢見る前に可能性は削られていった。

他の生徒がどう考えているか私は気にしなかった。ふたつの道、サッカーでインターハイに出場して栄冠を勝ち取るか、理系進学校に三年になったら入る。私たちに残された選択肢はそれだけしかない。息が詰まりそうだ。私にはそのどちらもたいして魅力的には映らない。自分の考えを纏めて手帳に記した。安藤先生にそう伝えようと。

職員室の硝子戸を引くと汗の匂いが充満していた。補講の生徒でいっぱいだった。

窓際にいた安藤先生は近視なのか眉間に皺を寄せて私の方を見た。立ち上がってニコリともせず私を手招いた。

「やっと来てくれたんだ」机の隣りに椅子を並べた。「ここでもいい？」私は頷いた。そうしていると落第点を取った補講の生徒と変わらなく見えた。

カルテじみた書類を引っ張り出すときこちなくめくった。

「川岸先生ショックを受けているそうよ」安藤先生は笑いながら言

った。笑い事ではないだろうと私は少し憎んだ。

「クレペリン検査でもかなりの異常値なんだ。真面目にやってないんじゃないの？」

「そんなことはありません」

「こういう検査は真面目にやらないと何の意味もないんだから。あなたに限らずクラスのほとんどが異常値を出しているようなんだけど」

「真面目にやらなかったら全部はできないはずですよ」

「止めと言われてもやってたらできるわよ」

「単純な計算は得意なんです。珠算をしていたから」

「ああ、そう思って数学の平野先生にも相談したんだけど微積分じゃ計算ミス連発じゃそうじゃない」

「それは、実は最近になって調子が悪くなってきて」

「問題は中学の時にやったIQテストの結果なんだよね。何、この異常値」私は黙っていた。親が呼び出しを受けたのもこれが原因だった。川岸先生はセンターからの結果をひどく気に病んでいるらしい。

「言ってもいいのかな」

「少しは親から聞きました」

「こんなのあたしは気にしないけどな。あてにならないし普段からあなたを見ているとそうは思わないから」

「わかりました。はっきり言ってください」

「自殺する可能性九十%だって」

私は驚き呆れた。死について考えたことなどほとんどない。どういう判定基準なんだろう。

「そんなのデタラメです」

「テストの時の心当たりは？」

「あ、たぶん図形の相似形を探す問題のことかと思います」

「詳しく教えて」

「はじめ問題を見た時にこんな難しいのはとてもできないだろうと思っていましたが、初めの何問かをやってみたら、問題を見た瞬間に答えが浮かぶようになってきて面白くなってどんどんページをめくるくらいに速度でできたんです。全部やり終わって、それで別の問題もやっちゃいました。その時は味わったことのないような気持ちの良さがありました。やってはいけないことは知ってましたが、問題が簡単に解けるのは気持ちがいいんでその誘惑に負けてしまいました」

「ああ、そういうことなのね。要はたまたまできたっていただけなんだよね。別の問題までやったのはまずい。そりゃ異常値になるわよ。川岸先生にはっきり言えばいいじゃないの？」

「言おうと思ったんですが川岸先生が避けているようで言い出せなかったんです」

「そりゃ自殺可能性が九十%の生徒がいきなり四月から一ヶ月も休めば避けたくもなりますよ。でも川岸先生どうして連絡を取らなかったのかしら」

「何度か電話はくれましたが、僕はいなかったんです。その時、東

京にいました、母が心配されなくてもいいですから先生に告げました、東京のひいおばあさんが危篤なんで祖母と様子を見に行つたのです」

「それは本当の事なの？」

「一応、本当です。ひいおばあちゃんは死んでしまいました。なかなか東京には来られないので葬儀をして初七日や四十九日も済ませたのです」

「でもあなたは別の事をしてましたね。ちゃんと照会があったからこそこそも隠せないのよ」

「ああ、受験のことですか？ はい、僕は確かに祖母の薦めで東京の私立高校への編入試験を三月末に受験しました。でもその高校はとても難しくてはじめから合格するなんて思っていなかったんです。先生には年度末だったから相談しませんでしたけど。誰に相談していいのかわからなかったから」

「そういうこと。辞めるつもりだったの？ 学校が気に入らないから」

「いえそういうわけじゃないんです。祖母が東京の出身で、もうこのまま余生を東京で暮らすといつてきかないから。それで僕もあと何年かして東京の大学に進学するなら高校のうちから東京で暮らせばいいんじゃないかって祖母を初め親戚が言い出したんです」

「周囲はそう言ってるのね、それで明史くんの気持ちはどうなの」
先生は手帳に書く手を休めて私の顔を覗き込んだ。傾いた陽射しが眩しい。

「いえ、あの高校は無理なんです。周囲の人が買い被っているだけです」

「無理とかじゃなくて！ あなたの気持ちです。私が知りたいのは！」

「よくわからないんです！」

「行きたいんですよ。東京に」

「知ってどうするんですか！ 口じゃうまく言えないから書きました」

安藤先生にメモを渡す。人のたくさんいる場所なのにデリカシーのない人だと思ふ。「国語の成績から見るとそうは思わないんだけど。他の科目はそれほどでもないの？」

先生はカルテに目を落とす。捲る。また捲る。目を見張る。顔が強張る。

「ひどいね。ほとんど赤点寸前じゃないの。見損なつたわ」口元が歪んでいた。

「これが現状なんです」私はうなだれた。

「まあ、次回頑張ることね！ それなら学校が嫌だから転校したいとか人間関係で悩んでいるとかそういうことはないのね。学業不振は四月に授業を受けなかったからなのね」安藤先生はカルテを閉じた。

「特にないです。部活ではちよつと仲違いしてますが」

「じゃあ伝えておくからね。川岸先生に」安藤先生はウインクをした。私は素直には喜べない。安藤先生は自分の中の疑問が解消され

ればそれでいいだけなのであった。

翌日は朝から川岸先生の授業だった。温厚で心配性の川岸先生は長く農業高校で教えていて、本校では学校農園の面倒を見ていた。前任校では牛馬の世話が生甲斐だったと語った。浅黒い皺の刻まれた顔は篤実そのものだ。無法者の襲撃に脅かされる西部劇の被害者に似ていなくもない。

先生の眼は黒くて小さくて紛れもなく日本人であった。

リーダーの授業は退屈極まりない。途中で補講受講者の名前と点数を発表した。私は三十五点、赤点ボーダーは二十五点なので免れる筈であったが、私の名前もあつた。抗議したいところだが何かあるのだろうかと思った。

「前回のテストと比較すると著しく成績が下がっているの」とだけ理由として付け足した。

「哀しいよ。アンディがそんなに成績が悪いなんて。あたしと一緒にじゃない」もちろん説明などはしない。私は沈黙を守り続ける。それよりも希海に知られたのはショックだった。心底軽蔑の対象になったに違いない。もう何もかもがおしまいだ。川岸先生は復讐したのだ。

安藤先生には言えることを何故私には言わないのか、おそらくそう言うだろう。メンツを潰されたから教室で私に恥をかかせようと試みたに違いなかった。

ファーマーは篤実なだけではなく陰険でもある。

発奮材料にはとうていならなかった。私はひとりでもがき苦しむだけであった。

もしかして何らかの有効な助言をしてくれるかと期待した安藤先生には事務的にあしらわれておまけに裏切られた。きつとありのままに川岸先生に知能検査の不正を伝えてしまったのだろうか。そこをうまく伝えられなくてどうして国語教師と言えるだろうか？

午後、いつものように希海はソックスを履き替えている。長い引き締まった脚は毎日走っているだけあつて筋肉が盛り上がっていた。

教室に残っているのは、私とさくらと島田英輔とその他数人。川岸先生は希海に早く出ていくよう促した。その言い方はひどくそつけない。

リーダーの試験は前回のテストと同じものだったので難なく出来た。英語の成績が悪くなったのは数学と物理や化学ばかりを勉強していてそこまで手が回らなかったからだ。理系進学クラスは希海が希望しそうだから私もそうしようと思っただけだ。

提出すると他の生徒は唸りながら机に齧りついていた。

先生は私を手招いた。それから私の耳を牛にするように挿んだ。

「IQテストは不正って本当なのか？ 安藤先生から報告受けたぞ」

「はい」

「それについては以前のことだから咎めないが。まったく、心配したよ。私は安心したけど、理系の先生たちはセンターの分析結果よ

りも問題を解いたことに重きを置いていようだぞ」

「いえ、あれはまぐれですから」

「私も君は理系じゃないと思ってるが将来を考えるならそっちのほうがいいかもしれん。だがいづれにせよ英語は重要だ。君はあまりよくわかってないようだが」

その後、根掘り葉掘り尋ねられたが私は「はい」と繰り返しているばかりだった。自分の言いたいことが、ちっとも表現できないもどかしさは残ったが、川岸先生との関係は修復されたようで安心した。特に他校を受験したことについてはまったく触れられなかった。ので先生に対しての信頼感を得られた。陰険と感じた自分を恥じた。補講を終えて教室を出ようとするときくらが走り寄って来た。

「部活しないの？」

「辞めるかもしれないな」川岸先生との関係が改善されたためか、いつの間にかさくらとしゃべっている。

「their own children って何？」

「ああ、さっきやったじゃないか」

「own って」

「俺も知らないよ」面倒なのでそう答えた。「詳しくは」

突然、背後から英輔の声が聞こえてきた。

「own は own goal だよな。オウンゴールといえは明史が代名詞」

「喧しいな」

「坂本先生が明史をサッカー部に入れたいって言ってたぞ」

「どうして？」

「いろんな理由が山ほどあるみたいだぞ。もちろんプレイヤーとして期待されてるわけじゃないけど」英輔はにやけている。

「でも一緒に補講を受けるなんて夢にも思わなくてなんだか嬉しいな。明史も俺たちの仲間になったかと思うと」

「それ、言えるよね。勉強ばかりしてるようなイメージだったから。希海と一緒にさ」

「言っておくけど新井さんとは一度も話したことはない」

「あたしとだって今日初めて話すじゃない」

英輔の身長は百八センチを超えているだろう。見下ろされているようだ。英輔は思いついたように言う。

「今からサッカー部の部室に行かないか？」

「ダメ。アンディは私の家に来ることになってるの！」私はさくらを正面からようやく見つめた。

「行かないよ」

「そんなこと言うなよ」

「強引だな」

「私、勉強して海外に留学することに決めたの。だから英語教えてくれないかな」

「いつ決めたの？」

「今」

「適当な人だな」

「サッカー部には明日行くようにするから今日は私の家に連れて行くわ」

英輔は立ち止まった。

「それなら明日な。必ず」私は入るつもりはなかったが、坂本先生の話には興味があった。一年の時の担任でもある。その進路相談の際に独特の意見を展開していたからだだった。

さくらは私の腕をカエデの葉のような小さな掌で挿んでいた。

樹木の鬱蒼と生い茂り、何の建物かわからない外観の、郵便局の前を歩いていった。

二手に分かれた道はどちらも結局は駅に通じる。人通りの少ない路地をさくらが選んだ。

学校のある町から電車で小一時間はかかった。少し曇っていたから潮風が吹きすさんでいた。歩いている間中、学校の近くにできたショッピングモールの話をしていった。さくらの住む町にはコンビニさえないそうだ。私はこれまで自分のことばかりを考え、外界を遮断していたに等しかった。放送部以外の人間関係を知らなかったの、さくらから聞く話は真実かどうかは疑わしかったが、興味深かった。何人かの女生徒が援助交際をしているとか、クラスの誰と誰が付き合っているかという話だった。私は彼女の話あまり信用してはいない。

「ここで生まれたわけじゃないのよ。お父さんが騙されてしまったの。マンションは新しいんだけどちょっとここはねえ」さくらの歩みは緩やかになっていった。

「ああ、それはこの前聞いたよ」

「アンディ、疲れてない？ あたし疲れたわ」さくらはしやがみこんで携帯電話を取り出した。何処かに掛けている。それからあれこれ話し始めた。

「お母さんがレクサスで迎えに来るって」

「そんなに遠いの？」

「うん、まだ山をひとつ越えなきゃいけないからね」

「自転車は？」

「いつも送り迎えしてもらってる」

「意外とお嬢さんなんだな」

「だって危ないでしょ。誰も歩いてないよ。車に轢かれるかもしれないし。一応、あたしだって女の子だからね」

「そう言われればそうだね」

「今日はアンディがいるから大丈夫かなって思ったの」レクサスって高級車じゃないか。私は携帯すら持っていない。特に欲しいとは思わなかった。

サングラスを着用したさくらの母親は派手に髪を染めていた。言われるままに車に乗った。私に対してさくらの母親は慇懃だった。友だちがいらないようだから仲良くしてあげてね。他の母親と変わらないことを言った。けれどもさくらの母親が言う普通でなく不気味に思える。

繫留してあるヨットやモーターボートは漂着物のように傷んで表面が剥げていた。波のしぶきがかかる場所に、円筒のリゾートマンションが二棟聳え建っていた。外観はかなり古びている。新しい

マンションとさくらは言っていたが。地上から数えると三十階以上はあるだろう。私はまだ強い風の残る海辺に立って、威容に眼を見張る。

「すごいですね！」私は感嘆の声を挙げた。

私たちはひどくゆっくりとしたエレベーターで二十九階まで上がって行った。

「このあたりの地価は震災以来ひどく下げているのよ。マンションも耐震基準前のバブル期の物件だから空き部屋ばかり。格安よ。風の強い日には揺れている。南海トラフに耐えられるのかしら」

クリーム色に統一されたまばゆい光に満ちた部屋に通された。なるほど巨大な一眼レフカメラのレンズのような丸窓が海に面して嵌っている。そこから岩礁や小さな港、彼方の空港島や行き来するタンカーや貨物船を眺めることが出来た。しばらく眺めていると母親は檸檬と紅茶を運んできた。シナモントーストが付いていた。まるで喫茶店のようだった。

「あっちに行つてよ」

来る途中にあれこれ話していたのですっかり母親は私を信用しづらい。すぐに出て行く。衣装ケースの上やテレビの周囲には高校のセーラー服や詰襟の制服を着たフィギュアが窮屈そうに並んでいた。二十センチほどはあっただろうか。精巧さが不気味だった。秋葉原などで売っているのだろうか。

「これバルモアの人形よ。いいでしょ」

「いや知らない」

「知らないの？ これモンタン」さくらは一体の可愛らしい人形を手にした。

「賢くてスポーツマンなの」

「マンって。これ希海さんと関係あるの？」私に人形を手渡す。特に似ているとは思えない。

「パンツとか見ないでよ」

「見てないよ」人形を見てもしよがないだと私は思った。

「そうよ。似てると思うんだけどなあ」

「似てねえよ。強いて挙げれば髪型がショートヘアってところくらいかな。ああそれで希海さんのことをモンタンって言ったのか」

気が付くと母親が立っている。

「アニメの話ですよ。お父さんも好きだからね。これ一体で何万円もするのよ」

「バルモアって」

「そういう通販のお店があるみたいなの。あなたもフィギュア好きなの？」

「いえ、僕はこんなの初めて見ました」

「アンディは何にも知らないって！」

「これサッカー少年のサンダースよ。背が高くて英輔に似てるでしょ」

「おお、確かに」さくらはサンダースとモンタンをくつつけてチュツチュと言いながらキスさせていた。

「よせよ」

「あら妬いてるんだ」

「バカなことしないで勉強でも教えてもらったらどうなの？ちよつとスーパーまで買い物に行ってくるからね」言い捨てて母親は再び出て行った。

さくらはステレオのポリュームを最大限にしてレコードを掛ける。そういったものを私は初めて見た。轟音が部屋を埋め尽くす。ジャケットはひどく傷んでいてボロボロだった。

「ヴァン・ヘイレン？」ジャケットの文字を読んだ。

「お父さんのよ。お父さんはね、売れないミュージシャンなの。お祭りとかで唄ってるよ」「こういうのを？」

「そういうのを。でもちよつと違うかな。ヘビメタルっていうのかな」

「ヘビーだろ」音量に負けないように私は大きな声で言った。「そうヘビー」

「さあ勉強するか。留学するぞ。この部屋に居ると海の向こうが気になるからな」さくらは大声で叫んで立ち上がった。私はさくらが希海とまったく同じ制服を着ているのを恨めしく思った。これが希海だったらどんなにいいことだろうか。

「彼女は海を見ていた」私は不意に呟いた。

「何？」

「訳してみて」

「英語に？」

「そりやそうだよ」

「おお、こ、これは。同じ言葉が並んでいる」さくらが言う。

「？」ノートに目を落とす。私は目を疑った。See see see.

「なんだよ。それ。ふざけてるのか？なんで彼女が See。She だろう」

「うう、そうだった」

「シーソーザシー」

「アンディも川岸先生も発音が悪いなあ」

「お前、発音以前だろう。これは過去形、これは定冠詞」さくらはぐちゃぐちゃだった。山のような学習塾の教材や通信添削の教材を持ち出してきたが、ほとんどが新品だった。

「俺らの高校は学校自体アホだからな、その中で最下位だとこれくらいになるか」

「うーん、モンタンやアンディが神様に思えた時もある。あーあ神様は不平等だな」

「そりや何にもやってなきやそうなるだろう」それからしばらく勉強したがさくらはすぐに飽きてしまつてゲームを始めてしまった。

「アンディ。一番の成績の子は孤独だよ。誰も俺の気持ちをわかってくれないって思ってるでしょ。だからモンタンが好きなんですよ。でも一番を守り続ける子と一番からだんだん下がっていく子とは違うんだよ」

「なんだそりや、あてつけがましいな」

「ずっと最底辺の子もいるし、いつも平凡な点しか取れない子もいる。どんなに頑張っても十番から上がらなくて力尽きる子もいる。」

だからみんな孤独なんだよ」

「それで？」

「もしあたしが勉強していい成績を取ったら誰かが最下位に落ちて悩むかと思うと悲しくて勉強できない」

「最下位を抜け出してから言えよ」

「ねえ、モンタンが化学分からなくてアンディに教えてもらったからアンディに教えてもらいなさいって言ったのよ。教えたの？」

「教えてないって。俺は希海さんとはしゃべったことがないんだから」

「じゃあモンタン嘘ついたの？」

「知らないよ」

「悲しいなあ。桜が咲いている頃はモンタンと友達だったのに！」

「知らない、知らない。俺は何にも聞いてない」

「アンディはモンタンのこと知らないのよね、みんなが思ってるほど良い子じゃないよ。きつと」

「そうだろうか？ 私はこの話を聞いて、希海は優しい子なのだと思います。思っているのだが、でも何か変わった部分もある。」

「それにしてもこの窓からの景色はなんとという眺めなんだろう。このツインタワーを設計した人は安全性を無視しても手に入れたいたものがあつたのだ。」

校舎から出るとすぐさまバグからサッカーボールを取り出した英輔は、足の上にボールを滑らせたなり少し強く蹴って、空中にボ

ールを浮かせ頭の上でバウンドさせたりと曲芸のようにボールを操っていた。

「何してるんだ。真剣に」

「リフティングだよ。見てると面白いだろ。やってみると大変だよ」

「僕もやらなきゃいけないのかな、そんなの無理だと思うよ」

「さあ、入部するならやらなきゃな。でも今さら始めてもレギュラーにはなれねえからやらなくてもいいんじゃないか？」

「じゃあ、何をするの？」

「マネジャーだな、俺らのユニフォームを洗濯したりスコアを付けたりするんじゃないか」

「そんなの嫌だなあ」

英輔がリフティングしながらジグザグにグラウンドを進んで行くので部室まで随分かかった。グラウンドには野球部や陸上部が練習していてじわじわとサッカー部員たちが皆リフティングしながら中央に集まりつつあつた。

「連れてきました」

「おお、明史。サッカー部に入る気になったか！」坂本先生は狭い部室内でリフティングをしていた。ボールをいきなり私の顔面に蹴ってよこしたが、頭に当たってうまい具合に先生の脚に届いた。

「ヘディングうまいじゃないか」

「何もしないですよ」

「そりやそうさ。あ、英輔は練習に行けよ」

浅黒い顔を突き出してくる。部室の中は湿っていて汗臭い。

「マネジャーさせるために呼んだんですか。僕はリフティングなんてできないですよ」

「ん、やらなきゃできんだろうな。安藤先生から聞いたよ。成績悪くなっちゃったんだってな。明史、気分転換も必要だよ。身体を動かしてすっきりした頭で勉強するのさ」

坂本先生はまだ若い。三十過ぎたあたりだろうか。

「マネジャーといっても作戦を立てたりマークすべき相手を偵察したりしてもらいたいんだけどな。選手としては全然期待してないからそっちはいいんだけど。だけどオウンゴールばかりしていちやつまらないだろう。今までに二十点は超えているそうじゃないか」

「はい。でもディフェンスばかりなんで多少は仕方ないです」

「それは意図的に自軍のゴールを狙ったものか？」

「え？ そんなことはないです」

「じゃあ、どうしてなのかな」

「相手のシュートを蹴り損なったりしました。まあ僕に技術がないから」

「教えようか。もちろん技術があればオウンゴールは減っていたが、ほとんどはサッカー部員がお前の身体に当ててゴールしたものだ。そうしろと指示した。同じクラスだから英輔は知らないだろうが。つまりお前のポジションが悪いな」

「ああ、そういうことなんですか」

「お前がキーパーに近過ぎるんだよ。オフサイドポジションも狭まってしまう。それに気が付いていない英輔もまだまだだな。まあ普

段の体育の授業くらいではオフサイドまで煩く言わないだろうけど」

「二宮先生は何も言わないですよ」

「ああ、彼は陸上競技の先生だから知らないんだよ。どうだ、少しはやる気になったか？」

「いえ」

先生は話している間もずっとボールを操っている。

「まあ少し練習するから見て行けよ」坂本先生はグラウンドに飛び出して行った。私も後についていく。

それから全員で準備体操をしてからミーティングに入った。戦術論が中心であったが私には理解できない。その間中、リフティングは続けられていた。

「明史もやれよな」言われてしぶしぶ私もリフティングを始めた。いったん部室に戻って余っているウェアを借りた。

「来週に他校との練習試合を組んだ、相手は西高。ありや弱いから楽勝だと思う、弱い奴に勝っても下手になるだけだ。それでお前らに課題を与える。前半は明史をディフェンスで使う。いかに彼をカバーするか、明史はディフェンスの時はゴール前に突っ立ってる。動かなくてもいい。これでオフサイドにならないから相手はどんどん攻めてくる、それでもゴールを守れ。十人になった時の練習だと思え。後半は明史をフォワードに使う。そしてパスを回して明史にゴールさせるんだ」

「無理でしょう」英輔は苦笑した。

「そうかな、練習としてはいいと思うけど」坂本先生が言う。

「やっぱ無理か」

その時、眩い光を放つ赤いショートパンツ姿の女子陸上部員たちが三人近寄ってきた。

「英輔！」三人は口々に言う。

「あれ、明史くんじゃないの。いつの間にサッカー部に入ったの？意外に似合ってる」

実にあっけなく希海は私に話しかけてきた。上気して息を弾ませる。胸の先端が異様に尖っているのを見て目がくらんだ。

「今、入った。あ、先生、今度の試合面白そうです！ やります」

「西高にもハンディをやらないと可哀そうだからな、あとキーパーも西条、お前やれ」

おそらく西条という部員もあまり上手くないんだろう。知らない奴だった。

「先生、あんまりな言い方！ 明史くん見返してやりなさいよ」それから希海はカラカラと乾いた声を上げて朗らかに笑った。だが部員たちは皆乗り気ではないらしく訝しげな表情で私を眺めていた。

その日はドリブルやシュートの練習もしたが、散々だった。次の日も次の日も練習した。

毎日、希海と少しではあるが話すようになった。私にとっては夢見心地な日々であった。

試合当日は朝から雨が降っていて本当に試合が出来るのだろうか

かと思ったがサッカーは雨でもやるのだろうかと思い返した。「おい、今日は頼むぜ！」冗談めかして英輔が声を掛けてきた。「俺の実力をお前に思い知らせてやる」今や休憩時間にはさくらと私をサッカー部員や希海たちが取り囲んでワイワイと騒ぐようになっていた。「自信はどうなんだ！」

「全くない。ドリブルが全然ダメなんだ」

「おお、それだったらパスを受けたらキープせずすぐに蹴れ。すぐにシュートだ。西高って言ってもお前よりは遥かに巧いぞ」

「坂本先生はそんなことを言わなかったぜ」

「一点取ればいいんだろ。試合中に俺が指示するから。俺の言うとおりにするんだ。先生は個々の判断に任せている。お前にはまだ無理だろう」

「ああ、そうだなあ。坂本先生はいいパスが俺に回れば俺でも得点できると思ってるんだろうな。そんなの無理だよ。フォワードなんてやったことないんだから。英輔の言うとおりでよ」

さくらが私に話しかける余地は全くなかった。さくらは苛立っていた。

「あんたたち、煩いんだよ。今までアンディに見向きもしなかったくせにさ」

「みんな見に来ていよ！ 俺の全力プレーを見せてやるからな」英輔は高らかに宣言した。

私たちは赤いユニフォーム、西高は青のユニフォームで揃えてい

た。西高は進学校で私は受験に失敗していた。それで多少なりとも闘志は沸いていた。彼らの顔は青白く眼鏡を掛けている生徒が多い。おまけに背も低く、見るからに弱々しい。これなら勝てるだろう。坂本先生は前回のミーティングでは私や西条を使うのはハンディと言っていたのもわからないでもない。

ぬかるんだグラウンドに立つと少し風が強いのがわかった。だが陽射しは強く、動いていないのに汗ばんでくる。

ゴールの後ろにはクラスの連中が応援に来ていた。さくらもいた。川岸先生もいる。もちろん希海もいたので私の緊張は最大に達していた。何日か練習していたので私はゴールの直ぐ前に立っていてももうオウンゴールを叩き込むことはないだろうと安心しきっていた。するとキーパーの西条が話しかけてくる。

「相手が蹴り込んできても触るなよ」

「え」

「俺が止めるから。下手に触って方向が変わるからゴールになるんだよ。いつもそうなんだろ」

「ああ、そうだな」

「もつと前に行けよ。相手をマークしなきゃ。それでドリブルの球を奪うんだよ」

「奪えないよ。それにここにいるのは先生の指示なんだ」

「今日はミッドフィルダーに英輔が入ってるからカバーする気なんだな。今日だけは絶対オウンゴールは避けるよ。みんな見てるんだから。恥だろ」

すると私はオウンゴールを極端に意識せざるを得なくなった。西条の言うとおりでだと思えばポジションを移動した。

甲高い笛の音が鳴り響いて試合が始まった。

「明史くん、ポジションがおかしいって！」騒がしい中でかすかに聞こえた。希海が発する波長の異なる声が聴こえる。私には聞き分けられるフルートのような響きだ。私はじりじりと戻る。

ところがほとんど、敵エリア内での自軍の攻撃ばかりで、センターラインからこちらにはまったくボールが来ない。

「暇だなあ」

「ああ」私は西条と話していた。

「もつと前に行けよ。大丈夫、誰も来ないって。なんでこっちに來るんだよ」

「今、聞こえただろう。希海さんの声が。ゴール前に居ろってさ」
「なんであいつの言うことなんか聞くんだよ。ばーか」いや希海の意思じゃなくて先生の指示を反映したんだろうと私は思ったんだが。

攻撃を繰り返して何本もシュートが放たれたが、初めからほぼ全員で守っている西高のネットは揺れなかった。

「なんだかイライラする展開だな」だんだんと味方の選手は攻撃に向かってしまつてセンターあたりは無人になってしまった。次のシュートはキーパーの真正面。

「来るぞ！」西条が叫んだ。

それは本当だった。キーパーが高々とボールを蹴ると西高フオー

ードが続々とこちらに向かってきた。

「チャンスの後にはピンチあり」

「行けよ。妨害しろよ」

私はしぶしぶ走り出した。戻れ、戻れという声もあったがほとんどは「行け！」という声であった。どっちなんだ！ 走ってくる相手にドリブルでは対抗できないから滑り込んだ。相手は倒れた。私も倒れたが、直ぐに立ち上がって自軍ゴールに戻る。ボールの行方を捜す。ボールは空中に浮かび上がって、二人の選手が激しくヘディングを応酬し合っていた。それを見て私は全力で元のポジションに戻って行く、私を追いかけ西高の選手が私に並走してくる。私は意味がわからない。そいつは手を挙げた。私のいる右サイドの方が守りは手薄で皆左サイドに集まっていたのだ。それでパスが飛んできた。私は奪おうとしたが簡単にかわされた。そして背後からシュートを窺っている相手の僅かな隙を突いて先に滑り込んでボールを蹴った。大きく逸れるように蹴ったつもりだったが、足の甲にまともに当たったボールは左ゴールポストの辺りに一直線に飛ぶ。反対側にいた西条の焦った顔がちらりと見えた。ボールは西条をかすめてゴールの内側に当たりコロコロと転がってネットを揺らした。

「あーあ、オウンゴール」さくらが叫んだ。続いて聞こえてくるのは罵声の嵐と笑い声。私は耳を塞ぎたくなかった。

「やっちゃまったなあ！ キーパー正面なら良かったのに」英輔が言った。

西条の怒りは一気に頂点に達した。

「お前、わざとだろう。俺に恥をかかせようとしやがって！」

「いや、すまん」私はいつものように平謝りだった。坂本先生が飛び出してきた。タイムをかけてみんなが集まる。

「おい、何で余計なことばかりするんだ。ゴール前にいればいいじゃないか」

「でもパスの時に僕より前に相手がいたから、あれってオフサイドじゃないんですか？」

「オフサイドにしたってその判定がある前にお前が蹴り込んだじゃないか。相手にパスが渡っているとは言いついてないんじゃないか？」

「こんな練習試合でオフサイドも何もないんだよ。審判だって一人だけだし」西条は明らかに苛立っていた。

「先生、今のゴール、僕のせいですか？」西条は聞いた。

「いや、みんな悪い。俺のイメージと全然違う。相手の下手に合わせるんじゃないか。お前らちゃんとパス出してるか、適当にシュートしてるだけじゃないか。攻撃に失敗したからやられたんだ」

試合が再開されると英輔はじめ何人かが攻撃の手を緩めて守備に回るようになった。すると相手はカサにかかった攻撃を仕掛けてきた。今度は私の反対側のサイドが破られた。私のいる場所を固めたので反対側が手薄になったのだ。パスが渡りセンターから相手がシュートした。閃くような当たりで私は動けない。西条も動くことが出来ない。あ、二点目と思った瞬間、走り込んでいた英輔がボール目がけて思い切り突っ込んだ。地面すれすれの低い弾道に向けて

正確にダイビングした。頭部にボールが当たり逸れて行った。ゴールは免れた。おおっと歓声がどよめいた。

「これだ！これが俺が見たかったプレーなんだ」坂本先生は立ち上がっていた。ところが、英輔はなかなか立ち上がれない。

安藤先生や希海が英輔の周りに集まってきた。

「大丈夫？」安藤先生の悲鳴にも似た声が耳に届く。

「あ、ひどい擦り傷」希海が英輔の手を掴んで起こそうとしたので集まった女子が皆で抱き起していた。西条と私も手伝った。希海に抱きかかえられる様にされては英輔も立ち上がらざるを得ない。私はものすごく羨ましかった。おそらく西条もそう思っていたに違いない。

「早く後半にならねえかな」西条が言った。

「お前がいると不安で仕方ないんだよ」

「わざとじゃないよ」

「今のシュートだってお前をカバーしようとし過ぎたせいで打れたんだろう」

「お前こそ何で前に出ていくんだよ。ちゃんとゴールを守れよ」

「何だこの野郎！」

英輔はフラフラとしていたが戦線に戻った。しばらくは立っているだけだった。フォワードが必死に攻め込んでいたが何本かのシュートは空しく弧を描いてゴールを外れるかキーパーの両腕に収まるかのどちらかだった。

前半が終了した。集まると試合に出られない選手たちが不服そう

なのが明らかだった。通常なら私と西条と負傷している英輔は、交代しても不思議ではなかった。だが、坂本先生はフォワードもディフェンスも悪いということで三人はそのままにして、成果を上げられなかった別の五人を入れ替えた。予定通り私は右のフォワードに変更になった。

「西条、今度は前に出過ぎるなよ」何人が頷いた。西条は不服そうに俺のせいかよという顔をした。

後半、私は相手ゴールの見える位置に立った。英輔が隣にいる。彼はまだ余韻を引きずっていて疲れているようだった。

笛が鳴る。取りあえず同点に持ち込まなければならぬ。その思いは皆同じだったのかボールを奪うと果敢に攻撃した。だがマークが厳しくてなかなかパスが通らない。イチかバチかのシュートを繰り返す。とにかくパスが飛んでこない。たまに英輔にはパスが行くのだが英輔の周囲には、常にマークが数人いてボールを取られてしまう。膠着状態が続いた。

十五分が過ぎる頃に何らかの指示があったのか、何本か私にパスが回ってきた。すぐに蹴れと言われていたからすぐに蹴ったが空振りしたり弱々しいシュートだったりゴールする可能性はほとんどない。そのうちに英輔に強い当たりのパスが放たれた。相手は英輔の周りに集まっていく。ゴールキーパーも正面に集中している。無理だろうなと思った瞬間、英輔は意図的に空振りした。スルーパスが明史の眼前に転がってきた。キープする間はなかった。ゴールは右側面からはガラ空きだった。私は無我夢中でボールを蹴り込んだ。

そしてゴールネットを揺らしたのである。

「やったぜ！」だが賞賛されたのは英輔の頭脳プレーだった。部員たちは英輔の頭を叩いて喜んでいる。もはや英輔はヒーローだった。さくらでさえも私に声援を送らなくなっていった。殊に希海の声援の送り方は常軌を逸した凄まじいもので声を張り上げていた。私はゴールしたのに残念で仕方ない。ただひとり英輔だけはありがとうと握手を求めてきた。それから何本かのシュートが打たれたが、パスは回って来なくなつた。やはり私にパスを回すよりも自分でシュートして決めたいと思つたのだろう。それは仕方なかつた。私は一本だけなんとか決めたものの失敗が多すぎた。坂本先生はパスを回せと罵るように叫んでいたが誰も言う事を聞かなかつた。

とうとう時間もなくなつてくる。思い直したのか、それでも英輔だけは自分に回ってきたパスを私に回した。受け取つても敵が前にいてシュートできない。私は英輔に戻そうとしたが時すでに遅く私の周りは敵だらけになってしまった。あつけなくボールを取られたので私は慌てて青いユニフォームを追いかけた。どこまでもどこまでも追いかけて行った、追いつけるはずもなくセンターラインあたりで私はボールと無関係の相手の脚を蹴った。するとそれを見ていた別の青いユニフォームが私のショーツを引つ張つた。半ば乱闘染みてきた。折り重なるように数人が掴み合う。

審判が飛んできて私たちを引き離そうとした。プレーを中断する笛を鳴らした。

ちょうど終了する時間だったので一気にみんなが弛緩した。西条

は引き分けだと思つてセンターラインにのこのこと歩いてきた。

「まだだろう」そう言い合つていたのは私の周囲、敵味方の数人。ボールの行方を捜すとゴール脇まで運ばれていてもう一度笛が鳴るのを敵はハンターのように待っていた。「戻れ！」私は西条に言ったが、西条が私の言うことなど聞くはずもない。音がするのと同じ時にボールはゴールに叩き込まれた。西高イレブンは、はしゃいで喜んでいった。

再び音がした。私たちは負けた。応援している人たちから失望の大きな溜息が漏れていた。フォワードになつてから走り詰めだったので、私は心底疲れてしまいその場にへたり込んだ。

「アンディ。サッカーは向いてないみたいね」さくらは私の耳元で囁く。明日、私の家においてよ。この前の続きやろうよ。

試合後のミーティングでは坂本先生の怒りが収まらず散々に私たちは怒鳴られた。他校との試合に負けた時にはグラウンドを何周も走らされるというルールがあつた。負傷した英輔を除いて私たちは日の暮れるまでグラウンドを駆け巡つた。その間、幾度となく西条は私を罵倒してきたから私も言い返した。だが私は西条が悪いのだと信じて疑わなかつた。

希海たちも何周か一緒に走ってくれたが、もう帰るねと部室の方に走り去つた。

日が落ちて辺りが闇になる頃、スーツ姿の坂本先生が「もういい」と言った。私と西条は芝生の上に横たわつた。他の生徒はそのまま部室に戻つていった。

芝生の脇には葉桜が見えた。意識が遠くなりそうだった。西条がまだ文句を私に言ってきたが私は言い返す気力もなかった。

葉桜の梢の向こうで白いものが動いていた。長い脚が背伸びしている。踵が浮いていた。張り詰めた脚は希海のものではないだろうか。私には思った。背中もいつも見ていたからおおよその輪郭は覚えていた。爪先立ちで何をしているのだろう。シヨートパンツの赤が微かに揺れている。

いつの間にか西条も木立に視線を泳がせていた。

「くそおつ、英輔ばかり良い思いをしやがって」西条は言うけれど私には英輔など見えないのだ。

だが希海などすでにどうでもいいと思っていた。目を逸らして見ないことにした。

(了)

木の翼

る

駅前植わっていたニシキギの紅葉が終わった。錦鯉が鯉の代名詞であるように、錦木が木の代名詞であるか、といわれればそういうわけにもいかないけれど、秋の終わりによく色づき、その見事な様子は錦の名に恥じないものである。またその燃えるような葉が全て落ちてしまっても残された木々の枝には「翼」と呼ばれるものが具わっており、それは枝の中心から四方向に長方形の翼が広がり、見た目CGであるかのような視覚的効果を演出している。息子はよくニシキギを「マトリックスの木」と呼んでいたが、それも理由のないことではない、私もその名を知るまではそう呼ばせてもらっていたのだ。

息子は、その年頃の男の子がそうであるように自動改札機の、現代において決してもう未来的とは呼べないその動作にやはり魅了されていた。子供が近未来に憧れるのはまた違ったものが自動改札機にはあるのだろうか、幼い子供は外界が自分の思考によって支配されているかのような万能感を持っていると精神分析の本で読

んだことがあるが、この古びた近未来は息子の差し入れる切符に端を發して魔法のようにその門を開く、息子の言語に翻訳すれば「ウーン ガシャン」といったところだ、私はそんなふうには勝手なことを考えながら、「こども」というボタンを押す私の背後に注がれるはちきれんばかりの視線をくすぐったく受け取りながら私もまた早く振り返りたくて仕方ない思いを隠しきれなかった。何にせよ普段乗ることの無い路線に息子と連れ立って乗るのだから、そこには日常とは違った何かが存在するのだろうし、私もまた浮き足立っていないとはいき切れなかった。

恋人、と言うと聞こえが悪いだろうが、夫は結婚して5年後に、大切にしていたトラックもろとも圧死してしまった。残されたものは息子だけ、なんてテレビドラマじゃあるまい、人並みにシヨックをうけ、人並みに落ち込んでしまつて何も出来なくなった私と息子の生活を死亡保険は補償して余りあるものを残した。さて、男が子連れの女をその腫れ物ともどもひきうけてお茶に誘うのはよほど本気であるか、よほど怠惰な関係であるかのいずれかである。私の場合は後者であった。伸宏は私の幼馴染であり、一度奥さんに逃げられた経験が私と過ごした幼少時代を美しくみせたのであるだろうか、とにかく、子供は置いて出てこいよ、などとは決して口にしないうところが救いであるような人物だった。もちろんタイなど締めては来ないが、それなりにちゃんとした格好をした伸宏を見て、幼い頃を知っているだけあつて毎回何故だか少しふきだしそうな気分にな

った。それは電車の中の緊張が解ける瞬間でもあり、まるで恋の疑似体験をしているようでもあった。

その伸宏に会うまでの少しの時間、電車が到着すると駅前のロータリーからカフェのある商店街へと続く散歩道にナンキンハゼが植わっている。ナンキンハゼは冬になると枝先にたくさんの白い実を実らせるので、それを見上げるとまるで雪がそのまま空中に固定されてしまったような印象を受ける。この時もいくつか雪が固定されていたが、息子に「雪みたいだね」などと言うと、息子はナンキンハゼを「雪の木」とでも呼びかねないと思い、私は少し躊躇ったが、ナンキンハゼを見上げている私を息子が発見してしまったので「雪みたいでしょ」と言ってしまった。以前、トウカエデという街路樹を見かけたときに枝の伸び方が猫の尻尾みたいだと言ったとき、息子はトウカエデを「猫の木」と呼び始め、挙句の果てには公園に植わったポプラを、柳の仲間だよ、と教えた途端に「柳の仲間」と不遜にも呼び始めてしまった。伸宏はなかなか現れない私たちを探しに来たところで出会ったのだ。息子が丁度「雪の木」の命名を終えたところであった。

「おーい明、何してんの」

明とは息子の名である。恋の疑似体験はやっぱり疑似体験に過ぎず、そのことが私を安心させた。フランスの国民だって毎年フラン

ス革命があっても困ることだろう、それと同じ原理で、恋なんていうものも一生のうちに一度あればいいものだ。伸宏もまたそのように感じているだろうことが私を安心させた。

「おじさん遅いよ」

私たちが時間に遅れたせいで伸宏をここまで来させたにも関わらず、息子の言葉は確かに「おじさん」が悪いかのような気にさせるほど、子供らしい真実味を帯びて寒空に響いた。私たちは三人連れ立って、本来の待ち合わせ場所であるカフェに歩を進めた。三人とも天を仰ぎがちに歩いた。

伸宏と過ごした幼年時代。とはいえ私の思い出が伸宏だけに占領されている訳ではない。伸宏はよく言えばマイペース、悪く言えばマヌケだった。要領の悪い伸宏は小学校の漢字テストですら勉強しても良い点が取れなかった。私も成績優秀というわけにはいかなかったが、良くも悪くも優等生であった。「家が近い」ただそれだけの理由で、私はよく伸宏を連れ出して昆虫捕りに出かけた。私はどちらかというとき動くものよりもケヤキやスギなどの喬木に囲まれた空間にひっそりと息を潜めながら、水の中にもいるかのようにゆっくりと体を動かすのが、なにやら秘密めいて好きだった。伸宏はちゃんと本来の趣旨を忘れずに甲虫を探した。それでも見つけるのはいつもクワガタやカブトではなくカナブンだった。

明は父親に似たのだろうか、伸宏のマイペースとは違うが、勝手に自分の世界を作り出してそこに没頭する癖があった。

「明のお父さんも変な人だったなあ」

「お父さんってお前の旦那だろうが、もとは」

「そうだったそうだった」

伸宏は私の発言を咎めるわけでもなく、ちよつとしたおかしさから私に物申したくなつたのだろう。明は父親を知らない、明の父親が死んだのは明がまだ一歳の頃で、明に父親の記憶を話しても、なにやら知らない国の経済状況を聞かされている女子高生みたいに、キョトンとした表情を浮かべて、気付くと「こども辞典」を眺めていた。

明と伸宏は30もの歳を隔てながらどこか友人めいたところがあつた。「おじさん」が明の視線の先を読み取り、往來を走る車に対して、「あの車かっこいいな、明」と言うと、明は車には興味はないらしく、「おじさん、あの車の横にちようちよみたいなのがついてるね」と言った。「おじさん」は一瞬サイドミラーのことかと思つたらしいが、どうやらそうではないらしい。私は明がウインカー

の点滅をさして、何故だかちよちよのようだと感じたことを悟つた。そんな二人のやりとりを見てみると、幼い頃の私と伸宏の關係を思い起こさせた。私はいつも変なことを言つて伸宏を困らせていたし、伸宏は伸宏でそんなことお構いなしに次から次へとカナブンを捕まえた。

そんな二人の關係を見ていると、明が「お父さん」に似ているのは気のせい、結局、明が似ているのは私なのだということに気がつかされ、根拠の無いかなしい気持ちの海潮のように私の心をさらつた。誰かを愛すると言うことは、その人に自らをさらわれることだと思つていた私は、「お父さん」の忘れ形見がどうしようもなく私であることに少しく悔しい思いをしたのだ。そんなことを思いながら窓から覗く街路樹を見つめていた。そこに植わっていたのはアメリカフウであったが、紅葉も過ぎ冬の装いをした寂しい木を見て、どこにもいけなかつた私の感傷を重ね合わせていた。

まだ高校生だつた頃、私はよく詩を読んだ。ハイネやアイヒェンドルフなどの、優しい詩が好きだつた。私はハイネの一篇の詩を思ひ出していた。

北の果てには樅の木が

不毛の丘に独り立ち。

雪と氷の白い覆いで

包まれながら眠ります。

夢に見たのは椰子の夢、

遠く向こうの朝の土地、

独り黙って悲嘆に暮れる

燃えだしそうな岩壁の上。

何の変哲も無い詩だけれど、高校生だった私でも、この詩の意味を深く理解していたと思う。地中に深く根を下ろす木は風に転がされることも無く、鳥に運ばれることも無く、どこまでもその場所に根ざしている。私もまた、当時、そのどこへもいけない予感にうち

ひしがれて、けれど、いくらかの優しい諦めを伴って、この詩を読んでいた。木は、どこへも行けないけれど、夢を見るのだ。それは遠く朝の国の椰子の木の夢さえ。もちろん夢を託すのは人間の業であることはわかっている。自由に飛ぶ鳥が再び遠くへと飛び立つためにその羽を休める梢。風に舞って遙か遠くの地にまで運ばれる花粉。そのようなものが人間の想像力を培うのだろうか。小学校の国語の教科書には茨木のり子の「木は旅が好き」が載っているが、あの詩もまた、どこへもゆけない予感にうちひしがれ、それでも優しい諦めに根拠付けられた詩だ。私は「お父さん」と結婚して、明という大地に根を下ろした。「お父さん」はきつと生きていても私をどこにさらうでもなく、幸せなのか不幸せなのか分からない日々を平安と名づけて木のようにどこにもいかない毎日が続けるに違いなかった。それでも、私には私の突飛な世界を受け入れてくれる誰かが必要だ、なんてことを彼が死んでからはずいぶん思ったものだ。今では明が私を突飛な世界で驚かせてくれる。

私は伸宏と明の会話を曖昧な意識で聞き流しながら、いつしかこの「おじさん」が「お父さん」に変わることを想像していた。移り変わる景色のなかでいつまでもひとりで立っていることしかできない樅の木という常緑広葉樹の甘やかな孤独をアイスコーヒーにつき立てられたストローでかき混ぜながら、二人のことをずっと見つめていた。名付けた先から零れ落ちてしまう、そんな二人を私は優しい諦めでもって見つめていたのだ。違う、二人ではなく三人を。

伸宏があくびをする。子供のころから私の前でよくあくびをする人だったけれど、そこには退屈からのあてつけというよりも、もっと親しみのこもった何かがあるような気がしていた。事実、伸宏はあくびをするたびに笑った、子供のころははにかむようになり、大人になってからは微笑むように。すると、私は私の言葉が全部伸宏の口の中に吸い込まれてしまったかのような印象を受け取るのだ。そうなると周りの世界は私の言葉を忘れて、まるで布団圧縮袋が開かれると同時に空気を吸い込むみたいに、私の口からもう一度名前を吸い込みはじめなのだ。あ、またあくびした。幼友達、腐れ縁、今度はどんな名前を与えてやろうか。恋？ いやいや、それは違う。

物を名付けてしまうことになんとなく寂しさを覚えるようになってのはいつ頃からだっただろうか。明が言葉を覚え始めてから私は今までなんと狭いところにくまっていたのかと驚愕する思いだった。「お父さん」にそのことを話すと、笑いながら「お前は大人になっても子供みたいだから」と笑われた。真冬の星空の下でなんとか流星群を待ちながら空のオリオンを見つめて、やっぱり砂時計みたいだな、と感じて、明や「お父さん」は一体何を思っているのだろうか、ひそかに詮索する時、私はたとえ同じ場所に立っていても、何億通りもの物の見え方が存在すること、同じところに立っている木でさえ何億通りもの意味を生きていることの驚きを、

どこへもゆけない不安と、優しい諦めに付け足した。

その日、伸宏にプロポーズをされた日から数年の間、私は幸福でもあったし、同時に幸福であることが孤独でもあった。「お父さん」は相変わらずあくびをしたけれど、そのあくびは段々と私から飛び立つことの合図に思えてきたのだ。きつと、伸宏が「お父さん」になったからといって何かが変わったわけではない。けれどそう思うことによって、私は「お父さん」を伸宏として好きでいられるような気がしていた。明はちゃんと歳とともに花や木の名前を覚えていった。私は歳とともに色々なことを忘れていった。

昔、大学生だった頃、詩の講義でゲーテの「植物の変態」という詩を読んだことがある。当時まだまだうぶだった私は、いったいどんな変態的な植物があるというのか、と戦いたけれども、その詩は、木の生育を描いた詩であった。仔細はもう到底覚えてはいないのだけれど、木に花が咲くとき、それがまるで天への捧げものであるかのような描写に強い印象を受けた。咲き零れた花冠が木でもなく空でもなくどこか幽玄な空間に漂うものとして空想されていることに私は驚きとともにどこか懐かしさを覚えたのだ。まだ花の名前を知らなかった頃の。

ノヴァーリスというドイツの詩人が「木に咲く花は人間の思考のシンボルである」と記した書物を読んだのも大学生の頃だった。季

節とともに移り変わりながら様々な色や容で先端から咲き零れる花を思いながら、私は「花す」という言葉を思いついた。まだ皮膚の一部が脳になるなんて世界の誰も知らなかった頃、フロイトは幼児の自我は皮膚にあるのだ、と言った。花、鼻、端、どれも先っぽにちよこんと座っている。私は歳とともに段々と花の名前を忘れていく。けれども言葉話すことは、同時に言葉を放すことでもある。

明がちゃんと大人になってゆく姿を見ていると、やっぱり「お父さん」に似たのだな、という思いがした。けれども、当然のように私という梢から飛び立っていく明を見ていると、決してつらいなどとは思わなかった。同じところに立っている木の、優しい諦めが私の胸を充たした。飛び立つ鳥もいれば、翼を休める鳥もいる。それは花のように、一番端の部分で取り交わされる木の儂い言葉、話したり、放したりする夢のようなもの。

息子を預けられている間に仲宏のことをなんとなく呼べばいいのか戸惑ったが、その問題は自然と「おじいちゃん」と呼びはじめたことから呆気なく解決した。名前を与えることに関して子供ほどに戸惑いがない生き物はいないのだ。もし、あの日よりもう少し遅れていたら、思春期の難しさから仲宏が「お父さん」と呼ばれることも無かったのかも知れない、などと思いつながら、「お散歩」の道すがら立ち寄った駅前の通りに植えられたニシキギを見ていた。秋の装いはすっかり北風に吹き飛ばされて、綺麗に刈り揃えられ、発送前

の陳列済みダンボールみたいに整然と並んでいる。ニシキギという木の枝には「翼」と呼ばれるものが具わっているのだが、私はこの「翼を授かった木」を見ていると不思議なくらい親しみを覚えるのだ。ひとつひとつの翼がそれぞれに「遠く」を孕んでいて、それでもなお今ここにおとなしく植わっていることに、かなしかつたことやうれしかったこと、全部ごちゃ混ぜになって顔が綻ぶのを感じていた。

(了)

ヒトリと一人

R a i n 坊

生きている人間の呼吸がこうも気になるとは思ってもみななかった。手を伸ばせば届く距離にいるから——ということだけじゃない。微かなひと息ひと息が反響して彼女の存在感を際立たせているからだ。けれどそれが耳障りというわけではなく、むしろ僕の気分を高揚させてくれる。ぼんやりとしている彼女は規則的な呼吸の中に息をひそめた不規則な、ため息にも類似した静かで深い息をついている。緊張と疲れからか、表情が優れない。無理もない。エレベーターに閉じ込められて結構な時間が経ってしまったのだから。

彼女は僕のことを知らない。だけど僕は彼女のことを知っている。彼女は川崎きよらさん。一か月前にこのマンションに引っ越してきた女性だ。

華やかさの欠片もない武骨で傷だらけ、どこか不気味さも感じてしまうほど薄暗いエレベーター。マンションの住人からも気味が悪いと言われ、あまり使用されていない。ここ数年では妙な噂も流れてその傾向がより一層強くなってきている。

出会うには相応しくない。

巡り会うにはあまりに窮屈すぎる。

そんな場所で僕は初めて彼女と出会った——とは言っても数分だけの邂逅だ。出会いと呼ぶには多少大袈裟だが、それでもここまでは敢えて『出会った』と言っておこう。言い切っておこう。それだけ僕にとっては大きな出来事だった。衝撃的なことだった。ただこれは僕個人の印象というか、感じ方なので彼女——きよらさんとしてはそんなことは露にも思っていないだろう。見知らぬ他人とたまたま乗り合わせただけ、恐らくその程度だ。いや、そこまで印象的であればいいのだけれど数時間も経たない内に記憶の片隅に追いやられ、思い出すこともできなくなるほどの微々たるものだろう。そんな些細でなんてことない日常において、初めてきよらさんを視野に捉えた瞬間。

僕は彼女という存在に心惹かれた。

魂という曖昧で具体的ではない部分が確かに揺り動かされた。

要はきよらさんに一目惚れしたのだ。

二十と四年。これが生まれて初めての恋だった。

……ええっと、その、なんだか、こう——は、恥ずかしい！

今まで色恋沙汰に縁遠かったので知らなかったけれど、誰かを好

きになったということを目に語ることがこんなにも面映ゆいことだったなんて思ってもみなかった。しかもこの歳でやっとなんかを経験しているという事実が輪をかけて恥ずかしい。

あまりの気恥ずかしさに顔を覆い隠したい。今すぐこの場から消えていなくなりたい。

と、とにかく僕の心は見事に仕留められたわけで、それはなんだか出会いがしらにテロにあったような、初見殺しにあったようなで何とも言えない微妙な気持ちになってしまう。好きになったことを素直に喜べない。どうせなら少しづつ想いを募らせてほしかった。徐々に彼女のことを好きになりたかった。彼女からしたら随分と勝手な言いぐさだ。果てしなく身勝手な言い分だ。

つまるところ、これが惚れた弱みってやつなのだろう。惚れたその時から彼女に対する優位性は永遠に失われた。ただそういうことだろう。それならば納得できる。

初めて同じ空間にいたときに特別なことがあったわけではない。会話なんてものはなかった。できるはずがない。そもそもそんなだいたいそれは僕には不可能だ。やるとするならせいぜい何階でしかと訊ねることだけだっただろうが僕にはそれも無理だ。

恥ずかしくて。

だけど僕はきよらさんに惚れている。それだけはまぎれもない事実だった。

どうしてここまで僕の心をかき乱すのか不思議に思ったこともある。でもそれは彼女のことを想っただけで解決した。彼女はとて

も魅力的、それだけのことだった。

腰の辺りで切り揃えられた黒髪は、少ない灯の中でもしつかりとした艶を発している。一度見入ってしまうと瞳が呑まれて視線を外すことができなくなる。だから彼女の姿を直視することはなく、横目で見るのが精一杯だ。

声は——未だに聞いたことはないが、吐息から微かに漏れ出る声とはいえない音を一つ一つ丁寧に拾い上げることです。予想することはできる。それはまるで胸を締めつけてくる切ないピアノの音。紡ぐことで奏でる言葉のハーモニー。聞き入ってしまう。聞き惚れてしまう。

狭いエレベーターの中で僕のところをやりわりと漂ってくる彼女の匂いは、女性特有の甘さと柔らかさをもち合わせつつ、どこか懐かしくも感じさせるものだ。

目で何度も愛でて、耳で幾度も慈しみ、鼻で堪能する。魅力しかないのではないかと思うぐらい彼女の欠点が見当たらない。些か恋の盲目的フィルターが働いているようにも思えるが、恐らく気のせいだろう。

後は、彼女と触れ合うことさえできればいいのだけれど、どうにかできないものだろうか。

思えば昔から僕はこうだった。好きな人に対してどこか積極的になれずにいる。自分みたいな奴が——みたいな卑屈な気持ちが強いというのも勿論ある。だけどそんなことより僕には決定的に欠けていることがある。

傷つくことだ。

僕は傷つくことに慣れていない。それを自覚してしまおうほど周りに甘やかされて生きてきた。甘やかさに甘え、今では甘えの過剰摂取で肥太り、色んなことに身動きが取れなくなっている。生きていく中ではどうしてもそこで苦しめられた。世界はどうしようもなく息苦しく、そして生き苦しい。だけど生き続けるためには我慢をして妥協するのが強さであり普通のことだ。それが当たり前だ。誰もが嫌だとは思いつつもやっている。生きるために。生き抜くために。しようがなくやっている。

人生は酸いも甘いも経験してこそ、と言われてる。正にその通りだと思う。逆に良いことしか経験していない人間はどこか脆い。

問題に弱く、

困難に弱く、

逆境に弱く、

そして己に——とても弱い。

だから僕は弱い。

いや、もしかすると甘やかされて育ってきた僕が辛いと感じていることも他人にはなんてことないかもしれない。それもまた『甘え』なのかもしれない。そして僕には自分を変えられない。何故なら僕には境界線が分からなくなってしまうから。何が甘えで何が普通なのか、それすらも。曖昧でいいかげん、何事においても中途半端。引きこもり気味で根暗。未だに日常レベルで迷い彷徨っている。それが僕なのだ。

だけど。

だけどそう。

今はどうだろう。

この状況は僕にとつて日常といえるものだろうか。エレベーターに閉じ込められ、そんな折に憧れの彼女と一緒にいるこの状況は。いや、そんなわけがない。こんなものは非日常だ。そもそもエレベーターに閉じ込められるという事象が生きている中でそうそう起こるものでもない。海外ならそれなりに起こることがあると聞いたことはあるが、ここは日本だ。その辺りはしっかりしている——はずだ。

絶対とは言えないけれどそれでも長時間どうにもならないなんてことが起こるとは考えにくい。ましてや何かしらの手でも使わない限り都合よく二人きりなんてなるわけがない。

だけどそれが起きた。

つまり、これはチャンスなのだ。今までの自分はへたれでへっばこ、くだらなくてしようもない人間だ。けどそんな己を変える機会が訪れたのではないかと僕は考える。その一歩が踏み出せなかったこの足が嫌だった。けどお膳立てはここまでできているのだ。一歩を踏み出すまでもなく倒れ込むだけで変わる機会がやってきた。それでやらなきゃ男じゃやない。後はただやるだけなのだ。行動に移すだけだ。

そうだ。僕は今日こそ彼女とお近付きになりたい。たったそれだけで僕の捻じれてしまった何かが元に戻る、そんな気がする。

エレベーターが停止してすぐに彼女は外部との連絡を試みた。エレベーターに備え付けてある非常用呼び出しのスイッチを押す。このスイッチを押すと、エレベーターの管理会社の方へと連絡が行く。つまりそれで助けが来るということだ。

プツツという音が鳴った。

外部に繋がったと思った彼女はこれで助かると安堵したのだろう、胸を撫で下ろしていた。だがそれもその後流れてきた『ざあ』というノイズ音で掻き消えた。

僕は一連の流れをじっと眺めているだけだった。

まだ助けは来ないのだろうか。それなりの時間が経過したと思う。僕には時間を確認するものがない。それに狭くて薄暗い中にいると時間の感覚が分からなくなってくる。時間をどうしても弄んでしまおう。どうしたものかと考えているときよらさんの様子がおかしなっていることに気付いた。

「ふう……」

彼女がため息をついた。心なしか顔色がさつきよりも悪くなっている気がする。それはそうだ。あの後何回も外部連絡用のスイッチを押していた。そして何回もあの無機質な音が流れるのを聞いては落ち込んでいた。気落ちするのも無理はないのかも——いや、待て

よ。そう言えば聞いたことがある。

『パニック症候群』。別名、不安障害ともいうのだが、その名の通りこの症状は強い不安にかられてパニック状態に陥ってしまう。さらに呼吸困難、動悸、吐き気、眩暈、嘔吐、発汗、手足の震え、冷え、のぼせなどの身体的症状にも及ぶ。無意識の発作が起きてしまうらしい。自分が嫌だと思ったもの、苦手なものに接触した場合に起きる。一度発作が起きた場所なんかに行くと起きたりするらしい。実際には因果関係はない。だがその場所に行くとまた発作がおきるのではないか、という恐怖。逃げたくてもすぐには逃げられない。発作が起きたら恥をかく。何かあった際、誰も助けに来てくれない。そんな強い恐怖や不安が招いてしまうのだ。そしてそのような感情になりやすい場所がある。例えば、飛行機や地下道、トンネルや高速道路、人ごみなんかも対象の場所だ。そして今いるエレベーターもその一つだ。

もしかすると彼女は現在その症状に陥っているのではないのだろうか？

見知らぬ男と二人きり。脱出できると分かっているのではないではない。

改めてまじまじと彼女を見てみると彼女は自分の身体を抱きかかえている。頭を伏せているので表情を窺うことはできないが、彼女の肩がぶるぶると震えているのが分かる。彼女と二人きりという奇跡的な状況に浮かれていて気付いていなかった。

もしかして彼女は発作の状態なのか？

不安が募る。あくまで発作は仮定の話だ。僕が話を膨らませて勝手に邪推しているだけなのだ。実際はエレベーターの中が寒いだけで暖を取っているだけかもしれない——いや、まてよ、そんなわけがない。そうだ、思い出した。確か今の季節は夏。むしろ密室に閉じ込められて息苦しさや暑さを感じるはずだ。寒さで身震いするなんてことありえない。ずっと外に出ていなかったからすっかり忘れていた。ならばここだけ寒いとか——馬鹿な。局地的に寒く感じる場所などそうそうあるわけがない。ああ駄目だ。不安過ぎて思考が上手く働いていない。頭が混乱する。こんなではいけない、そう思った僕は頭を冷やすために首を左右に回した。

一回。

二回。

三回。

一息ついて自分が落ち着いたのを確認する。

ふと、こんなことをやっていると彼女に不審に思われるのではないかという考えが頭をよぎって彼女の方を横目で見たが、俯いて黙っているだけだった。よかった、彼女の方は何とも思っていないようだ。それはそれで複雑な気持ちではあるが。

とにかく寒さでという選択肢はなくなつたと考えよう。しかしそうなることまた発作かもしれないと疑ってしまう。勘ぐってしまう。自分のことではないというのに胸が痛くなる。そんなことはまやかしたと分かっている。痛みが僕に起きるわけがない。そう、己に言い聞かせる。そうだ、僕が不安になつてはいけない。僕は下唇を噛

み締めた。しつかりしなくては余計に彼女を不安にさせてしまう。恐怖を与えてしまう。

「まだなの……」

初めてしつかりと聞いたその声はとても弱々しいものだった。声を聴くことができた嬉しさよりも心配の方が勝る。大丈夫なのだろうか。君はこんなにもすばらしい人だというのに僕は何にもしてあげられない。じれったくなる。自分の不甲斐なさが恨めしい。自分で自分を呪い殺したくなる。どうしてこんなにも僕はだめなのか。どうしてここまで僕は糞野郎なのだろうか。気付くと左手を力いっぱい握り締めていた。痛さはもう感じない。その代わり悔しさだけが残る。自己満足で無意味な自傷行為でもやっておかないと気が狂つちまいそうだ。

馬鹿なことしか考えられない頭でもその辺にぶつけるか？

いらつきを溜め込んで固まった拳を突き出すか？

それともここから動けないこの身体で体当たりでもするか？

ああ。ああああ。あああああつ糞!!

頭をエレベーターの壁に叩きつける。ぶつかりさえすればどこでもいい。そんな気持ちを文字通り振り回しながら僕は動く。

ガン！ ガン！ ガン！ ガン！

頭が壁にぶつかるたびにエレベーターが揺れる。だが気にせず僕は続ける。頭がふらついたので今度は拳を、腕全体を鞭のように使って猛打する。

バン！ ドン！ ボン！ ベン！

泣かす男は最低だが、泣いている女に手を差し伸べない男はもっと最低だ。怖がっているなら言葉を掛けて気分を紛らわせるべきだった。具合が悪いなら介抱するべきだったのだ。そこに何の躊躇いがあるだろうか。

僕は彼女に向かって手を伸ばす。

——ごめんなさい、僕のせいで。でもそれももう終わりです。彼女の肩に手が届くまで後、三十センチ。

——意気地がなかった。勇気が出なかった自分をいつも責めていた。変われないと諦めていた。でもそうではなかった。変われないのではなく、変わる方法が分からなかったわけでもない。変わる必要がなかった。本当は言い訳がしたかっただけなんだ。後、二十センチ。

——君は僕のことを知らない。それは僕が君に心を開いていなかった。好きだという気持ちを持っていながら僕は君との些細な、だけれど圧倒的な差異によって触まれていた。けれど、もういいんだ。後、十センチ。

——最初にどう声を掛けてみようか。やっぱりまずは彼女の涙を止めることから始めよう。後、五センチ。

——ああ、あとちよつと。あとちよつとで彼女に触れられる。恋焦がれている彼女にやっとなつと触れられる。後、二センチ。後——一センチ。指先が彼女に触れようとしたその時、

ガコン！

彼女は音に驚いて伏せていた頭を上げた。ガガガと引きずるよう

な音と共に光が外から入ってきた。光は徐々に大きくなり彼女も僕もあまりの眩しさに思わず目を一瞬細めた。眩しさにも慣れ、光の入ってきた方を見ると、停止していたエレベーターの扉が開いていた。そしてそこには作業着を着た中年の男性が立っていた。

「遅くなって申し訳ありません！ 私、エレベーターの管理会社の者です。大丈夫ですか？」

彼女はそれを聞いて胸を撫で下ろしていた。鼻声で、

「は、はい」

と短く答えた。僕は黙っていた。

「おい、お前は基盤の方を頼む」

後ろを向いて中年の男は言った。よく見ると管理センターの人は二人組だったようだ。奥に同じ作業着を着た若い真面目そうな男がいた。若い男は「はい」と小さく言うのと外で機械を取り出して何か作業を始めた。

中年の方がまたエレベーターの中に視線を向け、狭い中を軽く見回して言った。

「お一人ですね？」

彼女は立ちながら言った。

「はい。一人です」

僕はそのやりとりを黙って眺めていた。

「そうですか。とりあえず事故原因を調べますのでここから出まし

ようか」

「はい」

彼女は急いでエレベーターから降りた。

「それではエレベーターが停止した時の詳しい様子をお聞きしたいのでとりあえずこちらに——」

「あの……」

中年の男の話を途中で切るように、また窺うように彼女は声をかけた。

「はい、どうしました？」

話を途中で切られた中年の男はしかし、嫌な顔一つせず丁寧な対応をした。彼女は幾度か逡巡した様子を見せた後、躊躇いがちに言った。

「ええっと、あの、ですね。ここって、幽霊が出るって噂があるんですけど、それって……本当ですか？」

「ああ……。まあ、確かにそんな噂はありますね。四年前にエレベーターの事故で死んだ男のって話でしょ？ 実際にそういう事実があるからあまり言いたくはないんですけど、正直困ってるんですよ。誰も乗っていないのに勝手にエレベーターが動いているとか、叩く音が聞こえるのだの。まあ大方誰かの悪戯だとは思いますが。毎回調べてもみても故障はしていませんし。管理する立場としては迷惑ですよ、まったく。ああ、そうだ。来月からこのエレベーターは取り壊しが決まっているので利用しない方がいいですよ。いつ故障してもおかしくないくらい古いですしね。どうだ。そっちは。

ちつ、やっぱり外部連絡用の機械壊れてない。ほらね、どこかおかしいのでやめておいたほうがいいですよ」

「そう、みたいです」

「顔色悪いですけど大丈夫ですか？ 病院に連れて行きましょうか？」

「い、いや。大丈夫、です」

「……そうですか。うーん、そうですね。あまり調子もよくないようですし、お話の方はもう結構ですのでしっかりとお休みになってください」

「はい」

彼女は小さく一礼すると振り返ることもなく逃げるようにその場を立ち去る。ここから出られない僕は彼女を追いかけることはできない。だから彼女の後ろ姿をじっと見つめていた。エレベーターの扉が動く。扉が閉まる直前に僕は言った。

「いつかきくと、あなたを独り占めにするからね。きよらさん」

僕はまた、暗い所に閉じ込められる。

(了)

風が吹くたび春が来る

日居月諸

到着駅の出口を抜けると、横風が吹いてきて、スミに寄せていたらしい枯葉が舞っていった。三月の風は強く、渦を巻いているのはつきりとわかる吹き飛び様で、赤茶や黄金がソフトクリームのコーンを作るように円錐状に空へと昇っていく。

嵐は地面にあるものを根こそぎ空へと放り投げてしまうけれど、一方で、とてつもない引力をもって自分の懐に何もかも抱き寄せてみせる。ときおり抱き寄せたものでもって、自らの威容を誇らしげに表してくれる、造形の整った現象を作り上げてみせる。塵ボコリを巻き込んだ程度なのに綺麗に垂直にロクロを回すように走っていく姿もあれば、年輪を重ねた大木が雲へと届いた時の夢を思い描かせてくれるしなりをもった姿もある。そのうねりくねる姿から目を離さずにはいられない。だからといって、竜巻に巻き込まれたいわけではない。ずっと見ていたい。自然と自然が組み合わさっただけなのに、あたかも人為が加わったようなその姿を。ひよつとした

ら人間の営みは、この自然の力を真似るためだけに繰り返されていくのではないかと思えてくるその姿を。

……僕のもとに現れた突拍子もない印象は、地面へと散らばった枯葉達のとまりのない姿とともに薄れていった。けれど、それらが円錐状に空へと昇っていった姿は頭に残っていた。妙なイメージは繰り返されない。けれど、円錐状は消えてくれない。まるでもう一度同じイメージを自分で作り上げた上で、なぜ頭にこびりついているのか考えてみる、とうながしているかのように。

出口の前の道を横切っていく人達を見て、自分もこれから会社に行くのだと思い出すと、しばらくぼうつとしていたことに気付いた。歩きだしてから頭の中の澱みのようなものは無くなってしまった。あんな変なヤツと会ったからかな、と電車で乗り合わせた中原のことを思い出した。

ホームで電車を待っていると、石段を叩く音が響いた。それが階段から来ているとわかって振り向いてみると、女の子が一段二段と段差を飛ばしながら駆け降りてきた。子どものような忙しなさだった。ショートカットに白のチュニック、青いクロップドパンツというコーディネートが幼さを映えさせていた。よくみると、僕と同年代の子らしい。

階段を降りると彼女はこちらを向いて、電車、行っちゃいましたか、と息を切らして訊ねてきた。下り電車と上り電車の時刻を間違えていたとわかるのに時間はかからなかった。それよりも前に、彼女が高校の同級生であるとわかった。

中原は最近引越してきたから、ダイヤがまだ掴めていないのだと言った。なんで引越してきたのかと言えば、この辺りに住んでいる画家の弟子になったからなのだという。

「弟子って言っても自称してるだけで、ホントはセンセイがやっている事務所に勤めてるだけなんだけどね」

「どっかのコンクールに入選した絵が廊下に飾られてたっけ」

「あれがセンセイと知り合うきっかけだったんだよね。ていうか、あれが認められたおかげで今の職場にも勤められてる」

隣の芸大に進んだとは聞いていたけれど、中原に対する認識はそこで止まっていた。美術に関することよりも、教室で活発に振る舞っていた姿の方が覚えている。といっても高校の頃のことかと思いつて出せたのは、放課後の教室に二人で残って取りとめもない話をしていると、窓の外がいつものまにか雪景色に変わっていて、それを見ながらこんな沢山の白に囲まれているとどこかあったかく感じる、と言ってみせた、ヘンテコなエピソードだった。

そんな過去を掘り返せたのも、中原が相変わらず変な感覚を持っている女だと確かめられたからだ。途中の駅に電車が止まってドアが開くと、突風が吹き込んできて、中原のショートカットに隠れていた額を露わにした。苦笑いを浮かべて手櫛で前髪を元通りにしている彼女を見つつ、

「風が強い季節って大変だよな、いちいちセットしないといけないし」

「でも風が強い日に散歩すると気持ちいいよ？ 風の形がわかるもんね」

風の形、という言葉が何を意味しているのかがわからなくて、正気かどうか顔を覗いたところ、中原は車窓いっぱい広がる青空を見ていた。上の空という様子ではない。

窓の外に吹いているだろう風の姿を見ているのかと冗談まじりに訊いてみたところ、見えないからこそいいんだって、見えたらつまらないもん、と窓から目を離さなかった。

「大体、形がわかったからどうだっていうんだよ」

「目には見えないけれど、形がわかるってすごいじゃん。人間って目だけで物事を知るんじゃないんだなあ、って思えるし」

「それって触覚のことだろう？」

「違うよ、触覚と視覚が組み合わされてるんだって。触れると形が頭に浮かんでくるんだよね。目だけって言ったのは目が一人で考えているんじゃない、って意味でさ、視覚が触覚を助けてあげる時もあるし、その逆もあるってわけ」

それ以上踏みこんでも何の糧にもならない会話だったので、僕はおざなりな相槌を続けることに決めた。けれど、中原の話は一層奇抜さを増していく。まるで僕が意味を掴みとれていないと思ったかのように。事実、何一つ呑み込めていなかった。ただ、だからといってすべて理解しようという気は起こさなかった。そのあたりの食い違いを、彼女は認識していなかったのだ。最早、自分の感覚を認めるために喋っているようなものだった。

そういう会話をしているとげんなりしてくるけれど、中原はかえって楽しげにしていた。他人と嘯み合わない不安になってくるという感覚がないようだ。そして僕自身、楽しげな様子が救いになっていたのか、付き合いきれないという気分はしなかった。高校の頃から、そんな風に付き合える女子だった。

放課後に二人で教室に残っていた時だって、吹雪で帰りそびれたからという口実はあったものの、嫌々付き合っていたというわけではない。中原は美術部の送別会に使う花飾りを、三年生として見送られる側にも関わらず作っていた。美術部はただでさえ人が少ないからと頼みこまれた末に、僕も手伝わざるを得なくなった。退屈のぎに二人で他愛もない話をしている間、中原は喋っていないと気が済まないともいうように、話題をあちこちに飛ばした。大抵理解できないことばかりだったから会話の内容まではもう思い出せないけれど、思春期らしく斜に構えていた僕にしては、珍しく他人の話をもとに受けとめようとしていた。向こうも真面目に話してくれているから、それに応えなければいけないと思っていたのだらう。

「そういや、桜井君は絵とか好きだった？ 今度センセイが個展やるんだ」

「嫌いってわけでもないけど」

「センセイの絵は凄いや、普通の展示だったら立ち止まってじっくり鑑賞するのが普通だけど、センセイの場合は歩き回りたくなくなっちゃうから」

また掴み所のない話を始める雰囲気が流れた。

「中原の絵も展示されたりするの？」

「ううん。個展だって言ったじゃん。個人展覧会。とにかく来てよ、桜井君が普段使っていない神経のあちこちがマッサージされるよ？」

結局、中原はよくわからないことを延々と話し続けた。それもセンセイとやらの作品を具体的に紹介するというより、自分の鑑賞体験を抑制なしに語り続けた。ヨシミで宣伝するという様子でもなかったのでまだ耳は傾けられていた。個人的な感覚を話しているだけならば、理解しようと無理に努める必要はないのだ。

電車が目的駅に着いたらしく、先に席を立ったかと思うと、じゃあ、絶対に来てよね、と手を振ってきた。電車が走り出すと、僕はセンセイとやらの名前さえ聞いていないことに気付いた。

まあ、きつとまた会えるのだろう、と思っていたのだけど、翌日の出発駅のホームには彼女の姿は見えなかった。翌々日も会えなかった。電話番号もメールアドレスも交換していなかったし、何を根拠にあんな催促したのだろうと呆れてしまった。

嵐のイメージと、中原との再会は、数日のあいだ頭の中に居座り続けた。二つともなかなか具体的な姿をもって目の前に戻ってこなかったから、その空白を埋めるために僕の思考力の粗方が注ぎ込まれているようだった。まるで両方とも、僕にとって重要度の高い事柄のようだ。最初はそこまでの物ではなかっただろうに。

嫌気がさすわけでもなかったけれど、良い気分にもなれはしない。あやふやな感覚が頭を占めていた。どう話していいかわからないから、同僚にも相談できなかった。

それに加えて、仕事が終わった帰りに上司から飲みを誘われたところ、君もカノジョがいなくなって寂しい思いをしているだろう、と言われたから、誰かに話そうという気持ちはますます薄れていった。事情を知らない他人は、男女が久しぶりに出会ったというシチュエーションだけを切り取って僕と中原の関係を誤解するだろう。恋人がいなくなった淋しさを埋める代替物としてかつての同級生を見ている、という風に。上司に押しつけがましい付度をされるまでは恋なんて気にも留めていなかったから、憶測であることは間違いない。誤解を消すにあたって使われる労力を考えるだけでも、億劫になるくらいだった。

冬に別れたばかりの元恋人にも、格別な未練を残しているわけではない。冬に入る前にお互いが薄々、一人になったほうがいいのではないかと感じ合っていた。まだ二人でいられる可能性が残されているかどうか確認するように数カ月を過ごしたものの、結果としてその時間は軟着陸するために費やされたと思いだせる。

別れが近づきだした頃、悠は僕の顔をよく覗きこんできた。その理由は訊いても教えてくれなかったから、僕も彼女の様子を観察するように見ていることが多くなった。別れる間際になってそんなことを始めたのだから、お互い相手の実相を明らかにしようとする努力がなかったのだろう。実際、それで何不自由なく暮らせていた。

かといって諍いがなかったわけではない、とアパートに帰ってテレビをつけた時に頭が補足しだした。テレビの修理をめぐって口論になったのだ。まだ仲良く付き合えていた頃の話だ。結局、家電量販店に勤める友人の配慮で安く修理してもらったのだけど、悠はなぜか新しいものに買い替えるようせがんできた。あの手この手で持ち出された言い分は思い出せない。店頭にて安い新製品を薦められる頃には、丁重に断るようになっていた。むしろ、すんなりと修理を引き上げてくれた友人の態度の方がよく思い出せる。店の利益を優先するのが普通だろうに、まるで僕達の経緯を推しはかったかのように速やかに処理してくれた。世話をかけてしまったとの疾しさを覚える隙も与えてくれなかったほどに、極めて事務的に事を済ませてくれた。

あいつも高校の頃からそういうヤツだったな、と振り返った時、ようやくここ数日の宙ぶらりんな感覚を解消してくれる相談相手が見つかった。ジョーなら僕と中原の関係も知っているし、相手を茶化さない真面目な性格だから、しっかりと話を通せるだろう。

電話すると休みが同じ日に入っているとわかり、一緒にメシでも食べに行こうと決まった後、ちよつとした悩みを聞いてもらいたくてさ、と打ち明けると、かまわないよ、と応えてくれた。電話口から聞こえてくる声からは少しの億劫さも感じられず、段取りを決めるために必要な事柄だけを話す口振りがうかがえた。そうなればこちらも余計なことは喋らなくていいので、気遣いをする労力が省ける。久しぶりに会う相手にお悩み相談を求めるといふ身勝手さも含

め、都合が良いようにも思えたけれど、僕達にとつては簡潔な付き合い方が一番楽なのだから仕方がない、と思いつながら電話を切った。

鉄板焼きの店に行くと、ジョーは席に座って待っていてくれた。自分の注文は済ませていて、鉄板の上で焼かれているお好み焼きはひっくり返される頃合いらしい。僕も注文を済ませると、かいつまんだ話から始めた。僕が鉄板の上で焼きそばを炒めながらまとまりのない話をしている間、ジョーはお好み焼きを食べつつも上手く相槌を挟んでくれた。

「中原と会いたいのか？」

「むしろ、向こうが会いたがってるみたいだし……いや、僕も会いたいんだろうな」

「会えたから何か解決するって話なのか？ お前の頭の中にある色々な事がちゃんと中原と結びついてるなら、その通りなんだろうが」

「元々はそうじゃなかったはずんだけどね。あいつのせいで全部引っ張り出された感じがあつてさ」

「結びついてるって誤解を解くにも中原が必要ということか」

「それに、向こうはそんなつもりはなかったんだろうけど、約束した気分になってさ。個展に行かなきゃならないのかな、っていう具合に」

なるほど、とジョーは水を飲んで一呼吸置いた。

「それなら理紗が力になれるんじゃないか」そう言って、自分の恋人の名前を出した。「あいつと中原は仲が良かったからな。大学に

入ってからどうかは知らんが、どうにかすれば中原と連絡くらいは取れるだろう」

そのことは知っていたので、そういえば、と相槌を打った。同時に、何の算段もなしに、友人に話を聞いてもらえればそれでいいとしか思っていなかった自分の無思慮ぶりに呆れかえった。

「でも、理紗に助けてもらおうのはなんだかシヤクだな。あいつこそ僕らの関係を誤解しそうだ」

実際、中原と二人で花飾りを作っていた時、教室のドアが開いて理紗が入ってきたかと思うと、そういう関係だったのか、と茶化してきた。事情が分かっているくせにそういう態度を取るからタチが悪い。ジョーが教室に入って来て帰ろうと促してきても、中原と手を組んであれこれと理由をつけては、花飾りを手伝うよう仕向けてみせた。そんな面倒な女に相談すれば、話がこじれる可能性さえある。

「それ以外に手立てはないぞ。駅のホームでまた出くわすのをずっと待ってるのか？」

ためらいというものをわかってくれればいいのだけど、と友人の愚直さが恨めしくなった。とはいえ、嫌味なんてなさそうな、顔色を変えずにお好み焼きを食べ直す様子を見ると、説得する労力を使う方が無駄だと悟った。

理紗に電話したところ、留守電につながった。少しくらい話をするなら大丈夫だろうということ、彼女が勤めるヘアサロンにそのまま向かった。

店内に入ると、真っ先に理紗が迎えてくれた。留守電に入れたメッセージを聴いていたらしい。

「少しは金落としていきなさいよ、情報料代わりと思って」

席をすでに予約しているほどの抜け目のなさで、ジョーを見やっただころ、いつものことだから諦める、とばかりに首を振られた。「薫となら今でも連絡を取り合ってるわ、引越し先はまだ決まらないみたい。実家を拠点にしてるけど、勤め先からは遠いから、あちこちの友達の家にも泊まってるんだって。私の家にも来たわ。てことは、アンタの最寄り駅の近くのどっかに泊まってたんじゃない？」

あの子高校の頃から全然変わらないよね、ショートカットだけじゃなくて他の髪型も試したら、って言ったんだけど、これが一番似合ってるの一点張り。ファッションもガキっぽいし、デザインの勉強もしただろうにどうしてあんなんだか。そうそう、相変わらず変なこと言うけど、一層面白くなってるから、変わってはいいるのかな」髪を切られている間、こちらが喋る暇も与えてくれない話に付き合わされた。コミュニケーションを取るつもりがないのに語りかけてくる人間というのは、鬱陶しいことこの上ない。よくこんなに喋りながら致命的なミスをしなないものだ、ミスさえしてくれれば不満のぶつけようはあるのだけど、とハサミを捌く手つきに注目して気を紛らわせていたのだけど、

「そういえばアンタの元カノ、うちに来たわ。パーマかけていった。相変わらず綺麗ね、あの人」

ふうん、と相槌を打ったけど、内心では面倒なことになってきたな、と気が重くなっていた。

「勿体ないことしたわね、あんな綺麗な人なかないのに。その代わりが薫かあ、ストライクゾーン広いわね、アンタも」

だからそういうわけじゃないって、と抗おうとしたけれど、前髪を切るから目をつむっていると云われたので、怒りが上手く表せなくなつた。

「でもさあ、パーマかけるってことはやっぱり意中の人がいるってことよね」

何がやっぱりかはわからないけれど、一人になったのだから新しい恋くらいするだろう。それで全く構わない。僕との恋愛がダメだったのだから、他の相手を見つけて自分の適性を試してみる。それがあるべき姿なのだろうから、言葉を差し挟む余地なんてない。

もつとも、悠が一人になるとどんな顔をしているのだろうと、想像したことはある。その様子を傍から見れば、僕の知らない面がいくらかでも見られるだろう。誰かといえるのならば、僕の隣にいた時とそう態度は変わらないはずなのだ。現に、僕自身一人でいると、自分の体を持て余しているような感覚に陥る。他人と顔を合わせている時は、シチュエーションに見合った人格を作り出そうと集中すれば済む。その寸法で行くなら、一人でいる時は自分らしい姿であろうと集中しなければいけない。けれど、自分がわからなくなる時が来る。ここ最近の僕のように。悠なら、そういう場面に出くわし

た場合どう対処してみせるのだろうか？ その時こそ、彼女の実像めいたものが見えてくる気がするのだ。

「はい、おしまい。軽く流すわ、席から立ってちょうだい」

はからずも悠を思い出していたことで、理紗の話を聞き流せていたらしい。どこまでもシヤクな思いをさせてくれるな、と毛を払いながら思った。

個展には理紗も行くこうと思っていたから、あした中原と会うついでに一緒に行くことになった。ジョーは休みが合わないと言った。

個展の会場は街中の美術館に設けられていた。入口に貼られたポスターには見覚えがあつて、センセイとやらの名前にも耳馴染みがある。理紗によると、これから世界にも売り出していく気鋭なのだそうです。

中原はまだ来ていないようで、先に絵を見ておくかと提案されたけれど素養がないし、せっかくだから専門家に解説されながら見た方が良いと思つて待つことにした。だったら飲み物でも買つてくる、と言つて理紗はどこかへ行つてしまい、手持無沙汰になったから、空でも見ているほかない。青空を見ながら、ここ最近はずつと天気が良かったことに気付いた。同時に、風も強かった。これだけあの時と同じ条件が揃い続けていたというのに、どうして嵐のイメージはやつてこないのだろう、と首をひねった。

風が吹きつけてきた。昼になる前なのでうすら寒く感じられ、顔を背けた。風の形も何も、こんな中でよく散歩しようと思ふものだ、

と同級生の言葉を振り返っていると、地面を強く鳴らし続ける足音が聞こえてきた。青いデニムのサロペットスカートの上に、チェックのカーディガンを羽織つた女の子が駆けてくる。ショートカットが跳ねていた。着飾つてきた理紗を見た後では、あどけなさしか感じとれない。

ごめんね、遅れちゃつた、と中原は息も整えずに言った。今来たところだと教えると、ホント？ と息を落ち着かせて、

「桜井君なら来ると思つてたよ」と笑つて言った。「そういえば、理紗もまだ？ なら急いで来る必要なかったかな」

飲み物を買に行つたと教えると、中原は苦笑しつつ頭を掻いた。「ていうか、どこで個展やつてるかも教えなかったのにどうして来ると思つたんだよ？」

「えっ、言わなかったっけ？」

途端に目を丸くしたから、ひよつとしたら聞き逃していたのかと思つた。けれど、理解可能かどうかの判別が出来るくらいには耳を傾けていたつもりだった。

「まあ、教えなくても桜井君はここに来る運命だったんだよ、そういうことにおこう」

そう言つてこたわらないからには、やはり教えてくれていなかったのだろう。呆れていると理紗が戻つてきて、両手に缶ジュースを持ちながら、三つ買つてくれれば良かったか、とそれほど反省もしていなそうな口調で言った。

「ここはカズミを振り回したお詫びに薫が諦めるべきでしょ」

「今日のホストになんてこと言うのさ。そもそも買い直してくればいいじゃん」

「じゃあアンタが買ってきなさい。お金も自分で使ってね。大体ホストがワガママ言うっておかしいって」

「走ってきたばかりの女の子に酷いこと言うなあ」

「遅れてきたアンタが悪いんでしようが」

僕が諦めれば済む話だった。じゃあしようがないわね、と理紗に言われると、二人ともそれを当て込んで茶番を演じていたように思えてしまう。顔を突き合わせて花飾りを作っているところを茶化された時も、中原は上手くかわして、理紗と漫才めいた掛け合いをやっていた。延々と続けられる馬鹿話に向かって、いつまで経っても花飾りが作り終わらないだろ、と戒めれば、付き合わされていたはずの僕が仕切り役になってしまっている。

後ろで何かを喋っている二人に先んじて入場券を受付に渡している、あたかも僕が率先して美術館にやって来たかのようにだった。この二人、特に中原とはこんな風に付き合っていたと、ぼんやりと思いつけた。時折僕の足を止めては、クラスメイトが今どうしているのかと訊いてくる辺り、彼女達も懐かしさを感じているようだ。個展は大広間を全て貸し切って行われており、センセイの腕の程をうかがわせた。

「うわっ、なにこれ、写真？」

理紗は入ってすぐのところに展示されている絵の前に立ち止まった。線香を上げるような片手を上げた恰好で、女性がガイコツを

持っている。あまりに輪郭がくつきりとしすぎていて、臨在感ともいふべき、そこに人がいる感覚があった。けれど、紛れもなく絵だった。髪の毛の一本一本や肌理まで書きこまれているので、写真と見まがってもおかしくない。ただ、筆跡のようなものは見えるから、間違いなく絵画だ。

「写真主義ってやつか」

生半かな知識で口を滑らせてしまうと、中原に目をつけられた。スーパーリアリズムという、写真のような絵を描く技法だと説明された。写真主義と呼ばれるものはどこまで追及しても絵特有のトーンのようなものを感じるけれど、スーパーリアリズムは絵らしささえなくしていくのだという。

「もつとも、センセイの絵はのっぺりした写真ともまた違ったものがあるけどね」

誇らしげな中原に案内されて展示されている絵を渡っていく間、森、子ども、路上、海などのモチーフが、いずれも間近に実物があるかのように眺められた。

「でもさ、それなら写真でいいんじゃないの？」

「ここに飾ってるもの見てて、写真と何か違うって感じはない？」

「まあ確かにあるけどさ……」

「上手く言えないよね。センセイはそういう上手く言えないことを描こうとするんだ。ここにあるモノを描くんじゃなくて、モノがここにあるように仕向ける何かを描こうとしている」

電車に乗っている時、似たようなことを言われた覚えがある。実際に絵に向かってみると、あながち理解できない話でもない。

かといって、センセイが実際にあるものだけを写しとりに続けているわけではないらしい。展示の中ほどに進んでいくと、骨で出来ているビルが現れた。人間の骨だと人目でわかるものが、何重にも積み上げられている。絵であるという感じがまるでしない。モノがそこにあることを作り出している何かさえ掴めればこんなものも描けるのだとわかって、理紗もようやく納得した様子だった。一方で、中原は浮かない表情をしていた。再会して以来、初めて見た表情かもしれない。

「センセイはこの辺の絵は嫌いみたいだけど。私も嫌い。たとえば木だったら木をそこにあるように仕向ける特有のメカニズムがあつて、人だったら人特有のメカニズムがある、って感じなんだつて。一つのモノに備わっているメカニズムがわかったからつて、全部そう描けるわけじゃない。でもセンセイは、描けると誤解してた時期があるつて言つてた」

それでも展示したのは、美術館のスタッフやスポンサーから求められたからなのだという。こういう作品がないと、理紗のように誤解したまま帰つてしまふ人達がいるだろうと予測した上での配慮なのかもしれない。

センセイが嫌っているらしい作品群が終わつてからは、また最初に見たような実物を写しとつた絵が並んでいた。それ以上解説する必要がないとわかつたからか、中原は僕達の隣にはいないで後ろを

ゆっくりと歩くようになった。弟子を自称するくらいだから何度も見ているだろうに、と思つたけれど、それくらいセンセイの作品が好きなのかもしれない。表情も、最早見慣れてしまった、楽しいなものに戻っている。

一通り見終わると、理紗の提案でもう一度最初から見ることになった。理紗もセンセイの絵を気に入つたらしく、弟子ならアトリエに捨ててある絵とか持つてこれないの？ と中原に無理な要求をしていた。

再びぐるりとしてしている間は、最早じっくり見なくても一目で何が描かれているかわかるから、安心して次の絵に移る事が出来た。だからといって、一つ一つの価値が薄いというわけではない。センセイの絵は現実に溶け込んでいる。むしろ、現実を作り出している。美術館の椅子や壁の隣に、猫や草原が佇んでいる。椅子や壁を見めることはないように、猫や草原を見つめることはない。椅子や壁の横を何事もなく歩くように、猫が止まっている姿を横目で流していくし、草原が広がる姿をぼんやりと見渡す。そういう風に、意識を高めなくても現実はそこにある、という安心感があるから、じっくりと見る必要はないのだ。

普通の絵は鑑賞する、と言いたくなるが、センセイの絵は目で見る、といった方がふさわしい。動き回りたくなる、という中原の宣伝文句が浮かんで、うつすらと理解出来るような気がしてきた。無数の絵が作り出している現実に近い空間に、僕は暮らしているのだ。

芸術の営みは自然を真似るために繰り返されてきた。芸術を通して自然を写しとることで、人間は自然の見方を獲得する。自然というのは、人間の視覚も含まれる。自然を模写するのならば全てを模写しなければならぬ。もちろん、自然を見つめている自分の眼差しをも。

……また、嵐のイメージに似た考えが頭をよぎった。ただ、待ちかねていたものがやってきた、という感じではない。むしろ、より大きな不可解さを僕の頭に残していった。今のは一体、と妙な言葉をもたらしたものを探っていくと、わずかに開かれたドアから顔をのぞかせる女性がこちらを見つめていた。流し目を崩さず、何かを言いたげに少し口を開いている。見つめ返しても、何も言ってくれない。

絵だということはわかっている。ただ、描かれた女性は何かを言おうとしているのだ。そういう風に描いているのではなく、口からの呼吸で空気を震わせている姿がそこにあるのだ。もしかしたら、芸術にまつわる言葉はこの人から聞こえてきた声なのだろうか？ それとも、センセイがこの絵の奥から語りかけてきたとでもいうのか？

いくら問いかけても、箴言風のフレーズの正体はつかめなかった。これまで芸術にほとんど興味を示してこなかった僕に、こんな考えがあらかじめ染みついていたわけがない。他人からもたらされたものだとの判別はつく。それこそ、中原が喋っているようなわけのわからない話に近い。

「どうしたの、桜井君？」

振り返ると、中原が見上げてきていた。さっきまで歩きまわっていたはずの彼女が、立ち止まっている。それくらい、僕の立ちすくむ姿は目についたらしい。駅の出口を抜けた時もそうだった。人波が歩いていく姿をみて初めて自分が立ちすくんでいるとわかった。そして、これら二つの奇妙な瞬間が訪れる前には、必ず中原と会っている。

「この絵さ、センセイのアトリエの扉に飾られてたんだよね。お客さんが来るたびビククリするのが面白いから、ってことで。そういう人なんだ、センセイって」

指さしながら笑う中原の声を聞いていると、電車の中や美術館で聞いた話の原因となつて、突拍子もないイメージが沸き起こっているのかと思った。無意識に、センセイの芸術観に染められているかもしれない。けれど、展示物には嵐の絵はなかった。僕の頭の中で巻き起こったものは、もっと具体的なものだ。話を聞いたくらいでは到底イメージも出来ないような。腑に落ちない思いを残し、僕は中原に曖昧な返事をした。

美術館を出ると、もう昼時だったのでファミレスに向かった。昼食を終えるとどこかに行こうか、という話になったのだけど、理紗に用事が出来てそのまま帰ることになった。

「桜井君にはこれからもっと色々な絵を見てほしいな」
駅に向かうまでの道すがら、中原はそう言ってきた。

「ああ、中原の絵も見てみたいな」

「それはどうでもいいんだよ」

そう言っただけで様々な芸術家の名前を出してきた。自分の作品を見られることが照れくさいという様子ではなくて、他に薦めたいものがあるからそちらを優先しているようだった。

「でも中原の絵を見てみたいのは事実だよ。センセイみたいな絵を描いてるならなおさら」

もちろん、嵐のイメージの謎を解くアテを見込んでいるところもあった。

「センセイのものはスタイルが違うけど。ということ、桜井君のご期待には答えられない」中原はいたずらっぽく笑った。「まあ、新しい家が決まったら見せてあげるよ。キャンバスは全部実家に置きっぱなしだからさ」

そう約束してくれたかと思うと、何かを思いついたように中原はあらぬ方を見ていた。少し視線の力を強くしてみると振り向いてくれて、

「それより、今描いてる絵が完成した時に見てもらった方が早いかな」

「風の形でも描いてるの？」

「前に描いてたけど。まだあんまり上手く描けないんだ。ていうか、まだ風の形をわかりきってない」

冗談のつもりだったのだけど、考えてみれば中原は本気で言っているのだった。果たして絵として認められるのだろうか、と実物も

見ていない内に疑わしくなったけれど、抽象画というジャンルもあるの思い出して、芸術には何でも受け入れてくれる器の広さがあるのだろうか、と知った風になった。もつとも、中原は具象画として描いている可能性もあるけれど。

「センセイみたいな絵は描かないのか？ たとえば……」辺りを見回すと、咲き始めた桜が見えたので、指をさした。「あれとかさ」

「静物は描かないことにしてるんだ。静物はセンセイが書いてくれる、だから、私は動くものを描くことにしてる。こんな風にお昼になったら太陽があつたかく感じられて、空を見てると体じゅうが青くなつていって、青を見てるだけでもあつたかくなるような感じを描きたいんだよね」

文脈がまるで噛み合っていないかった。その割に、中原は青空に向かって目を遠くさせながら、時々うなずいて、自分が述べた言葉の先にあるものを見つけているようだった。どういう考え方をすれば彼女の思考に追いつけるか、なんとなくわかり始めた気がしていたけれど、まだまだ背中も見えないらしい。仮に中原と嵐のイメージが結びついているとしたら、僕は嵐のイメージの意味するところをこの先も掴みとれない気がしてきた。それとも、中原を追いかけていけば、いつか理解できる日が来るのだろうか？

「桜が満開になったら、今度はジョーにも会えるといいな。高校の時に行けなかった所、どんどん遊びに行こうよ」

「休みが合えばいいんだけど」

「大丈夫じゃない？ 今日だつてちゃんと三人で集まれたんだしさ」

今日会えたから、これからだつて会える、そんな短絡な論理なのだろう。業種が違うから、という論理の補足を用意していたのだけど、これでは用を為さない。おざなりに同意するしかなかった。

駅に着くと、それぞれ乗っていく電車が違うようだった。今日は実家に戻るのだという。

「じゃあ、またね」

切符を買って改札とともに抜け、電車がやってくると、中原は手を振った。今度はメールアドレスも電話番号も交換しているから、ちゃんと保証のある挨拶だ。ただそんな形式に沿ったつながりとは別に、窓越しにこちらへと手を振り続けている笑顔を見ていると、彼女は身近に存在し続けるだろうし、何かしらのきっかけで遠くに行こうと、必ず戻ってくるような気がした。人懐っこさ、という言葉が浮かんだ。

電車が走り出して、風が吹いてくる。太陽が一番高い所の上にいるから、涼しく感じられた。スピードが上がるにつれて窓々が一つのまとまりへと連なっていく。

風が吹くたびに暖かくなる。季節の変わり目には、青空が訪れると共に風が吹き続ける。初めの頃はまだまだとげとげしく、うすら寒さを残していく。雛の卵を抱えこむように竦みこんでいるとおのずと体が熱を帯びてきて、そのうち寒風が涼しげに感じられる。そして、体の内側に残していたうすら寒さがいよいよ和らいでくると、

空気が暖かく感じられる。あまりの暖かさに気が緩んでしまつて、錯覚のように背中に震えが走る。

……電車が遠ざかり風が止む間際、また不可思議なイメージが訪れた。これで三つめだ。どうやら、一つ一つじっくりと解決させてくれる暇も与えてくれないらしい。それともやっぱり全てがつながり合っていて、一つの謎を解き明かせばあらゆる疑問はなくなっていくのだろうか？ 手探りで物事を進めていかなければならないようだとなると、暗然としてしまった。ただ、奇妙な考えを繰り返している内に、段々と自分は元々こういう思考をしていたものの、あまりに瞬間的だから気付かなかったのではないかと、客観的に眺められるようになってきた。けれど、そのことで生まれる余裕が、救いになるというわけでもなかった。

電車がやってきて、風の涼しさを感じると、しばらくぼんやりとしていたことに気付いた。連結された車体が滑るように走ってきて、長細いガラスが区切られていつ一つの窓へと変わっていく。スピードがゆるめられて、乗るべきドアが定まっていくと、車内から女性がこちらを見つめていた。赤いドルマンニットを着ているから、周囲の乗客に比べて目立っている。ドアが開くとポブカットが揺れて後ろへなびいたけれど、僕からは目を離さなかった。

「久しぶり」

悠はホームに降りてくると、声をかけてきた。仮にも元恋人と出会ったというのに、その様子にはまるで迷いがなかったので、僕は

半端な返事しかできなかった。悠は顔色を少しも変えず眼差しを真っ直ぐ向けて、それから少し後ろを向いた。毛先が曲線を描いた。「いいの？ 乗らなくて」

「少し、話さない？」

悠は目を見開いて、ようやく顔色を変えた。視線もズラして、考え込む様子を見せた。そうしている間にホームには降車したばかりの客しかいなくなり、乗客も粗方動きを止めて発車するのを待っていた。ようやく、僕が乗るべきだった電車が行ってしまふのだな、とわかった。悠と二人きりでいるような感覚しかなかった。周りに人波があるのだとわかってからも、その感覚は残っていた。

「少しだけ、ね」こちらを探るように一瞥しながら、悠は承諾してくれた。それから駅の階段を向いたかと思うと、「それじゃ、行こう」

先立って歩く悠は人波に紛れても目立っていた。コーディネートや、彼女と面識があるというのが助けになっているのだろうが、それを除いても際立った存在感を放っていただろう。理紗の言う通り、綺麗な女性だった。

「よかったの？ 電車賃、無駄になっちゃうけど」

振り向いて確かめてくる。別に大した額ではない。時間も問題ではなかった。僕は悠と話したかった。別れたことによる未練というより、単純に、目の前の綺麗な女と話したかった。この女がどういう人間なのか、知りたかった。この機会を逃したら、次はいつ会えるかもわからなかったから、しっかりと話しておきたかった。

「どこに行くつもりだったの？」

「帰るつもりだったよ、だから、時間はあるんだ。そっちも、本当に良かったの？」

「大した用事じゃないから。それにしても、変わってないね、カズミ君。三カ月くらいしか経ってないから、当然と言えば当然だけど……」

「別れた相手には、どこか変わって欲しい、って思う？」

「まあね」

切れ切れない会話をしながら、悠がよく承諾してくれたものだ。今更のように思った。僕からの誘いも、何の考えもなしに言葉が出ていたようなものだ。そして、考えたところでもっともらしい動機があるわけでもなかった。

ただ、悠は声をかけないでいることだって出来た、と考えてみると、彼女にも僕と話したいという気持ちがあったのかもしれない。独りよがりの推測ながら、少し嬉しくなった。ヨリを戻せるかもしれない、という希望ではなく、単純に目の前の人を僕を求めてくれているということが嬉しかった。

付き合い始める前にも、そんな感覚があった。急に電話をよこしてきたかと思うと、服を買うのに付き合っただけ、と言ってきた。結局、悠の友達と三人で出掛けたのだけど、ファッションの事なら女二人で見て回った方が良いものを、それでも僕を誘ってくれたのは、特別な感情を抱いてもらっているのかな、と思ったものだ。

「髪型変えたんだね、友達美容師がうちの店に来た、って言った。綺麗な人だって言ったよ」

「もしかして、俵さん？ あのおく喋る……恥ずかしいな、自分が一人でいるところを見られるって」

コーヒーショップで差し向かいになってからも、切れ切れな会話は続いた。ただ、気まづさはない。別れを決意した時だって、お互いが納得していたのだ。どちらかという、恋愛を度外視した場合、僕達はどう付き合えばいいのか、そんな方法を模索している風でもあった。

「一人でいる方が、気楽？」

なにそれ、と言って悠は笑った。皮肉と受け取られたらしい。そんなつもりはなく、単に一人で自分と向き合っても苦にならないのかどうか、気になっただけだった。

「でも実際、そうかもね。誤解されそうだけど、カズミ君と別れてから、自分が無理してたんだってわかった。二人でいればきつとなんだって大丈夫、って思ってたから、ずっとカズミ君の隣にいられるように頑張ってた。でも、そのくせ自分のことは蔑ろにしてたんだから……」

そう言うと、悠は耳元の髪をかきあげてうつむいた。付き合っていた頃はもつと長い髪を持ち上げていた。その仕草は、心の重荷もちゃんと持ち上げられるように、と念じているようでもあった。

今はそれほど深く考え込むこともなく、すぐに手を離して、頭を振りながら髪型を整えていた。

「一人の時間が多くなったからかもしれないけれど、もうちょっと自分を大事にした方が私らしい、って思えるようにはなってるよ。こんな風に言うと、別れたおかげ、って思われるかもしれないけど」

別れる間際にも、そんな話をした。僕達は自分のことで手一杯な人間であるはずなのに、恋人同士となることでお互いのことに首を突っ込むようになってしまった。正確には、相手を自分の管理下に置くことばかりしか考えていなかった。

テレビの一件を思い出していると、なおさらそんな風に付き合っていたと確認できた。僕はこれから二人で使うお金を取っておきたかったから、修理にこだわった。二人でいられる時間が確保されると思っていたのだ。悠はそれに対して新しくテレビを買う意義を説いていたけれど、本当はお金や時間などなくても二人の絆を強める方法は他にあると言いたかったのではないかと、今となっては振り返られる。

僕の結果はまだわからないところが多いけれど、悠に関しては本当に、別れて良かったのだと思う。

「つまり、まだ新しい人は見つけられてないんだ。なんか、ホッとした」

「どういうこと？」

「俵さんがさ、パーマかけるからには新しい人が見つかったんでしよう、って言った」

「どういう理屈？」

悠は笑った。ホツとしたと言ったけれど、嫉妬というよりも、彼女がゆっくりとした自分の時間を作れない内に、また過ちを犯してしまう可能性が生まれなくて良かったと思っただのだ。

「じゃあ、そっちはどう？ まだ一人でいるつもり？」

「どうかな……よくわからない。一人でいるのか、二人でいるのか」そう言っている間、頭の中では高校の頃からの友人達が浮かんでいた。「もしくは、大勢でいるのか」

「冗談じゃ、ないんだよね？」

悠は目をのぞきこんできていた。そのうち見つめる力が強くなった。僕が真面目に物を言っていると察してくれたらしい。

「最近、高校の頃の同級生と会ってさ、また他の友達も集めて遊ぶうって誘われてるんだ。皆の休みが合うのかどうかも分からないのに、会えたからこれからも会えるだろう、って言ってる。でも、こっちもそんな気がしてるんだよ、不思議なことに。だから、もしかしたら僕には大勢でガヤガヤしてるのが合ってるのかもしれない、って思ってるんだ」

「へえ、いいなあ。私にはそういうところないって、ここ最近で気付いちちゃったから」

悠は他の席の方を向いて言った。店には学生をつるむ姿や、カップルが話しこんでいる姿がいくつも見受けられる。もし悠が、僕や中原の作る輪の中にいるのならばもっと過ごしやすくなるだろうな、とは思ったけれど、都合が良すぎる気もした。

コーヒを飲み終わると、話すこともなくなってきた。そろそろ、悠の用事も尊重しなければいけない。

「電話番号、変えてないよね」僕はそう訊ねた。

「うん、メールアドレスは変えちゃったけれど、こればかりは簡単には、ね」

「また何かあったら、相談役にでも使ってよ」

なるたけ軽い口調を心掛けたのだけど、悠は少し間を置いた。

「気が引けるな、なんていうか……」

「なら、気兼ねなく電話できるようになったら、かな」

すぐに答えられたおかげか、そのほうがいいかもね、と言って、悠は立ち上がった。おごってくれてありがとう、と言ってから、また少し間を置いた。車内から僕を見つけた時のように、僕を見つめている。

「じゃあ、またね」

右手を振ると、ドルマンニットの袖が少しずれて、肩が覗いた。その先にはコーヒショップの窓があつて、傾きはじめてた西日が強く射していた。

「うん、それじゃあ」

(了)

瑠璃色の記憶

とーい

その夜、サトルは都会の空に光が爆発するのを見た。閃光は激しく、思わず瞼を閉じてしまうほどの光の粒子が彼の網膜に降り注いだ。不意の光は眩暈を誘い、サトルは立ち尽くすしかなかった。

昨夜、テレビのニュースは地球に接近する隕石の存在を伝えていた。まさか落下したのか。サトルは恐る恐る瞼を開けたが、夜の街に浮かぶ電波塔や高層ビル、幹線道路に連なるテールランプや帰路につく人々、すべてが何事もなかったかのように変わらない営みを続けていた。

光は幻であり、ただの眩暈だったのだろうか。しかし、目の奥に残る気怠い重みは、光の刺激によるものとしか考えられなかった。携帯を取り出し、掲示板やミニブログ、ニュースサイトを検索する

ものの、都会の空に炸裂した光に言及したものは「発生した」という事実確認は勿論、手掛かりすら見つからない。

自分の見た光は何だったのか、なぜ誰も光を感じなかったのか。理解出来ないが、この場においても何も始まらない。サトルはハイカートのスニーカーの紐を結び直し、再び歩き出す。

近くの駅から電車に乗らず、次の駅まで歩くことにしたのは光の手掛かりを求めてであり、もし光が幻であったなら、幻であったことを自分自身に証明する現実を探すためでもあった。

炸裂した光の手掛かりを探すことは感傷を伴う戯れであったのかもしれない。サトル自身は光を浴びた感覚があるものの街に形跡はなく、手掛かりすら掴めなかった。からだを休めることも無く時間を消費し、発生したか分からないものを探すとき、最早、探すという手段そのものが目的となり、普段は立ち入ることのない危うい光と色と欲に彩られた一面の深部、光の届かない路地へと迷い込んだ。

ふと、サトルは空を見上げた。狭い空は異様に澄み、視線を落とせば、大企業の消費を喚起するネオンサインが明滅していた。何も変わっていない、サトルは眩き、短い煙草に火を点け、この場を去ろうとする。そのとき、暗闇に順応した瞳に矩形の小さな扉が映った。

サトルは、ゆっくりと扉へ近づく。扉は木製で、ガラスが嵌め込まれていた。覗くと、暗い建物の中に雑貨のようなものが見える。

店だろうか、扉に付いていた郵便受けを見ると、木製のプレートが取り付けられていた。手書きのような文字で「青黒」と彫られている。どう読めばいいのだろう。「あおくろ」、「せいこく」、サトルは呟きながら、どれもしっくりしないと考えていると不意に扉の開く音がして、女性が現れた。

「お客さまですか」

若く、背の高い、瘦身の女性である。静かな声だったが、サトルには初めて聞いた声のように感じられないほど、自然な音に感じた。「実は道に迷って、ここに。お店と聞きましたが、雑貨屋さんですか」

初対面の人に、まさか都会に炸裂した光を見つけるためとは言えなかった。

「はい、お店です。文房具屋ですが、雑貨屋さんに似ていますよね」
女性はくすりと笑い、続ける。

「こんな人目の付かないところにある文房具屋なんておかしいですよね。よろしければ、少しだけ覗いて行かれますか」

一瞬迷ったが、女性の正直で飾り気のない言葉に好感を持ち、サトルは扉の向こうへ歩いていく。間もなく、店に明かりが灯った。店の中は二人も入れば身動きが取れないほどの広さであった。狭い、というより、それ以上に商品が溢れていた、というのが正しかった。飾り気は無いが丈夫で美しい木目のアンティークのショーケースは幾多の所有者それぞれが深い愛情をかけなければ出せない艶をたたえ、並べられた鉛筆や万年筆、舶来物のノートやインク瓶、

鉄などを、白熱球がやわらかく照らしている。商品は溢れていたが雑然としているわけではなく、まるでそのものがあることが必然であるかのように置かれていたから、サトルは初めてこの店に入った気がせず、不思議な懐かしさを感じていた。

「こんなお店です」

女性は静かに言った。白熱球の温かな光に照らされ、暗闇では分からなかった女性の顔が見える。ショートボブの黒い髪に、一重瞼で黒目がちな瞳。口角の上がった薄い唇が格好良い。

「どれも綺麗でびっくりしました。この鉛筆ホルダーも素敵で」

サトルは鉛筆ホルダーのひとつを指し示す。赤色と白色の混ざった、まるで大理石で出来たような軸である。女性は微笑み、

「こちらは今日、お店に並べたばかりの鉛筆ホルダーです。四十年前ぐらいのアンティークで、セルロイドで出来ています。セルロイドは直射日光があたると劣化しひびが入ったりしますが、このホルダーは保管がよくて、発色も昔の物とは思えないほど美しいですね」

「セルロイドのホルダーなんて、初めて見ました。良い物がたくさんありますね。もう少し、お店の中を見させていただけませんか」

「ぜひ」

サトルは表情を少し緩ませ女性に小さく会釈し、店内をあらためて見回す。真鍮で出来た小さな鉛筆削り、革のメモカバーやペントレー、クリーム色の原稿用紙、ガラスペン、プロッターなど、文房

具が好きでなければ手にしない品々で溢れている。

その中に、瑠璃色のガラスの置物のようなものがあつた。大きなおはじきのような形をしていて、原稿用紙の上に三つ載っている。薄く、透き通つた瑠璃色が原稿用紙の白色に合つていた。サトルがしばらく見とれてみると、

「これはこういう使い方をするために作られたか分かりませんが、ペーパーウェイトとして置かせていただいています。青色が綺麗で、私も大好きなんです」

女性の言葉に、

「とても綺麗です。こんなに綺麗な瑠璃色を見たことはありません。本来の使い方は分からないと言われたけれど、紙の上に置くとしても引き立っていて、きつとペーパーウェイトとして作られたと思います」

サトルは素直に感想を伝えると、

「ありがとうございます。もしよろしければ、手に取ってみてください」

女性に勧められ、サトルは瑠璃色のペーパーウェイトを手にした。透明感のある、少し明るい青色が美しい。なめらかな手触りが心地良く、ふと、子供の頃にプラスチックで出来た宝石の模造品を集めていたことを思い出し、懐かしくなつた。このペーパーウェイトには人の記憶に寄り添う何かがあるのかもしれない、と思つた。

気づいたときには、ペーパーウェイトをしばらく握り締めていた。「そんなにお気に召していただいて、うれしいです。もしよろしければ、ひとつお持ちください。売り物ではないので、遠慮なさらずに」

不意の女性の言葉に、サトルは顔を赤くした。

「商品をすみません。とてもいいなと思つて。このペーパーウェイトを持つていたら、何だか子供の頃のことを思い出してしまつて」

「そう言つていただけで、本当にうれしいです。子供の頃を思い出されたという気持ち、私も何だか分かります」

女性は優しく微笑んだ。サトルは受け取るか迷つたが、彼女の気持ちを素直に受け入れた。そして、貰うだけでは悪いし、何より瑠璃色のペーパーウェイトを使いたかつたので、便箋のセットを女性に選んで貰つた。彼女は飾り気の無い乳白色の便箋のセットをサトルに差し出す。

「やさしい瑠璃色に、クリーム色の紙がとても合うと思います。紙質もいので万年筆などで書かれても、ひっかかりや字の滲むことはありません」

紙質については分からなかつたが、サトルもこの便箋は瑠璃色のペーパーウェイトに合うと思つた。

「ありがとうございます。便箋、いただきます。何だか遅くに長居してしまい、すみません」

サトルは言うつと、

「いえいえ、私の方からお誘ひしたのですよ。それに、この店は私が自由にやらせていただいているので、営業時間はあつて無いようなものです。お客様がいらつしやればずっと開けていますし、休む

ときは勝手に休むので、お客様から時々叱られる時もあります」

女性は便箋とペーパーウェイトを包む手を休めることなく言い、笑った。そして包装した商品をサトルへ手渡し、

「もしよろしければ、またいらしてください。日中は夜と雰囲気が変わって、意外と清々しいんですよ。名刺もよろしければどうぞ」

と、微笑みながら、名刺もサトルへ渡した。名刺には「黒青」という店名が書かれ、下に「ブルーブラック」と振り仮名があった。「黒青と書いて、ブルーブラックというのですね。何て店名を読むのか悩んでいました。そうか、万年筆のインクでブルーブラックってありますものね」

「そうです。お詳しいですね」

女性は微笑み、

「ぜひまたいらしてください。営業しているかいないかブログに上げておりますので、いらしていただけるまえに名刺のアドレスにアクセスしていただけましたらうれしいです」

必ず伺います。サトルは言い、一礼して店を出た。

スマートフォンでサトルが時刻を見ると、すでに二十一時を過ぎていた。いつの間にかこんな時間までいたのだろうか、と思う。

サトルはマフラーを締め直し、家に向かう。途中、コンビニへ寄り、発泡酒を一本買い、家へ戻った。ただいまを言う相手はいない。すぐに、サトルは窓際の棚へ便箋と瑠璃色のペーパーウェイトを置いた。

朝になれば光が差し込み、ペーパーウェイトは瑠璃色に輝くだろう、とサトルは思う。

(了)

I believe your brave heart

常磐誠

一

卓球は雨でもできるから良いかと、野球部の連中が言っていた。室内練習がダルくてダルくて死にそうだと。

そういう奴等にはわからないだろうが、実際は卓球だって雨降りの日にはテンションが下がる。わさわさ、パツパツと打つ雨音と湿気に気持ちをやられてしまう。

永杜豪ながもりごうがいるのは、宮ノ訪みやのわ中の体育館ではなく、友人の家の中に作られた卓球場だ。

「子ども達よ！ こんなに凄い環境を与えられる僕に感謝すると良いよ！」

と、友人の父親がハッハと笑いながら語るのが、ありがたいとは思いつつも正直うざったい。

「いやそれ自分で言うことじゃないし」

というツツコミが即座に入る。さっきの調子に乗った発言をした人の義理の妹で、百合神望ゆりがみの母親。

豪はいつも通りの軽口の応酬を聞いていて、兄妹の愛情というか、信頼みたいなものを感じていた。

この二人は血が繋がっていないのだから、きっと自分と望の間だって、家族とかとは違うけれど、友達として、仲間として、信頼関係を築くことができるはずだと思っていた。

自分と望は友達なんだったという解釈で、間違いはないと信じていた。

こんな母親を持っているのだから、きっと大丈夫だと信じきっていた。

例え他人に対して一切笑わないような人間でも。

例えばクラスで誰一人として話しかけてこないような、そんな腫れ物みたいな奴だったとしても。

きっと俺とは分かり合える日がくる。かれこれ一年以上の間思い続けて来たのに。

一人、オレンジのセルロイド球を左手で一つだけ掴んでは掌たなこころに乗せて、放つ。雨が天井を打っていて、その音が否応無しに鼓膜を穿って行くのが伝わってくる。三球に一球は狙い通りにサーブが打てない。回転が甘かったり、コースが甘かったり、高さが甘かったりする。

これじゃ打ってくださいと叫ぶようなものだ。あいつなら打ってくる間違いなく打ってくる！ 気持ちだけが、強く心を責め立てる。

そして二十球目に空振った。単純な方が意外と難しい。単純な下回転を掛けるために地面と平行にしたラケットが球に触れることはなく、床のフローリングに落ちた球は豪の膝下四、五センチくらいまで跳ね上がって来て、そして勢いを失いまた落ちて行った。鼓膜をわざわざ刺激する天井の音が煩わしく思えて、豪はいつの間にか台の向こう側にいる車椅子の男に気付くことができなかった。

「部活サボっておいてやるのがまた卓球っていうのがなんつーか悲しい性分よなあ」

虫取り網に似た、ボール拾い用の網を手にくっつかの球をその中に収めながら瀧中真琥が呟いていた。

この人が望の母親である百合神日向を幼少時に養子として引き取った人の息子、つまり日向から見て義理の兄だ。

「俺、これ以外にやることもないんで」

短い言葉だけで終わりにして、また豪はサーブ練習に戻る。一人だけでできる練習は限られているが、これは本当に大事な練習なのだ。また改めてカットサーブを放つ、今度は綺麗に切れて、相手がコートで弾む二バウンド目から自分側に戻ってくる。また左手に球を掴んだその時に、

「お前もせっかく部活サボってんだしさあ。女の一人くらい連れ込んでよろしくしてたって良いんじゃないの？」

という呑気な真琥の声を聞いて豪は手を止める。

「それじゃ俺が実際にここで女子の一人も連れ込んでよろしくやってたらどうするんですか？」

それだけ言うてから、またカットサーブを放った。今度もうまく切れて、二バウンド目から球は自分側に帰って来て、ネットに触れた。

「そりやもろろん」

真琥は網の中から球を一つ取って投げってくる。豪がそれを受け取ったのを確認してから、

「まずお前に鉄拳の一つもかましてから、その子と一緒に前家のまで引つ張りそこでお説教さね」

やっぱりそうだろうなと豪は思って、鼻で笑う。

「自分から言うておいて全然認める気なんてないんじゃないですか」

左の掌から放たれるオレンジのピン球は高さ十六センチまで上がる。ルールで定められた最低限の高さ。豪は練習内容をロートスに切り替えて速攻の為のロングサーブを放つ。力の入り過ぎでオーバーしてしまったそれを、真琥は器用に網で掴む。

「僕にバレなきゃ良いんじゃないかな」

真琥の声は、どこまでも呑気だ。

「実際、日向と猛は色々やってくれたからな」

半分笑い、そして半分呆れた様に真琥は望の両親の名前を引き合いに出した。

日向は瀧中家に引き取られてすぐに、家が隣同士で同い年だった猛と仲良くなり、幼馴染として一緒に過ごして来たという。

そんな二人は今でも二人きりで頻繁に出かけていくような夫婦

になり、豪もよくそんな二人の年甲斐の無い——とは流石に本人達には言えないが——話を聞く。

「じゃあ望の両親は真琥さんにバレないでデートしてたりとかよくしてたんですか？」

と試しに聞いてみた。

「いんやあ。色々と策を弄しては二人で出かけようとしてくれたけどね。殆ど僕と、あと梓あずさにバレて説教をくらうことの方が多かった」

昔を懐かしむ様にして真琥は微笑み、言った。三人の子供の命と引き換えに逝ってしまった妻、梓の名前を出す時に、どうしても堪えきれず一呼吸置いてしまう癖もいつも通りで、名前を出す前の一呼吸で、豪は常に梓という名前が出るタイミングを正確に測ることができた。これは恐らく他の人間達も、きっと同じだろうとも思った。

……望も？

何故だかそれだけは当てはまらないような気がした。

「本当に真琥さんが二人の計画を狂わせたんですか？」

自分が望のことを気にしていることを悟られたくなくて、豪は妙に顔をにやつかせて、問うた。

「そりやもちろん。……悪い嘘だ。梓がいなけりや三割も止められなかったらうな」

真琥が笑うのに合わせて、豪も笑う。そりやそうだろうなあ。だって、単純だもん。真琥さんは。そう思った。そのにやつきを見た

真琥は顔を赤くして、

「うるせえ！ 何笑ってんだコラ。せつせと練習せーや！」

と、球を上から投げつけながら怒ってくる。それが照れ隠しによるものなのは口調や態度からすぐわかった——そもそも、本気の本琥さんの怒りはこんなもんじゃない——。

ピン球は上投げでは軌道が安定しない。途中からふらふらと失速した球は、全く見当違いの方向へと飛んで行ってしまった。

「あーあ。後で拾つといてくださいよ」

豪は左手側に置かれたボール台から球を一つ取って、またロングサーブの練習に戻ることにした。

しばらくは二人とも無言だった。豪は自分の出せるサーブ全てを一通り確認し、練習しきることができて、そろそろ球出しマシンの用意して多球練習へと入ろうと、マシンのある方向へと足を向けた。その時だった。

「水分補給は重要だぞ」

後ろから声をかけられて、自分の水筒が放られた。急に声をかけられた格好になった豪は、それほど勢いもついていなかったはずの水筒を上手く捕まえられず取りこぼしてしまった。蓋の閉まっているペットボトルから中身はこぼれないが、凍っていたのが溶けるのと同時に外側に発生する水滴が、ペットボトルを包んでいたハンカチを通り越して床を濡らした。そこを踏まなければ影響はないだろうと思ひ、豪は卓球台にかけられた雑巾を一つ手に取って、手早くその水分を拭き取った。

「今のが取れないって、卓球で前陣速攻やってる奴の動きじゃねえや」

真琥の声に豪は舌打ちして振り返った。真琥の顔から読み取れる感じは、いつもの軽口、という感覚でしかなかった。

残ったのは、自分が思い切り舌打ちをしてしまった事実だけ。居心地が、悪くなる。

「すみません」

出たのは、その言葉だけだった。

「いや別に。だってそうだろうなと思ったから」

真琥のこの言葉を聞いて、ああ結局してやられたのだ、と豪は悟った。

「お前まだ気にしてんだろ」

「……………」

真琥の問いかけに対しては、何も答えられなかった。沈黙を続けても、天からの音がもう耳を穿たない。いつの間に雨は止んだのか。沈黙もまた耳に痛い。嫌気がさしそうだった。

「ただいま。やっぱりここにいたんだ。豪」

その声を放ったのは、真琥の子供の一人、椿だった。

椿、という花には劣るが、赤みのついた髪の毛をポニーテールにまとめている。椿も豪や望と同じく卓球部に所属している訳なのだから、今ここに椿がいるということは豪がサボった部活はもう終わっている、ということなのだろう。

「……望は？」

豪は望の様子を聞いていた。一言声を発しただけの豪に対して椿は、横目で見ているだけの真琥にも伝わる程の嫌気をその目に纏わせて返事を返してきた。

「知りたいなら自分で見に行ったら？」

それが嫌だから聞いたんだろうに。真琥が分かり易く肩をすくめる。

「ここには来ない。ランニングに行った」

椿は自分の鞆を部屋に置いて、着替えるのだろう。その言葉だけを残して卓球場から消えて行ってしまった。

「椿はいつも通り手厳しいこって」

真琥は少しだけにやけたようにして視線を豪に移す。もう全て知っているのだから、何かを誤魔化したりしたところで無駄なのだろう。

「どうか、俺としては真琥さんが俺のサボりについて何も言わないのとか、すっげえ不思議なんですけどね」

「そりやあ知ってるからね」

どうということはない。真琥の返事から読み取れるその感情。豪はそれに救いのようなものも確かに感じてはいた。

真面目に練習をしていたとしても、そもそも学校の部活に参加しない時点でそれはもう真面目ではないのだ。自分でもわかっている。望と顔を合わせるのがたまたまなく嫌だった。クラスでも、満身に顔を合わせたりするどころか、話題に出すことすらも内心嫌気が差してしまっていた。

そういうことを自分でも疾しく思っているところだというのに、それをまた上からガミガミと言われてしまうことだけは避けたいと思っていた。

室内で筋トレでもするかと思いついて帰っていると真つ先に見つかり卓球場まで通された。何かしら自分と望との間について知っているなら知っているで、小言なり説教なりがあるかとも思つてビクビクもしていたのだが、本当に、全く、これっぽっちもそれに当たるような発言は真琥の口から発せられないまま、今まで自分は集中してトレーニングができた。ありがたいことだと思つている。

もしかすると、そういうことについても椿は俺に対して怒つているのかもしれない。そう感じはしたものの、態度だけはいつも通りだ。さつき真琥さんが言った通り、いつも通りなのだ。本当にそこに対して椿が怒っているのか、いや、そもそも、椿は俺に対して——それと、きつと望に対しても——怒っているのかどうか、全く読めなかった。

「何で知ってるんでしょかね」

豪は真琥に対して率直に質問をぶつける。

「いやな、実はああ見えて案外椿はおしゃべりなんだ。ぺらぺらぺらと、それはもう、お父さん聞いてよ！　ってなあ感じで……」

真琥は饒舌な感じで語りだしたがその途中で、

「冗談は口とそのブツサイクな顔だけにしてくれる？」

という椿の言葉に遮られてしまった。

「つーちゃんサイテー」

やれやれと言わんばかりの真琥の態度を無視する椿は、緑色の夏服から、濃い赤色のウインドブレーカーに変わっていた。

真琥という人はこういう時にいとも簡単に、わかりやすくはぐらかす人だ。そういうことは、付き合い始めて一年しか経っていない豪にでもよくわかる。

「いやねえ、お前らが保護者であるこの僕にちゃんと話をしないからこういう風に僕は影でこそそこそと事情を知ってる人にあたって話聞いたりそれをまとめたりとか、色々やってやらんといかんだぞ？　わかっているのかな？　君たちは」

呆れ顔をしながら事情を知りたいきさつを説明する真琥に対して椿も呆れ顔で、

「ああわかってるさ。そして私たちはそうしてくれと一言も頼んでない」

呟く様にして、真琥に言った。

「でもお前も無関係じゃない。そしてお前は僕の娘だ」

この言葉だけは先ほどまでのおちやらかな雰囲気は抜けた、強い言葉になっていた。

「そういうのをさ」

椿はそれだけをまた呟くように言ってから、その後真琥の顔を睨んで続ける。

「自己満足。つて言うんでしょ。それとも過保護？　どっちにしたってバカがやること」

椿は卓球場を出て、玄関のある方向へと向かって行った。どこへ

行くつもりだ？ という真琥の問いに対して、走ってくるだけ！と、椿は最後までつかつかって行くような口調で出て行くようにしていた。

「そうか。行つてらっしゃい。気をつけるよ。……それと、晩飯までには帰ってこい。具体的にはあと一時間だ」

真琥が最後に発した言葉に、椿は返事をしないまま玄関を閉めた。「……………」

真琥がしばらく黙り込んで両の目を閉じているのを、豪は黙って見ていたが、それだけ見ているでも仕方が無い。そう思った豪は多球練習を始めた。真琥さんは晩飯の準備に取りかかったのだろう。ガスコンロの火が点いた音や肉じゃがの、自分の家のそれとどこか違う匂いが、所謂他人である自分が一つの家に厄介になっている、という感覚を加速させるようだった。

これで良いのか。ざわつきを覚える。胸の中で、脳みその中で焦げ付く感覚に、一瞬だけ肉じゃがが焦げてるんじゃないか、とかそんなことが気になりだし、そして、すぐにそんな訳がないと気がついては、バカバカしくなる。

「……で、お前いつ帰るの？ まさか晩飯うちで食ってく気か？ 準備してないぞ。流石にそこまでは」

呆^{ほう}、としていた豪はいきなりの真琥の言葉に慌ててしまった。いつも気配無く現れる人だ。

「え？ あ、ああ。そっか。もう、そんな時間つすよね。そうでした。ありがとうございます。……あ、マシン片してねえや」

「ああ、それは良い。どうせ椿が食後の運動、とか何とか言ってるだろう。もしかしたら、望もな」

真琥はそう言つて卓球台の足にかかっていた豪のタオルを手に取り豪に渡す。望の名前を出したのは、わざとだろう。

「今日はいつより疲れた」

豪はそのタオルを受け取ると同時に、つい口に出してしまっていた。一体何に疲れているのかすぐにはわからなくて、それでも考えるのは嫌だった。疲れているから考える必要があるのか、それともどうしたつてその行く先に望がいることを悟っているから考えない様になっているのか。自分でもわからないで今までを過ごして来てしまった。

「そしたら、すみません。今日はありがとうございました。帰ります」

その考えを打ち切りたくて、そう言葉にした。

「ん。感謝されるようなことは何もしとらんが、帰ってゆっくりしな。来たい時にはいつでも来い」

真琥は玄関まで豪のことを、最後は笑顔で見送った。ありがたいと思う反面、もういつその事、当事者である自分に問うてくれた方が自分にとつても楽な気がしてしまった。なのに、それでもいざ実際に聞かれた時のことを考えたら、やっぱり気が重い。そんな矛盾した気持ちを抱えたまままで門を開けると、

「私が走り終えるくらいにはのんびりしていたんだな」

丁度住宅地の外周を走り、帰って来た椿と鉢合わせた。

悪いかよ。豪が聞くと、ああ、悪い。椿の声は素早く、鋭く豪に跳ね返ってきて、それに豪はたじろいでしまった。

「そんなのにのんびりしてられるんだな、って意味だ。誰がそういうことを言うかっていえば、……言わなくともわかるよな」

椿はまるで畳み掛けるようにして豪に言葉をぶつけてくる。

「うるせえな！　じゃあどうすりゃ良いのかお前口出せんのかよ！　……どうすれば良かったのか言ってみろよ」

後半やや冷静さを取り戻しながらも、豪は怒りを初めて露にした。けども、椿はまるでそれを意に介さない様子で、

「どうしてそれを私に聞く。何で私がそれに答えないといけない。

お前のパートナーは望で、チームメイトは男子卓球部だろ」

「そのあいつのせいで、望のせいで今の卓球部の雰囲気は乱れてんじゃないねえのか。俺が悪いのか？　なあ。お前も見てただろ。あれは俺が悪いのかよ。俺が悪いって、お前言いたいのかよ」

一息に椿にぶつける言葉。自分よりずっと華奢な女子の体ではない椿に、学年でもずっと体の大きい豪がこうした態度をぶつけるのは異常なことだと、頭の片隅で豪は理解できていた。それでも、それでもまるで椿の態度はその通りでしかないと言っているように思えた。悪いのはお前なのに、逃げてるんだと指摘しているように思えた。事実、

「正解。お前が悪いんだよ。もう気付いても良い頃だと思っていたけどな。けど気付かないんなら別に良い。実際、お前は負けたんだ。それ以外に何か結論があるか？」

椿の言葉はこうだ。自分の顔を見上げ睨む目線の持ち主を、自分よりもずっと非力な女子を、衝動的に殴りつけてしまいたいことになる。ヒリヒリとする腕と、そして気持ちをどうにか抑え込んで、

「何に気付く頃だって？　ああ、確かに俺は負けたさ。でも、だから何だってんだよ！　あいつが変わるっていう手は無いかよ」

自分の中では冷静に、できる限り冷静に言葉を選び、問うている。と豪は思った。

その一方で豪は、ああ、俺もあーなりてえなあとも思った。自分の思う通りに事を進められる力があるってのは、さぞかし気分も良いんだろう。イライラだけが募るようだった。夏服に、汗が滲む。ジメジメした湿気が、むき出しの腕を伝って降りて行く。

椿の言葉。睨むその目を逸らして放たれる言葉はいつも増して冷淡だったように豪には感じられた。

「さあ。望がああなのは今に始まったことじゃないし。けど、そろそろ知るべきかもね。私はそう思う。望は変わらない。どうせ」

そこにあるのは諦めではない。望という人間に対する諦め。手が届かない。気持ちにはそこに一生届かない。そんな気持ちだけが汲み取れた途端に、豪の足は止まり、椿の走る足は早くなる。

結局はそういうことなのか？　置いて行け、ということなのか？　望というお荷物を置いて行けば、悩まずにいられるのか？　……強く、なれるのか。置いていかれた豪に、最早答えを教えられる人間はいない、と感じられた。夏だというのに、寒気がする。どうして。

……何故？

家に入ってから、豪は声をあげることができなくなっていた。ただいまの一声も、のどからか細く出て、震えるようだった。

……泣いているんだろうか。自分の体なのに、それすらもわからなかった。親に、そんな様子を見せるのがたまらなく恥ずかしくて、そのまますぐに部屋に籠もってしまった。答えは出ないまま、わからないまま来てしまった。

椿の声が何度も、何度も聞こえる。

知っているのだろうか。椿は俺にそろそろ知るべきだと言った。一体、何を俺は知るべきなのだろうか。嫌な想像ばかりが働く。

望は変わらない。

強いまま、変わらないのだ。

まさか、俺は望より弱いのだと悟れという意味なんだろうか。諦めろというのだろうか。布団にこもる体に、嫌な汗が伝い続けて、寒気がしてくる。なのに、体は妙に震え続けるみたいになって、動いてくれない。そして、聞こえ続ける。

椿の言葉が、いつの間にもまた降り出したのか、耳に張り付く雨の音と緋い交ぜになって自分の胸に纏わり付いて、拭い去れなくなってしまったことに気付いた豪は一人、寝苦しい湿気にも似た諦めの気持ちに絡めとられるような不安に包まれていた。

(了)

引き裂かれる小説家

——日本小説技術史を読む・第二章——

■馬琴の呪縛から逃れる四迷

日居 それでは「日本小説技術史」読書会を始めましょう。

小野寺 よろしくお願いします。

日居 今回扱う第二章とも関連するので、前回のおさらいから始めましょう。(十二月号の対談参照)

小野寺 了解です。

日居 第一章をざっくりと説明すると、著者は明治文学の起源を(滝沢)馬琴に求めています。馬琴の小説にあまねく見られる技術が「偷聞(たちぎき)」、登場人物が他の人物の会話を盗み聞きする、というものでした。この技術には、叙述を省略化するほか、様々な効用があり、明治文学を始めるにあたっては、これがネックとなっていた、と著者は説明します。

たとえば、坪内逍遙はこの立ち聞きから逃れようとはしましたが、結局のところ彼の小説には、立ち聞きが頻出する通り、この呪縛からは逃れられなかったと言います。

小野寺 逍遙は自ら「馬琴の死霊」に呪縛されていると言っています。

日居 さて、第二章の話に入りましょう。第二章ではまず二葉亭四迷が呼び寄せられます。

小野寺 「つまらぬ世話小説」。四迷は「浮雲」で故意に平凡なる不完全な人物を主人公としている。これは四迷の独創と言うよりはロシア文学をそのまま移植したために起きたのではないかと思う。

日居 四迷以前の小説では魅力的な主人公が登場しているのに、という話ですね。たとえばヘーゲルは小説を近代市民の叙事詩と定義していました。四迷にはこの考えがどこから移植されていたのかもしれない。そうした明治以前の流れから切断された平凡な主人公と相即するように、四迷の小説「浮雲」では馬琴以来の「偷聞」がなくなっている、と著者は指摘します。

小野寺 障子や襖は偷聞小説にとっては重要なアイテムなのだけど、話しているのに主人公が聴いていなかったり、聴いている途中で襖が開いてしまったりなど意図的に偷聞小説を破壊しようとしてみている。

日居 「偷聞」のみならず、『浮雲』には「夢」も登場しない。徹底的に奇遇奇縁が排除されているのです。ただ、『浮雲』には唯一文三が入眠していくシーンがあると引用されています。ここでは単

に場面が引用されているだけで、その意図は説明されていませんが、後々の論点とも直結するので、あらかじめ言及しておきましょう。

小野寺 で、密着と置き去りに移るわけです。

日居 節がかわって論点が変わりますね。

■引き裂かれる四迷

小野寺 ここからは三人称多元視界の話になります。

日居 『浮雲』では三人称多元を使いながらも基本的には主人公内海文三の視点から物語が進められます。そこで、著者は二つの内面描写の方法を引用します。

その一つは、「視点描写」。簡単に言えば、主人公の見る風景を描写しつつ、内面を間接的に描いていくものです。もう一つは「内的独白」。「意識の流れ」に代表されるような、直接的な内面描写です。

小野寺 三人称多元の定義は任意の一人物の視点へと随意に下降する上下移動、別人物に転じ変える水平移動（渡部）。

日居 これが（文三への）「密着」ですね。

小野寺 これについてはかなり詳しく論じられていますが、ここでは本筋を優先します。

日居 一方、「置き去り」は視点が別人物に移ることを指しています。そして、この「置き去り」は他の人物が文三を置き去りにすることだ、と著者は指摘します。

小野寺 （浮雲）観菊の場面は前段で文三に感情移入して読み進めるとまるで自分が置き去りにされて、恋人と恋敵が楽しく過ごしている様子を読まされるような感が起き、非常に印象付けられる効果を備えていると思います。

日居 実際、観菊の場面以降、三人称多元だった文章は、実質文三の内面描写だけが続くものとなっていきます。四迷の叙述のコントロールがつかなくなっていくと著者は指摘しているんですね。

それまでは文三以外の人物の内面もある程度描かれていたのですが、途端にお勢を始めとして、語り手は人物の内面を描けないと言いだすようになる。

小野寺 文三の内面と言うよりも文三があれこれ妄想を抱いてそれをいちいち描写するものだからややこしくなるんですね。それに二葉亭はお勢を活写してしまったから文三とのバランスがとても悪くなってしまふ。

日居 ただ著者は一概にそれを否定しません。むしろ叙述の方法と物語が上手くリンクしている成功例だとして評価している。つまり、三人称多元における視点移動による文三の置き去りと、実際の物語における文三の置き去りです。とはいえ、四迷は『浮雲』を中絶してしまう。

三人称多元だったはずなのに、文三の内面描写が肥大してしまつたので、物語を進めるためのバランスが取れなくなつてしまつた、というのが著者の『浮雲』中絶の見立てです。ここで著者は文三が「根なし草」になつてしまったと言います。三人称多元からも分裂

した、お勢からも切り離された、そして官吏もクビになってしまった。

小野寺 いきなり後藤明生にまで飛んでしまうんですね。

日居 それだけでなく、著者は話者である四迷を、物語を統御する事が出来なかった存在として定義します。要するに四迷もまた官吏失格となったんですね。

小野寺 破綻した官吏とまともな官吏という対比が出てきます。もし後藤のように開き直って分裂した作中人物と分裂した書き手は四迷が引き受けるなら書き続けていたかもしれないけれども四迷はできず、筆を折ってしまった。ではまともな官吏とはだれかということ著者は鴟外を引き合いに出します。

■分裂を統制する官吏・森鴟外

日居 まず、鴟外は日本における一人称の創設者として定義されています。それまでの一人称小説は単に「私」を主語としているだけで、実際は戯作などの説明役ポジションから抜け出せていなかったのですが、鴟外は見事に視点人物となる主人公を一人称で書きあげた、と紹介されている。これは意外でした。

小野寺 私も意外でした。鴟外がトルストイを読んでいたということも。また一人称小説は源流を古典の枕草子や方丈記に置いていると思っていたので。

日居 語り手として統一された自我を鴟外は書き上げた。四迷の分裂した自我と違って。鴟外の処女作である『舞姫』も念頭に置きつつ、著者はこれこそまともな官吏である、と説明しています。

小野寺 此処で鴟外の近代性として比喩の使い方が優れている点を挙げています。大臣を屋上の禽に例えます。

日居 ドイツ語では屋上の禽（鳩）の反対物として「手中の雀」がいる、という話を持ち出してきましたね。『舞姫』の本文に「手中の雀」は出てきませんが、暗示的に描かれているも同然です。そして、この雀がエリスだと著者はいいいます。そして、『舞姫』の冒頭では実際に「飢え凍えし雀」が出てくる。エリスが冷遇されることを先取りしているんですね。このように、鴟外の比喩は有機的に結びついているのです。

小野寺 石橋忍月の指摘で鴟外自身は肯定していないんですが、渡部さんはこの説を採用しています。

日居 そしてこうした有機的な比喩は鴟外における夢の描写にも通じています。たとえば、『文づかひ』の夢も、小森陽一が合理的だと評するように、出てくるもの全てが象徴的な意味を帯びています。

聞き畢りて眠に就くころは、ひがし窓の硝子はやほの暗うなりて、笛の音も断えたりしが、この夜イダ姫おも影に見えぬ。その騎りたる馬のみるみる黒くなるを、怪しとおもいて善く視

れば、人の面にて欠唇なり。されど夢ごころには、姫がこれに
騎りたるを、よのつねの事のように覚えて、しばしまた眺めた
るに、姫とおもいしは「スフィンクス」の首にて、瞳なき目
なかば開きたり。馬と見しは前足おとなしく並べたる獅子なり。
さてこの「スフィンクス」の頭の上には、鸚鵡止まりて、わ
が面を見て笑うさまいと憎し。

(森鷗外『文づかひ』)

日居 著者はここで再び四迷を話題に上げます。先程も話に出した、
四迷の唯一とも言っている夢のシーンです。

(…) 今まで眼前に隠れていた母親の白髪首に斑な黒髻が生え
て……課長の首になる、そのまた恐らしい髻首が暫らくの間眼
まぐるしく水車の如くに廻転している内に次第々々に小さいく
成って……やがて相恰が変って……何時の間にか薔薇の
花搔頭を挿して……お勢の……首……に……な……

(二葉亭四迷『浮雲』)

日居 四迷の夢の描写には首が頻出します。これはいわずもがな、
骸首の暗喩ですが、そこには象徴的な意味もなく厚みもない。四迷
の夢のシーンを模倣したと思われる鷗外の夢の描写とは歴然たる
差です。著者はこの四迷と鷗外の相克は、現代にも通じている問題
だと言います。分裂した語り手と、物語に忠実な語り手。あらずじ
はこんなところでしょうか。

小野寺 はい。

日居 小野寺さんは今回読んでみてどうでしたか？

小野寺 感想としては小説を書く上で、想定読者を意識した場合、
最高の読者はここまで読んでくれるという感覚を得ました。それから
明治期の作家たちが最新の小説を明治の現実を顧みずにチャレン
ジした点も興味深かったです。彼らは(一般的な)読者の存在を想
定していなかったんでしょうね。

日居 私の感想としてはとにかく小説が書きたくなりました。あら
すじを説明しましたが、割愛した部分が多いです。むしろ、そっち
のほうに参考になる部分が多い。

小野寺 ありがとうございます。

(三月八日 Skype 21)

黒田夏子「a b さんご」を読む

進行役 日居

参加者 イコ、小野寺那仁、崎本智（6）、あんな、うさぎ

日居 では、芥川賞読書会を始めましょう。対象作品は第一四八回受賞の黒田夏子「a b さんご」です。まず、皆さんに一読した限りの感想をおおまかにうかがおうと思います。

最初に、うさぎさんに訊いてみましょうか。「a b さんご」を読んで、どのような感想を抱きましたか？

うさぎ 正直、読みづらかったです。ネットの感想にもありますが、固有名詞や代名詞がないところ。ひらがなで書かれていて意味がとりづらいところがあって、苦勞しました。

日居 読みづらい文章を読みとおす中で、物語の内容は把握できましたか？ また、それについての感想もお願いします。

うさぎ 内容の方は読んだ人の感想などを補助線にして、なんとか自分なりには把握したつもりですが、内容より文体が気になってしまっていて。内容は、ぼんやりとした感覚です。結局、うまく理解できてないのかも……。

日居 なるほど、文体に気を取られて物語の内容は読みとれなかった、と。ありがとうございます。

では、次に小野寺さんにうかがいましょう。「a b さんご」を読んで、どのような感想を抱きましたか？

小野寺 a、b のふたつというのが気になりました。ふたつの世界のどちらにも属せない、という感覚があるように思えました。だが、あんまり自信ないです。

前半はヌーヴオーロマンのようにかつきりとした描写とわがまま勝手な感想が入り組んでいるけれども、けっこう手堅く書いています。それでいて人物の意思は弱い。だが、後半になると死などの観念、時間や年齢の観念がやたら出てきて人生論めいてきて、これまた別のヌーヴオーロマンのような味わいがあると思いました。

こちらのほうが人物の意思が堅固でひとかどの意見も備えているけど、文章的には描写の力が弱まっているようにも思えました。ただ、いずれにしてもそれほど徹底された「文学」という印象はしなかったです。で、具体的なストーリーについてとらえられなかった、というのが正直な感想です。

日居 作品の中で文章の方向性が変化していく印象を受けていらつしやいますね。わかりました、ありがとうございます。

では、続いてイコさん、「a bさん」を読んで抱いた感想を教えてください。

(イコから各参加者に「読解メモ」を送信。「読解メモ」は本誌では省略)

日居 「読解メモ」を読んで「者」というキーワードをもとにまとめていらっしやいますね。

イコ 上のレジュメは、読み解きの参考にしていただければと思います。こうして読んでいくことで、「何が書かれているのか」は、ほぼ百パーセントつかめるかと思います。

小野寺 なるほど。こんなに多くの人物が出ていたんだ。

イコ 「一読の感想」ですが、ものすごくいじわるな冒頭に、多くの人のつまづく理由が分かるような気がしました。なぜなら、その先を読んでいなければ、誰のことを示しているのかわからないような主語(主格)が頻出するからです。自分も、はじめはよく分からないままに読んでいました。

ところが、徐々にリズムをつかんでくると徐々に視界が開け、前に立ち戻り、「ああこういうことか」と納得し、どんどんおもしろくなってきました。

イコ 堀江敏幸が、ひらがなのもつある種の暴力性について述べていました。ところが自分は、この作品はひらがなによって、とことんまで暴力性を排された文章だととらえました。やさしく、ゆるや

かで、さびしい、うしなわれていった者たちの記憶が、ひらがなによって、はじめはあいまいなカタチだったのが、じよじよに、明確な輪郭となって、うかんできました。

方法意識冴えわたるこの小説のなかで、一点、これは暴力的だ、と感じた方法があります。それは、ひらがなではなく、漢字の使い方でした。「者」とされることで、非常に客観的な視線が出ます。

さらに、「家事がかり」にあてられた「者」を見ると分かるのですが、家事がかりは他の人物にくらべて、漢字で、バサツと書かれていることが、とても多いのです。逆に、「子」や「あとから死んだほうの親」は、非常に具体的な「者」として述べられていることが多いです。家事がかりに対して、語り手はある種の暴力的行為をおこなっていると感じました。

小野寺 金銭配分人、死病者、衰弱者なんて冷たい言い方ですね

イコ はい、自分も、この漢字の使い方に、非常に温度の低いものを感じました。これは、ひらがなを多用することによって生まれる効果だと思います。死が濃厚になってきた片親は、「死病者」「臨死者」など冷たい述べ方で、明確に死を意識させられます。

まとめると、すさまじいまでの徹底された方法意識で、家族の様子と「喪失」を愛惜たつぷりに描いている、屈指の名編である、という感想をもちました。(ろくにまとまっちゃいませんが、すでに長くなっているので)とりあえず以上です。

日居 具体的な所にまで踏み入った感想、ありがとうございます。

それではあんなさん、「a bさん」を読んでどのような感想を抱かれましたか？

あんな 感想がうまくまとめられないんですが、やはりこの掴もうとするところが、やはりこの掴もうか悩みながら、でもそれが少し気持ちいいような感じでした。やはり死がテーマになっているのだから、ということはいましました。職人のように徹底された書き方で言葉を操り異世界を作り上げていることに驚きましたし、本当に小説だけでき成り立たない世界を作り上げるところなるのだな、という感想です。

日居 文体の心地良さをあげていらつしやいますが、それは、ひらがなを用いていることに起因しているのとみていいでしょうか？それとも、ひらがなをある程度漢字に直しても、心地よさは維持されると思いますか？

あんな ひらがなでなければこうはならないでしょうね。敢えて言うなら、ひらがなと漢字の配分も大きく関係しているように思います。あとは固有名詞がないということでしょうか。ぎりぎりのところで成り立つように設定されていると感じました。

日居 卓越したバランス感覚にもとづいて成り立っているという印象を抱いたのですね、ありがとうございます。6さんにうかがいます。「a bさん」を読んで、どのような感想を抱いたでしょうか？

6 宵闇のすずしさのような、新鮮でいてなつかしい感触。そのような感情がなりました。ひとりの固有の記憶から小説がたちあが

っていくところがみごとで、それが凡百の私小説とは決定的に差異をもって描かれている。もちろんその差異は、描き方だと思えます。そんな感じでしょうか。

日居 凡百な私小説とおっしゃいましたが、そのような小説はどういう描き方をしているのでしょうか。固有な記憶ありきで「小説」としての展開がないがしろにされている、と受け取ってもよろしいでしょうか？

6 固有な記憶ありきだとはおもわないのです。すごく重要な要因かなと思います。すみません、まにあうとおもっていなかったのですが、あまり大した感想を準備できていないのですが。描き方の点で言うならば、この小説が特異なのは、そうした固有名詞を使わないで一般化されたことばたちをつかいつながりながら、決して一般化され得ないようなすごく個人的な記憶について書かれているとおもっています。一般化されていくと言うのは黒田さんが受賞会見、なぜひらがななのかと言う質問に対して意味を限定したくなくて、語源に遡るといふ気持ちをとめて書かれたことにつながる。ことばはそうした広い意味をもってつぎつぎとあらわれていくのに、語源まで遡ったことばが（なぜか？）連なるほど、すごく固有な匂いをおびて描写されていきます。そこが僕は一番はつとしたところかなと。つまり叙述方法と叙述内容がすごくかけはなれたものであるのに、それを仲人している書き手（黒田さん）のコーデイネイト力がはんぱなくて、そのちからにおどろいておどろいてしまったような感じでしょうか。

日居 ありがとうございます。一通りの感想が出揃いましたので、まとめようと思います。

うさぎ

・固有名詞、代名詞がなく、全体を通してひらがなで書かれているため読みづらい。

小野寺

・「a」と「b」、そのどちらにも属せない感覚が描かれているのではないか？

・前半はヌーヴオーロマンを思わせる描写とわがまま勝手な描写が入り組んでいるものの、手堅く書かれている。人物の意思は弱い。

・後半は死や時間の観念が出てきて味わいが出てくる。人物の意思が堅固になってくるはものの、描写の力は弱まっているのではないか？

・徹底された「文学」という印象はない。

イコ

・共通している「者」に着目すれば、物語の展開は読みとることが出来る。

・冒頭の〈受像者〉はつまずきの石となっているが、読み進めていくにしたがい、この断章が読解のカギとなっていく

・ひらがなの暴力性を排した文章。うしなわれていった者たちの記憶が、はじめはあいまいなたちで、後に明確な輪郭となって浮かんでくる。

・一方、漢字には暴力性がある。特に「者」。「家事がかり」が顕著で、客観的に、バツサリと描いている。

・また「衰弱者」「死病者」「臨死者」など、非常に冷たい印象を抱かせる。

・ひらがなと漢字が対比されることによって、一方の温かさともう一方の冷たさが、分明になっていく。

・家族の在り様、それが「喪失」されていく過程を、徹底された方法意識と愛惜にもとづいて描いた、屈指の名編。

あんな

・ひらがなと漢字がうまくかけあわされて心地よさを覚える。

・「死」がテーマになっているのではないか？

・言葉にもとづいて異世界をおりなしていく、小説だけにしかできない書き方。

6

・宵闇のすずしさのような、新鮮でいてなつかしい感触。

・凡百の私小説とはちがって、ひとりの固有の記憶から小説が立ちあがっていく。

・一般化された言葉を用いながらも決して一般化されない固有の記憶が描かれている。

・(黒田の受賞会見から) ひらがなを用いることで語源をさかのぼっていき、いつしか固有の匂いを立ち上らせることが出来ている

いくつか共通した感想

・特徴的な文体、変遷していく文章の方向性、固有名詞を排した叙述などに気を取られてしまつて物語の内容までは把握しきれない。

日居 最後に私が、これまで出てこなかった意見を補う形で感想を述べたいと思います。

奇抜な印象を抱かせる外面と裏腹に、非常に巧みな散文家であるという印象を覚えました。たとえば「天からふるものをしのぐどろぐが、」で始まる(暗い買ひもの)の断章。雨をしのぐのに用いる傘の概念を拡張して、家屋の話題に移る。また、幾重にも並べられた中から一つだけの傘を選びとる難しさから、その選択権さえ失われた引越しの話題へと移る。こうした共通要素を上手くかけ合わせながら、過去の淡い記憶と現在の不如意な状況を描き取って、物語を展開させていくところは、読者を飽きさせない技術を熟知している。

一方でこれはともすると古い手法と言われても仕方ないものです。奇抜な構想と極めてオーソドックスな技術、この分裂にも似た構成は、物語を読みとく上でもキーポイントになる気がします。

イコ たしかに奇抜なのは見せかけだけで、物語の展開のさせ方は、これまでの日本文学を読んでいる印象と、なんらかわることがなかったです。

ひとついいでしょうか？ この作品の〈受像者〉の章は、とてもいじわるだと思えます。「いなくなるはずの者」が、家事がかりを指すとは、この時点では絶対に分らないからです。文章も他にくらべるとあいまいで、自分は一発で意味がのみこめなくて、苦しかった。ところが、次の〈へしるべ〉に行くと、急にややこしさを増す「者」が減り、「盆提灯」について書かれているのははっきりするので、とにかく読めるのです。

さてそれぞれの章につけられたサブタイトルを読むと、〈受像者〉〈へしるべ〉……というように半角の、へ)によって物語が区切られています。1、2、3、……という、よくあるやり方ではありません。このことから推測できるのは、〈受像者〉の章が、「冒頭」としての性格を、黒田さんによって意図的に剥ぎ取られた、ニセ冒頭なんじゃないかというものです。〈受像者〉は、たしかにゆめのなかにただよっていく子どもすがたを明らかにし、次章からのおさなしい記憶を出すための展望となる章ですが、それにしては、読者ライクではありません。

1、2、3、……と書かなかつたのは、この作品は、どこから読んでもいいんだ、自分の読みやすいところから読み進めてみては？という、黒田さんなりの、ささやかなアドバイスなのではないでしょうか？ それは同時に、「ふつうの小説の読み方」への、ささや

かな抵抗かと思えます。もちろん〈受像者〉の章は、aとb、えらばれなかった道の枝、という重要な表現が出るからして、理解の重要拠点になる箇所だと思います。だからこそトップに据えられている。ただし、そこから読め、とは誰も言っていない。

6 そうですね。うん、どこから読んでもいい。それは凄く感じますね。いま冒頭を読んだのですがやっぱり何かすごく切なくなる。

日居 どこかのインタビューで黒田さんは早稲田文学の規定に合わせるために、応募された原稿よりも多く分量を書いていたにも関わらず、ばつさりとそぎ落としてしまった、という話をききました（間違いがあったら訂正してください）。

小野寺 長尺版もあるそうですね。

イコ 自分もそう聞きました。

日居 その過程で、実は断章の並びさえも滅茶苦茶になった可能性もあります（単行本になった形では、ひとまず物語内容に沿って順序良く並んでいるようにも見えますが）。

6 〈受像者〉……。親やきょうだいがいなくなってからはじめてみるようになったゆめがこの文章を書いている人がなんだかすごく孤独をあたりまえにしている、そのあたりの手つきに、何だか悲しさともいいえぬようななにかが……。

あんな 確かに一章一章で完結している風にも読めますね。

日居 章が変わった時の語り出しは、時間があつちこつちに飛びますね。エピソードが現在へと戻っていくにしたがい、年齢が出てきて、ああ、やっぱり一応続いているんだ、とわかるけれど、それ

ぞれの断章の冒頭を読んだ限りでは独立した断章を読んでいる感覚に陥る。

イコ 後半が親の死に向かつていくので、ひとまず物語が展開しているようになっていきますから、「ふつう」に前から読むことを、受け入れてるとは思いませんけどね。

蚊帳や盆提灯、草の生えた道、庭など、さまざまなものにまつわる記憶が、それぞれの時間で描かれていますね。はじめはいちいち、これはいつのことだ？ と確認しなければならぬのですが、読者はここでとにかく立ち止まって、真剣に考えようと思います。積極的に「読む」ことをうながす方法のひとつだと思います。

日居 そもそもさまざまなものは、ことごとく消えているものですよ。意識にのぼることすらなく、記憶として回想して、ようやくその重要性がわかるというような、意識以前の（作中にある言葉をつかえば）「所有感」。

イコ そうなんです、キーワードは所有感と、うしなわれたものだというところだと思います。

日居 とくに庭が「家事がかり」に手入れされたせいで殺伐としたものになっていく草ごろし。ここは作者の意図があまりにむき出しになっていて怨念を感じます。

イコ ここに語られている「子」の人生はとにかく、「自分でえらべなかった感覚」と、えらべなかったことよって「うしなわれていくもの」にいろいろいられていると思うんです。

日居 抑制がきいていたというか、それまで読みづらい文章によって捉え難いものだったはずのものが、ここで意図が明確になっていく。

小野寺 みんなの言ってることに関連してるのかどうかは疑問ですが、気になった点は単行本の六十ページ後半で、「半だーすのきようだいでそだった者は、庭だろうと親だろうとかかわりを維持するためには相応の努力、はた目にもわかるかたちの努力をしつづけないといけないとおしえこまれてきた」、とあるのですが、ちょうど自分の親世代の黒田さんの庶民感覚、人物はたくさん出てくるのだけれども記号化されてしまった感覚は、自分の親にも感じられます。そして「物質」に対する 執着もまた戦後のもの不足の影響からか、感じられます（草ごろし）。

イコ 〈草ごろし〉はおそろしい章ですね。怨念剥き出しです。

日居 この怨念は、通常ならキズとなってもおかしくない。

イコ ですが、小野寺さんのおっしゃることも関連しますが、家事がかりの過去と独自の倫理が、ちらつと語られる唯一の箇所でもあります。

日居 そう。しかも家事がかりを通して、社会的なものにまで拡張されていく。

イコ ただの悪役になりかねない家事がかりを、ここでもかろうじて立体的にしていると思います。（それでも語り手の怨念はやまないのですが）。

日居 川上弘美が芥川賞の選評で「家事がかりにたいする親子の態度が無批判ではないか」と言っていたけれど、滅茶苦茶批判してますよね、抵抗はしていない一方で。

イコ 批判していますね。それに抵抗できなかった人間たちを描くことで、かえって批判的な言い方になっている（もちろん、そう読めるというだけであって、黒田さんが、そう読め、と言っているわけではない）。

日居 そもそも「家事がかり」は家に入りこんできた段階で、批判されています。家が生活をするためのスペースと化してしまっ、切り詰まっっていく。

イコ はい、家事がかりは後半にも、「法的資格希望者」などと、おそろしく冷たい漢字表記をされます。

日居 このあたり、単に固有化された記憶にとどまらない、人間一般（とまでいつていいかはわからないけど）に向けられた、冷徹な視線を感じます。この小説はひらがなの温かみに反して、実に冷酷すぎる。

イコ のっけから、「おもいちがいをしている者」ですからね。〈家事がかり〉。

日居 こうみてるるとひらがなを用いたのも、露骨なリアリズムを避けるための手法かと見えてくる。この小説に隠れている業は深いですよ。

イコ 業といえば、この小説では家事がかりの領土侵犯が描かれながら、古くからある人と人の密接なコミュニケーションや風習、愛

着のある道具が捨て去られていく。これは古いものへの愛惜と、現代文明批判がないまぜになった作品だと思います。「ひらがな」だって、その日本的な「古いものへの愛惜」に通じますし。「かよいじ」とか「まろぶ」とか、古典を意識した言葉もある。

日居 となると、時折まぜこまれてくる堅苦しい漢字の単語は、現代文明の暗喩となつてきますか。

イコ そう読めますね。死に瀕した親がやたらと漢字を背負わされるのは家事がかり（死神Ⅱ現代文明の具体化した存在）によって、すっかり侵犯されてしまったゆえとも思える。（子どもは自分が死神だと思っているけれども、それは作者の皮肉かと）

日居 小野寺さんのご指摘にもあった「a」と「b」のどちらにも属することができない、が透けて見えてきましたね。じゃあそろそろこの人にお出ましを願おうか……。

「個性」といえば決まって「豊かな」と応じてしまう日本語の慣習への侮りも隠そうとしない作品だった。「豊かな個性」とは、語義矛盾もはなはだしく、そんな言葉を間違つても口にしてはならぬ。「豊か」さからは思いきり遠いきわめつけの「貧しさ」こそが「個性」にはかならぬ。「a bさんご」は、一行ごとにそういつているかに見える。作者の黒田夏子は、「きわめつけの貧しさ」だけで勝負する、優れて「個性」的な作家だといわねばなるまい。（早稲田文学新人賞選評・蓮實重彦）

日居 失われたものたちと、決して同化できないものたちの間で書き続ける黒田さんの「個性」を、よく捉えた選評ですね。

イコ 6さんのおっしゃる、固有の感覚、につながるかと思えます。**日居** おおよそ語りつくした感じでしょうか、皆様。まだ何かあれば、遠慮なくどうぞ。

イコ まだ2つほど。片方は、まだ分析しきれておらず、片方は、推測があります。「者」に注目していくと、びっくりしたことがあったんです。ほとんどの章が、たっぷり「者」を使っているのに対して、〈へしるべ〉と〈やわらかい檻〉はなぜか、ほぼ「者」がなかった。なぜだろう!! って思ったのが一点。

もうひとつは、「者」の有効性について。自分は常々、一人称や二人称のもつ暴力性について、思いをはせていました。それで長編を一本書いたくらい。「わたし」と、自分のことを言うことで、誰かの考える「わたし」が、字面から立ち上がってしまう「おれ」といえば、かっこつけた感じ。「ぼく」といえば、ちよつとなよつとした感じ。

ところがこの小説に、そうした読者のイメージに委ねるような人称はありません。同じ人物が、「くくの者」「くくの者」と繰り返して、色んな言い方で書かれることで、その人がステロタイプに陥らず、読者の勝手なイメージから離れた、非常にゆたかな人間になつていくと思うのです。自分はそこが、とてもいいな、と思いました。ありきたりな人称のレットテルを剥がされることで、固有の感じに近づいていく。6さんの言葉に近づけるなら、そういうことです。

6 そうですね。語りなおされることで、いちいちはじめでの登場人物のように読むことができました。

日居 通常三人称を用いるだけで客観的な見方が保てるように思われていますが、「a bさん」の場合は語り手の視線が「者」に加えられていきますね。一人称と三人称の間の、主観性と客観性の間の、ギリギリの視点が設けられている。

6 〈やわらかい檻〉……ぼくも祖母の家に小学校の頃かえったころは、よく蚊帳をつつてもらって、その非日常感にわくわくしました。そのような子供の頃の他愛ないよろこびも、この章からは感じ取ることができた。また蚊帳をつりたいな。

イコ すてきな章でしたね。親子がもつれあって、脚をばたばたさせているところや、蚊が一匹入ってしまうのも遊びになってしまうところなんて、ほんとうによくうかんできて。

6 ええ、つまさきで天のかやをさわろうとしていたなんていうのは、情景がほとんど短い言葉でしか書かれていないのにどういう態勢かすぐわかる。

イコ 蚊帳のまわりにおかれた家具たちに、小さな闇がうずくまっっていると、ああ——、日本！ 日本！ 日本！ 勝手に涙をこぼしそうになりました。陰影を書ける人なんだなって。

6 主観性と客観性のぎりぎりというものは、たしかにそうですね。あやうい感じがこの小説からいつもする。なかなか「ゆいつ」とか「ゆきき」とかは書けないもの。

イコ 主観というのは、作者の主観ですかね。

6 見えない縛りによって、抑制されてしまっている。文法なんてつまらないものに……。

日居 いや、語り手の視点（主観）に見事になりきっていると思います。

イコ 語り手の主観ってことですか、ナルホド、子ですかね（語り手）

6 関係と言うのはどこかにその関係をみている視点人物がいるので。そういう主観性ですよ。ぼくも、ちいさいころに大叔母さんたちを〈小さいおばさん〉〈タロウ（犬の名前）とこのおばさん〉とか言う名前でおしえてもらい、いまだに使っていますね。

日居 地元独特の呼び方ってありますよね。「八百屋」で通じたり、地名で通じたりする。

イコ 視点人物の主観か、なるほど。その外側にきちんと作者が存在している。

6 でもそれが主観で終わらずに、一応の時間軸をもって描かれた小説の中でつかわれるから、ああ、あの人とこの人は同一人物ねというふうに関係性もまだ保たれていると言う……。ほんとうに読み飛ばすとかかなめ読みとかがまったくできない。小説でしっかりと一語一語をつかんでいくことになる。

イコ 読み飛ばすとか、かなめ読みするとか、そういう小説ではありませぬ。字面だけ追って、ひらがなのやわらかさを楽しむことはできるかもしれませんが。

6 漢字だと表意文字だからひとめで意味がわかってしまうけど、ひらがなは意味のきれめを読むという行為でしっかりとみつけないといけないから。でも、カンマの位置とかはすごく考えられているとおもいます。

イコ そうですね、絶妙でした。決して突き放されている感じはしないのです。「ほら、一文長いぞ！さあ読め！」みたいな、サディスティックな感じがしない。「じつくり読んでね。おねがいね」って、えがおのおばあちゃんにいわれているような。

6 そう、昨日の雑談に繋がるかもしれないけど、決して独りよがりな小説ではなく、いっけん読みにくい小説の中にしっかりと世界がつくられていて、何だか熟練という感じがします。

あんな 笑顔のおばあちゃん、浮かんた。

6 あんなさんとの読書会でも出たけど、この書き手はぜったいにドヤ顔をしていない……。

イコ はいはい、そうですね！

6 慣れた手つきで描いている。さもふつうのように。

イコ 書いて、責任を読者に押しつけるような感じがしません。慣れてますよね、ものすごく。でも、一文一文はものすごく、考えこまれていると思う。

あんな 意図的にやっていないからでしょうね。

6 でもサディスティックな感じはときどき受けるかな……。

イコ あ、受けましたかw

6 鎌があればふりおろしますよ、みたいな怖さはあったかも。

イコ 自分はもう、えがおのおばあちゃんと対話してる気分で……。ただただ多幸感……。

あんな 自信みたいなものは、すごい感じましたね。

イコ ばあちゃん、えがおのうらで鎌もつてたのか、こえー。

あんな こえー。

日居 自足も感じますね。自分の創り上げた世界だけで事足りている。それが独りよがりにならないんだから凄いものです。

イコ 山田詠美だったかな、自意識がクサいって選評で言ったの。

日居 「トッポイ」でしたねw

イコ そうそうトッポイww はじめは自分も、クサそうな小説だと思ったんですけどね……w

6 変な話をするけど、一個人的な感覚として蓮實重彦の文章は逡巡することを愉しんでいるけど、黒田さんの文章は逡巡しながらもしっかりと目的地をみさだめていて決して？ 蠟燭をにぎられている方じゃなくて、蠟燭をにぎりながら「待たせて」いるような気がする。

日居 「家事がかり」をクソミソに罵倒する描写は蓮實節を思わせるものがあつたな

イコ 鹿島田さんもそうだったけど、けっこうちかごろの文学作品には、敵っぽい人が出るなあ……。

6 敵っぽいっていうのは？

イコ 「家事がかり」のように親子を引き離す方向に動いたり、鹿島田さんの作品（冥土めぐり）でいえば弟みたいだな、主人公にとって障害として意識される人物のことです。

6 なるほど……やなやつがでてくる小説と言うのは魅力的です。

イコ かれらはもちろん独自の倫理感や論理があつて、動いているんですけどね。語り手は、そこまで内側に入り込んでやらないんですよ。だから、敵っぽく見えるんです。

日居 内側に入りこんでいくとフォークナーにおけるサトペンや、ドストエフスキーにおけるスヴィドリガイロフが出来上がるんだろうけど。

イコ そうですね、とくに外から見ている人物の、主観がまじつてますからね、今回の作品は。なのであやうい、というのとは分かりませんね。家事がかりがかわいそうだなって、思わなくもないですw
日居 あえて（上から視線で）課題を上げるなら、語り手と敵との境界を明確に設けているゆえに、単純な構図になりかねない、といったところですか。

イコ そうですね、まあこれくらい単純じゃないと、まずしかけに気づいてもらえないっていうのはあるかもしれませんね。

日居 課題と言ったけれど黒田さんはあと何作くらい書いてくださるんだろうか……森敦は「月山」を出してからも傑作を出しまくったけど。

イコ 十年に一作とおっしゃっていましたがね。むしろ今まで書かれてきたのを次々に出版していただきたいですねw

6 そうですね。るいせいたいめいじやく、このまえアマゾンで八千円ぐらいしていました。

イコ るいせいたいめいじやく、小説なんですね。さいきんしりました。

6 （累成体明寂こういう字だったかな）

イコ 自分が見たときは、『るせいたい』は）もつと安かったw

あんな 毬読まれた方いますか？

イコ 「毬」「タミエの花」「虹」のタミエ三部作、最高でした。あんなさん読まれたんですか。

あんな 単行本買うか迷う。図書館ではしばらく貸し出し中が続きそうだし……

イコ 二五、六歳の黒田さんは、すでにやばかったです。とくにタミエの花が……。

あんな ほう……。

イコ とりあえず、ひらがなじゃなくて、漢字が多いです。

あんな そうなんだ……。

イコ なんか難しい漢字をいっぱい使っています。志賀直哉とか、そのへんの、近代文学の短編読んでる気分でした。

あんな 気になる!! ひらがなありきじゃない、っていうのが証明されてるんですね。

イコ そうですね。とにかく字面へのこだわりはものすごいと思います。

6 文章が、すでにめっちゃ上手いですね。

イコ　なんでそこに漢字使うの？　って言ったたら、えがおで答えてくれそうです。

あんな　えがおw

イコ　めっちゃ上手いです。同人誌でああいう作品をひとつでも見つけたら、目がハートです。

あんな　若い時にそれだけの完成度ってすごいですね。

イコ　ですええ……。

あんな　才能……。

イコ　才能はもちろんありますが、小説書くために仕事を決めたりする人ですからね。やっぱり相当の努力もあつたんでしょね。

あんな　そうですね、ひたすら努力ですね。最近書けないので愚痴ってしまいました、すみません。

イコ　黒田さんの見てから、自分の読むと、ハアツてなりますよw 一文一文、丁寧にやらにやいけんなあと思います。

あんな　純度がすごいですよね、もちろんそういう書き方だからですけど。

イコ　ええ、余計なものがなくて、おしたりひいたりできない、必然性のある文章だと思います。

日居　ひとまず、一通り語り終えた感じでしょうか。

イコ　たくさん語らせていただき、ありがとうございました。

6　ありがとうございます。

日居　非常に充実した読書会だったと思います。それではこれにて、芥川賞読書会を閉会と致します。

あんな　お疲れ様です。

日居　皆さん、お疲れさまでした。

イコ　おつかれさまでした！

(二月二十四日 Skypeにて)

「書を持ち、街で会おう」

第二回東京オフ会レポート

崎本智（6）

●桜が見ごろの世田谷に集う

芦花公園駅で降りると左手には桜並木が見えて、右手には小野寺さんが見えた。小野寺さんは相変わらずお元気そうだった。小野寺さんは TWI 文の中で最も行動をとめたことが多い。自由なおじさんだ。小野寺さんの隣には一人の青年が立っている。その人こそ日居月諸さんだった！ 6は平静を装いつつも初めて会うからちよつと緊張した。でも話してすぐに打ち解けることができた（と思う）。日居さんは高速バスで来られたのでかなり体力を奪われているとのことだった。

駅前には電話ボックスがあり、久々に電話ボックスを見た6は舞い上がり思わず小野寺さんに入ってもらい電話しているしぐさを

お願いした。小野寺さんは快諾してくださり、それをばっちり写真に収めた。

小野寺さんとおばかなことをしているうちにあんなさんが来られた。一年ぶりくらいにお会いして懐かしかった。あんなさんにお勧めしていたお菓子の話になってあんなさんから「Kabayaのお菓子は関東には売っていない」という驚愕のじじつを教えてください。天下のKabayaも関東まではその名をとどろかしていなかったのか。そんなこんなで雑談をかましつつも、お忙しい中挨拶に来てくれた方がいる。今回が初登場のとーいさんである。とーいさんは舞台俳優のようなオーラを放っていらつしやる。ちよつとびっくりしつつも鞆のなかには敬愛するゆかりんのために蛍光ライトなどがわんさか詰め込まれていると聞き、やっぱりとーいさんだと思う。

そうしてあんなさん、小野寺さん、日居さん、とーいさん、6の5人は世田谷文学館へ向かう。途中、通行人の方にお願いをして記念写真を撮影していただく。撮影後、写真を見てみると全員の表情がなぜか（？）不思議に死んでいる。めっちゃ楽しかったのに（笑）。集合写真に緊張したのだろうか。そして桜並木（東京ではちよつど見ごろ）を通り、成城石井などを尻目にしつつ世田谷文学館に到着する！ 錦鯉がうようよ泳ぐお堀を見つけて5人は一様に「高そう！ こいつ高そう！」「あつちに金色のものいる！ あいつも高そう」といけない会話に興じる。

鯉が遊泳するお堀に浮世離れたかのごとく漂う亀がいてこれ
また風流♪



●文学館ではしゃいでしまう大人たち

世田谷文学館の中に入ると一分の一以上のでかいサイズの寺山修司のお面が販売されていた。試着することも可能だったため、とーいさんにおもむろにお渡ししてみると快くつけてくださった。ブルーのお洒落なジャンパーを着た寺山が現代によみがえり、一同きやつきや騒いでしまう（結構静かな場所なのに）。

寺山修司展では寺山がつくった学級新聞や小中時代の通知表なども展示されていた。宇野亜喜良が描いた天井敷敷のポスターや天井敷敷劇場までの巨大地図など面白そうなものが目白押しである。中でも面白かったのは寺山が友人や恩師に宛てて書いた手紙のかがずかずで天才と呼ばれた彼もひとりの人間であったことがうかがえる。手紙の内容は「こういう感じのセーターが欲しい」「お金をおくれ」など人間味あふれるものもあり、読んでいて笑った。

展覧会を見た後、あんなさんと6はするするとアンケート要請をすりぬけたのだけど小野寺さんと日居さんがアンケートを入念に書いていたので結局ついていき、おくれながら書きはじめたのに、二人より先に書き終えてしまった！二人はなかなかでてる気



配がなかった。とくに日居さんは真剣にアンケートに向かっていたのが印象的だった。

●「伯爵」で読書会

意外に時間を使ってしまったため、公園での読書会は諦めて合流場所の池袋の喫茶店に向かうことにした。東京の路線図は縦横無尽であり、田舎者の6は切符を買うにも混乱した。

小野寺さん、あんなさん、日居さんと横一列になって車窓から東京の景色が移り変わっていくのを見るのは不思議な気持ちだった。4人でお出かけしているのが何だかとても奇跡的なことに思えてくる。お話をしていると池袋なんてあつという間になってしまう。

コメダ珈琲を目当てに向かったのだけれど店内にはマダムのような女性たちが多く行列ができていた。別の店を探すことにした。あんなさんが近くのお店をご存知だったのでそこに連れて行ってもらおう。店の名前は「伯爵」。一昔前のきらびやかな雰囲気が残っていて素敵なお店だった。やっぱりお客さんでよかったがえしていた。それでもわれわれは何とか席をみつけて腰をおろした。

もともと煙草臭い店内で小野寺さんがつぎつぎと煙草を吸い続ける。そんな中、寺山修司読書会は開かれたのだ。飲み物を飲みな

がらサンドイッチを頬張りながら、iphoneで音声を録音した。思っている寺山観を展覧会の記憶と織り交ぜつつ語る読書会になった。

(読書会の詳細は[音声ファイル](#)をご確認ください)

●「館詰めにされたい！」そう言いながらも夜は更けていく

読書会は無事終了。展覧会を経た後で寺山が何を考えて生きてきたのか垣間見えた気がした。4人は「伯爵」を後にする。東口の飲み会会場の居酒屋へ向かうために……。



池袋は渋谷のようにひとが多いけど街の色が渋谷とはちがった。ちよつと小汚くて雑多な感じ。こつた煮な街の空気は6の故郷でもある大阪に似ている気がした。ここからうさぎさんやカヅヤさんと合流するのだ！ そしてもう一人。なぜ池袋で飲み会をするのか。それはある男にとって都合がいいからなのであった。twitter 文芸部の部員ではないのにやたら部員と仲のいい近所のおじさんの存在——山下さん——を忘れてはならない。

待ち合わせ場所の東口母子像の前で急にしゅつとした感じの若者が僕に向かって「動物とか好きですか」と尋ねる。僕は妙な商売にひっかかったのではないかと思い、あやしみながら「いえ、好きじゃないです」と応える。若者は「ゴリラとかは？ ゴリラはどう？」と聞いてくる。ゴリラ……そう いえばゴリラ好きなのとがいた……。「6さん！」種をあかすように山下さんが現れた！ 秀逸な登場の仕方にみんな驚いた。そしてうさぎさんも来られた！ うさぎさんはすでにお店にまで行き引き返して来ていただいたようで、事前に連絡できず申し訳なかった。やっぱり次回からもうちよつと連絡先とかを交換しておきたいなあと思った。そしてカヅヤさんがいらつしやつていよいよ大人数になった。居酒屋に行く途中の駅前の長い横断歩道で幼児が赤色の風船を手放して日居さんがぱつと掴み、幼児に返してあげた。何だか物語の一場面のようだった。

飲み会場所の居酒屋に到着して皆で注文をする！ 生中やウィスキーロック、ウーロン茶にカルアミルクなどみんな飲みたいものを頼む。乾杯の音頭は不肖6がとらせていただく。こんなことをするのは初めてだった。酒の席でカヅヤさんが小野寺さんのことを「とーいさんの編集後記にもありましたけど、小野寺さんはやはり部の潤滑油ですね」と小野寺さんのありがたさを熱弁されたとき、最近自分の小野寺さんの扱い方のあまりのぞんざいぶりが身に染みた……。カヅヤさんはお忙しい中、時間をとって足を運んでくださり、一緒に過ごした時間こそ少なかったけどまた会えてよかったです。と思った。

「粕谷栄一の詩集を持っています」とつぜんのリプライが来る。その主はNORANEKOさんだった。NORANEKOさんは文学極道で知り合い、Skypeなどでお話をするほど仲良くさせてもらっていた。池袋にいることをtweetすると反応してくださり、駆けつけてくれた。お酒の席はますます盛り上がり、愉しくなっていた。

うさぎさんとあんなさんが川上未映子ファンであることから川上作品の話題になる。情熱大陸の話におよび、川上や田中慎弥のようい出版社から部屋を用意されて館詰め状態にされるのは羨ましいですよ！ と皆で溜息をもらしあう。山下さんに「新潮社についておれを館詰めにしてください！」と言ってきたらどうですか？ と提案したら「行こうかな」と返してくれた。

飲み会是小野寺さんが急に眠り出すなんてことがあったけど、とても愉しかった。小野寺さんは次の日がお仕事でもあったので飲み会後は帰路につかれた。

その後はベローチェという店に入って雑談をした。

僕は日居さん、NORANEKOさんの三人で小説と詩それから批評について真面目な話をした。山下さん、あんなさん、うさぎさんも何だか笑いあっていたけど深い話をしているようだった。愉しい時間が過ぎるのは早く、何だか寂しかった。関東に住みたい、と切に願う(笑)。

池袋の夜の街でみんなと別れを告げた。日居さんと6は遠方組だったので始発を待ったためにデニーズで朝まで粘った。日居さんとはF.W.文の話、文学の話、恋の話など色々な事を話した。話していると夜なんてすぐに明けてしまう。明け方の街をふらふら彷徨いながら二人で山手線に乗り、新宿駅で別れた。日居さんとは「また会おう」と言いあった。

「さよならだけが人生だ」という言葉があるけど「再会」は物凄いスピードで流れていく時間に一瞬抵抗できるような気がする。春の始まりに気持ちが入り保てない時もあるけど、こんな風に愉しいことをまたしたい。またみんなと会いたい、そう思った。

*さいごに……

このような愉しい機会をいただきありがとうございます！ホストのあんなさん、愉しい時間をありがとうございます。またオフ会に忙しいながらも顔を出してくれた方や遠方から来てくれた方も感謝いたします。つぎのオフを待ち遠しく思いながら筆を置きます。

二〇一三年三月三十一日

記録 (二〇一三年二月～二〇一三年四月前半)

○入退部まとめ

- ・二月十一日(月) イコ 再入部
- ・四月一日(月) 尾崎枕 入部

○「Lit:tweet」(二月号) 合評会記録

◆合評会①

日時：二月十六日(土) 22:00～

場所：Skype

ホスト：安部

参加者：小野寺、イコ、る、日居

対象作品：小野寺「其のX。真央。初恋地獄篇」／る「雷の内部」
安部「ランナーたち」

◆合評会②

日時：二月二十三日(土) 21:00～

場所：Skype

ホスト：とーい

参加者：小野寺、日居、イコ、る

対象作品：常磐「行くな！ ガーゴン」／日居「横を向いたまま」
安部「黒牛の絵画」

◆合評会③

日時：三月二日(土) 21:00～

場所：Skype

ホスト：日居

参加者：日居、小野寺、とーい、イコ、る、常磐、緑川

対象作品：6 「繭たちのさざめき」／うさぎ「ストレインヂェイズ」
とーい「帰省」

○定例会・イベント記録

◆二月定例会

日時：二月三日(日) 20:00～

場所：Skype

ホスト：6

参加者：うさぎ、日居、小野寺、とーい、Rain坊、あんな、
安部、緑川

議題：①合評会の日どり決定

②次回「Lit:tweet」について

③これからのtwitter文芸部の活動について

◆三月定例会

日時：三月三日（土） 21：00～

場所：Skype

ホスト：6

参加者：日居、イコ、小野寺、Rain坊、うさぎ、る、緑川

◆芥川賞読書会

日時：二月二十四日（日） 20：00～

場所：Skype

ホスト：日居

参加者：小野寺、イコ、うさぎ、6、あんな

対象作品：第一四八回受賞作 黒田夏子「a bさん」

◆イコ&6の小説をもつと語りたい！

(USTREAMを使った対談)

日時：三月二十一日（木） 23：30～

場所：ustre.am/VnYv

話し手：イコ、6

◆東京オフ

日時：三月二十四日（日）

場所：世田谷文学館

ホスト：あんな

参加者：6、小野寺、日居、とーい、うさぎ、カツヤ、山下（ゲスト参加）、NORANEKO（友情参加）

★twi文ラジオ開始★

コンセプト：Web創作集団 twitter 文芸部がみなさんの眠れない夜にお送りするラジオ。

◆第一回「Li-tweet」四月号について①

日時：四月十一日（木）

場所：ustre.am/WBbh

話し手：る、イコ、6、日居

○その他の活動記録

◆ツイ文カフェ（チャットルーム）オープン

マスター：Rain坊

ここは、そういう場所。

編集後記

四月号編集長 常磐誠

常磐とtwitter文芸部の出会いは、とある小説サイトでお互いの名前を見聞きしていて、Twitterでやり取りをさせていただいていたとある元部員の方から声をかけていただいた時点でまで遡る。

当時旗揚げされてまだ日の浅かったtwitter文芸部という場所に籍を置くということを決意して初代部長であったイコさんに声をかけ、フォロワーした。『おれは作者が血を吐いてやっど書いた小説が読みたいです。おれからも血を吐いてやっど書いた小説を読んでもらいます』

この言葉に感動した。「刺激」という言葉は常磐の胸を確かに刺し貫いていた。だから、全く文学していないのにも関わらず入ってしまったのだ。もしかしたら、

「こいつ文学に関して無知すぎる。一体ここに何しに来たんだ!？」

そう思われた方だつて、きつといたことだろう。実際、常磐は入部してからしばらくの間ものの見事に幽霊部員だった。文学に対する無知だけは、本当にどうしようもなく、不安だった。

それを打ち破ってくださったのもやっぱイコさんだった。小説サイトに感想がつかない。読者の数が伸びないことに不安を感じて愚痴を言う常磐に、

「常磐はわかっているじゃない!」
と真っ向からぶつかってくださり、そして引っぱり込んでくださった。常磐が作品をtwitter文芸部

に寄稿するようになったきっかけだった。

あまり常磐という人間は器用な存在ではなく、本当にバカみたいに毎月、寄稿することだけを続けて来た。本当にこれは合評だとか、月刊誌に出すに値するだけの作品なのか? そんな自問自答などすることすらなかった。

出してみなよ。出したら話し合うよ。もつと良くしてやるよ! イコさんのみならず、頼りがいのある部員の皆様それぞれの言葉に常磐は支えられて来た。

文学がどうの、名作がどうの。それも必要かもしれないけれど、それだけじゃない。常磐の最初の不安は、何て事はない。壁、いや、ハードルですらなかったのだと。

ここは、文字を、それぞれの文学を受け入れてもらせる場所なのだ。置いておかれるのではなくて、手に取ってもらって、それぞれが目指す高みに歩き出せるようになる場所なのだ。そう思える様になっていた。twitter文芸部という場所は、そういう場所だと、当たり前のことだけを常磐はこの場を借りて言うおう。

最後に謝辞を。

編集部の経験すらない中で編集長を任せられ、きよろきよろと辺りを見回してばかりであった私を支えてくださった小野寺さんと6さん。「もう二人が編集長で良いよ」と思う場面が何度もありながらも、

何度でも私に編集長としての役目と責任を思い出させてくださり、そして支えてくださった事に深く感謝を。

分かり辛い特集でありながらもたくさんの作品が集まり、表紙を作成していただいたり、自由投稿に寄稿していただいたり。部員の皆様には感謝してもし尽くせない思いだ。

初代の部長であったイコさんにとつては一部員として復帰後初の寄稿、しかも巻頭紀行文での参加となり、また、常磐に校正というものを改めて教えていただいた。常磐の作品が一面赤く染まったこともここに追記しつつ(笑)、感謝したい。

編集長としては些か頼りない人物であったかも知れないが、編集長として関わる事ができたことを心より嬉しく思う。

そして、この月刊誌を手に取り、お読みいただいたすべての読者に、心よりの感謝を。

ここは、全ての作者と読者が文字を通じて生きていく世界。内部、外部という区切りをも超越して優しくも、厳しく受け入れ合い、高め合う。

きつとこの世界はもつと良くなれる。読者の為に血を吐いてやっど書いた作品を、作者の為に血を吐いて読み込む。お互いを思い合うこの世界がこれからも続き、発展していくことを願って、常磐の編集後記としたい。

Li-tweet 四月号

発行日

平成二十五年四月七日

編集長

常磐誠

編集委員

崎本智(6)、る、日居月諸

発行者

twitter 文芸部

ツイッターオフィシャルアカウント

<https://twitter.com/twibun>

ホームページ

<http://twibun.jimdo.com/>

執筆者(五十音順)

イコ

[@ikoriheeeee](https://twitter.com/ikoriheeeee)

小野寺那仁

[@onoderak](https://twitter.com/onoderak)

崎本智(6)

[@SakiAllende](https://twitter.com/SakiAllende)

とーい

[@10011040](https://twitter.com/10011040)

常磐誠

[@evagredra](https://twitter.com/evagredra)

日居月諸

[@das_unheimliche](https://twitter.com/das_unheimliche)

る

[@ru_mentanpin](https://twitter.com/ru_mentanpin)

R a i n 坊

[@_5384393400432](https://twitter.com/_5384393400432)

表紙デザイン

あんな

[@annecat1310](https://twitter.com/annecat1310)

まとめPDF作成

カツヤ

本誌はホームページに掲載している「Li-tweet 四月号」をプリント用に編集し直した物です。記事の無断掲載を禁じます。

© twitter bungeibu 2013